

第2部

学部・研究科のFD活動報告

- ・ 法文学部、人文社会科学研究科… 2
- ・ 教育学部、教育学研究科…………… 9
- ・ 理学部…………… 12
- ・ 医学部…………… 17
- ・ 歯学部…………… 23
- ・ 工学部…………… 44
- ・ 農学部、農学研究科…………… 49
- ・ 水産学部、水産学研究科…………… 67
- ・ 理工学研究科…………… 84
- ・ 医歯学総合研究科……………105
- ・ 保健学研究科……………117
- ・ 司法政策研究科……………124
- ・ 臨床心理学研究科……………127
- ・ 連合農学研究科……………135

法文学部・
人文社会科学
研究科

法文学部・人文社会科学研究科 FD 活動報告

法文学部における FD 活動は、1. 学生による授業評価アンケート調査、2. 授業公開・授業参観（研修授業）、3. 大学院の授業評価アンケート調査、4. 大学院の TA アンケート調査であり、平成 23 年度の成果は以下の通りである。

1. 学生による授業アンケート調査

今年度の授業評価アンケートは、6 月 27 日から 7 月 15 日の間、各教員が担当授業のいずれか一つを選ぶ形で実施されたが、アンケートの継続性に配慮しつつ、大きく 2 つの改変がなされた。その一つは、アンケート用紙の質問項目を簡素化・整理し、より回答しやすいものとしたことであり、もう一つは、実施時期を授業公開・授業参観も実施される後期から前期に移し、業務の分散化と学生・教員・事務職員の負担の軽減に配慮したことである。その結果、実施率は学部全体で 91.7% となり、前年度よりも 20% 近く上昇した。また、アンケートが行なわれた授業の形態を分析すると、講義とそれ以外の演習・実習・実験がほぼ 1:1 の比率であった。学科毎の結果を分析すると、おおむね以下ようになる。

1. 1. 法政策学科

(1) 講義

昨年度が全般的に一昨年度を上回る評価結果となったため、本年度もさらに上昇を続けることは難しいなか、この 3 年間で上昇傾向にある項目としては、(9)「授業のわかりやすさ」、(11)「話し方の明瞭さ」、および(14)「質問や意見に対する適切な対応」が挙げられ、授業に対する 10 段階の総合評価については大きく上昇した。

他方、昨年度を下回った項目としては、学生自身に関するものが、(2)「授業への意欲」、(6)「授業への満足度」、(7)「シラバスの達成度」、および(8)「受講態度の総合評価」であり、授業に関するものは、(10)「授業目標の明確な提示」、(12)「時間どおりの授業」、および(A)「板書等の読みやすさ」である。いずれも一昨年度と比較するとそのほとんどが上回っており、1 項目のみ同じ平均値であった。

また、過去 2 年間の評価よりも低下した項目が 2 つあり、学生自身に関するものとして、(5)「授業を通じた発見」、授業に関するものとしては、(B)「教科書や補助教材の効果的な利用」である。この点に留意し、教員は改善の努力が必要であろう。

最後に、過去 2 年間の評価よりも上昇してはいるものの、低い水準に留まっている項目は、(3)「教員への積極的な質問」および(4)「オフィスアワーの利用」である。教員の側から学生との意思疎通を図るなどの工夫が求められていると思われる。

(2) 演習

従来と同様に本年度も、講義の評価と比較して演習に対する評価は高い水準にあるが、演習について過去 2 年間で比べた場合、授業に対する総合評価が昨年度を大きく上回った以外、その他の項目はすべて昨年度を下回った。低下傾向にある項目としては、学生自身に関するものが、(5)「授業を通じた発見」および(8)「受講態度の総合評価」であり、授業に関するものは、(9)「授業のわかりやすさ」、(10)「授業目標の明確な提示」、および(14)「質問や意見に対する適切な対応」である。この現象に歯止めをかけるためには、教員の側が学生の自発性を引き出す工夫をするとともに、教員自身の改善の努力が必要であ

ろう。

また、学生生活全体の支援として整備・充実してほしいものという設問(17)に対する回答として、(1)「個人別学習の助言指導」を挙げた学生が過去2年間と比べて約3倍に増加していることから、学生は教員の側からの積極的な働きかけを求めているものと思われる。

1.2. 経済情報学科

(1) 講義

昨年度と比較して、若干であるが総体的に評価が低くなっている。今年度は、昨年までと異なり前期にアンケートを行ったためにアンケートの回答数が増えた事も影響しているのかもしれないし、1年生が大学に入学してすぐにアンケートに回答していることも影響しているのかもしれない。(8)「この授業に対する総合評価を10段階で回答して下さい」については低評価に推移している。一方で、(B)「教科書やプリント等の補助教材が効果的に用いられたか」の項目が唯一昨年度に比べて評価が低上昇している。そのほかの項目についての評価はほとんど横ばいで、評価の分布の形も変化がなかった。このことから授業評価が導入されてから一定の時間を経て、教員の授業への取り組みとそれに対する学生の評価が落ち着いてきていることがわかる。その中で、例えば(3)教員への質問についての結果と(14)オフィスアワーの利用の結果といったようなその評価が連動しているものについては、比較的、改善策を模索することが出来ると思われる。また、(17)の学生生活の支援については、昨年度、一昨年度と同様に学生の不満が浮き彫りになっており、物理的に解決できる部分は教員側が早急に努力していく必要があるだろう。

(2) 演習

講義と同様に、昨年度と比較して、総体的に評価が低くなっている。これは、講義と同じく、今年度から前期にアンケートを実施したことで演習に参加してすぐの2年生が演習に対して大きな期待を持って受講した結果、かなり厳しい評価になったのではないかと考えられる。ただ、下落したとはいえ、その下落幅はわずかであって、このことから授業評価が導入されてから一定の時間を経て、教員の授業への取り組みとそれに対する学生の評価が落ち着いてきていることがわかる。今後はさらに、学生の演習に対するモチベーションや積極性をいかに引き出すための努力を引き続き進めていくことが必要だろう。また、例年のことながら、演習についてのアンケートは教員と学生が見えるところで行うことになり、どうしても講義よりも匿名性が損なわれてしまい客観的な評価になりにくい側面がある。したがって、アンケートの取り方も依然として今後の課題となるであろう。

1.3. 人文学科

(1) 講義

今年度は昨年度と比べ、質問項目自体は変わっていないものの、質問の順番が異なる場合があるので、そうした影響が出ていることも想定されるが、昨年度よりも全体として平均値が下がったものと逆に上がったものとが相半ばする傾向が見られるようである。

平均値が下がったものとしては、(11)(A)(B)のように、話し方や板書など授業の技術的な側面に関わるものが挙げられ、改善の余地があることを示唆している。また、一方で(5)のように授業を通して発見があったという数値が下がっているのは、下に述べるように総合評価が上がっているのと反対の傾向を示したおり、残念な結果となった。(9)のように学生自身の意欲に関わるもので数値が下がったのは、学生

が自身を厳しく評価した結果と受け取ることができるものがある。

逆に平均値が上がったものは、授業に対する総合評価について過去 4 年間で最高になっている。質問に答えてもらえたかという質問についても同様の傾向を示している。

学生の要望の中で、学習スペースの確保を望む声が引き続き多いことがわかった。また、図書よりもパソコンを求める傾向が窺われる結果となった。

(2) 演習

新しいカリキュラムの学生が 2 年生になり専門科目の演習を受講始めたことが、昨年度と異なった要素としてある。また、このアンケート調査が後期実施から前期実施に変わったことが影響を与えている可能性がある。

前者については、1 年次に取材学習などを通じてグループ内で意見交換を行ったり、グループ外へ向け成果発表をしたりと、授業で意見を述べる機会が増えたことが、演習での質疑応答の活発化を後押ししていると考えられる。ただし、1 回のアンケート結果だけから結論づけるのは危険だが、今後注視していくべきところであろう。

後者については、(9)の結果に表れているように、演習を 1 期終わった段階と、2 期終わった段階で行った結果では演習の目標や意義の浸透度が異なってくることが予想され、数値の低さはそのあたりが原因となっているのではなかろうか。

全体の傾向としては、おおよそ例年並みの結果が出ている。

2. 授業公開・授業参観（研修授業）

今年度の授業公開・授業参観は、11 月 21 日から 12 月 16 日まで実施され、法文学部の全教員に対して、期間中に 1 コマ以上の科目を公開するとともに、公開される授業の中から 1 コマ以上参観することが求められた。また、FD 活動をより実効あるものとする目的で、授業参観報告書の中に「授業をよりよくするアイデア」を募集する欄を設け、各教員の幅広い意見を募るという新しい試みもなされた。その成果は、おおむね次のように総括される。

2. 1. 授業公開実施による成果について

全員参加による授業公開・授業参観は、今年度で 6 年目である。過去 5 年間の授業実施により、各教員は様々な工夫、改善を続けてきたことが報告書から読み取れる。これまでの工夫、改善は、講義形式の授業では以下の 3 点に要約できる。

(1) 学生に興味・関心を持たせるための工夫、改善

学生に興味を持たせる教材の選択や配布資料の作成がなされて映像や音響などの多様なツールが駆使されている。また、新聞記事の利用も挙げられる。

(2) 学生の理解度を高めるための工夫、改善

パワーポイントを使って視覚的に理解させる工夫や、見易く分易い板書に努めるといった工夫がなされている。

(3) 双方向的な授業スタイルを確立するための工夫、改善

学生に質問したり言わせたりして、教員からの一方的な授業にならないようにする試みが見られる。毎授業で質問用紙を配布するという例もあった。

以上3点は、公開授業の実施を通して改善された点である。次に、演習形式の授業の工夫、改善は、次の2点に要約できる。

(1) 学生の自主的な発言を引き出すための工夫、改善

発表レジュメの事前配布、テキスト以外の資料の配布、ゼミ生自身によるテーマの設定、といった取り組みが挙げられている。

(2) 学生同士の討論を活発にするための工夫、改善

司会進行役やコメント役などの役割分担、質疑応答の時間の確保やグループによる進行など、授業環境の改善が図られている。

しかしながら、このような改善の努力がなされながらも、他方で、学生の発言の少なさについての指摘も多く見られた。この点は、就職活動におけるコミュニケーション能力の醸成という側面からも、今後引き続き改善の取り組みが必要であろう。

2.2. 授業公開の在り方について

授業公開・授業参観の実施状況や、報告書で出された意見などに基づいて、今後の授業公開のあり方を考える上で参考になる事柄をまとめると、次のようになる。

(1) 参観者数（参観率）

今年度は(c)参観率が60%と近年から10%近く増加し、多少改善の傾向が見られた。特に推薦授業の参加者数が増えており、推薦授業を設けて2年目となったことで参観を促した効果を一因として挙げることができる。

(2) 被参観率

今年度は(e)被参観率が約35%と下がっている。これは、参観者数は前年度より増加したにも拘わらず、被参観率は下がっていることを示すが、推薦授業への参加者数が増えたことに起因するものである。したがって、推薦授業を選定することでFD活動をより有効にしようという方策が推薦授業の参観者が増加したというよい成果につながる一方で、被参観率算定の分母である授業公開数が多いために、逆説的に被参観率が低下するという結果を招いている。

(3) 実施時期について

昨年度と同様に見直しの意見がかなり見られた。具体的には、隔年での実施、公開授業数を絞り込んだうえでの各教員の数年に一度の担当などであるが、これらの意見は、授業公開の形骸化についての指摘とも結びついている。実施時期の見直しは、全員参加、毎年実施を原則とする全学の方針とも関わってくるが、今後真剣な議論が必要であろう。また、前期および後期の実施を求める意見、後期のみの限られた期間であると参加しにくいという意見があった。

(4) 実施方法について

全員による授業公開は、参観者のいない授業を生むという意見が見られた。今年度も、参観者のいない授業がかなりあり、授業公開の形骸化を避けるためには、この問題についての議論と対策が不可欠である。

(5) 推薦授業について

昨年度に引き続き、評価の高い授業を公開していただき多くの教員が参観し自分の授業に生かしてもらおう目的で、昨年度の授業参観報告書等を参考にFD委員会の推薦する授業を推薦授業として6科目選定

させていただいた。参観者 48 名のうち推薦授業の参観者は 11 名で、比率としては、昨年度（約 15%）を上回る約 23%となっており一定の効果を認めることができよう。

3. 大学院の授業評価アンケート調査

今年度の「人文社会科学研究科授業評価アンケート調査」は、6 月 27 日から 7 月 15 日にかけて実施された。調査の対象は、各教員の担当授業のうち 1 科目としたが、博士後期課程を担当している場合は、博士前期課程と博士後期課程それぞれ 1 科目とした。アンケートの項目内容は、継続性を重視する観点から、従来と同様としたが、今年度は、調査の実施率を向上させるために、学部授業に対する授業評価アンケートと実施期間を同一とし、教員への周知徹底を図った。アンケートの結果は、おおむね次のようにまとめられる。

- (1) 大学院課程の授業評価アンケート調査は今回で 6 回目だが、研究科全体の実施率は 80.5%で、前年度の 73.9%から幾分上昇した。本アンケート調査は、授業改善のための基礎的データを収集するために不可欠なものであるから、実施率を高い水準で維持するため、今後もアンケート実施に対する各教員の意識向上、アンケート実施依頼の徹底措置が必要であろう。
- (2) 今回の調査でも、授業についての 5 項目（1～5）と受講者に関する 2 項目（6, 7）のすべてにおいて 5 段階で 4 以上の評価が 9 割を超えており、大学院課程の授業が高く評価され、受講者も熱心に取り組んでいることがわかる。自由記述でも、授業や担当教員に対する肯定的評価が多く見られた。ただし、いくつかの授業については、自由記述においてテキストや授業内容などの改善を求める声もあり、さらに授業内容向上のための努力が教員側に必要だと考えられる。
- (3) 過去 5 回の調査と今回のアンケート結果を比較しても全体的傾向は一貫しており、全ての調査において全項目は 5 段階評価で一貫して高い評価を得ている。こうしたアンケート結果の一致は、本研究科の授業に対する受講者の満足度が高いことを示しているといえよう。

以上のように、人文社会科学研究科では、受講者から高く評価される効果的な授業が実施されていると評価することができる。とはいえ、この結果に満足することなく、特に自由記述において指摘された問題点等を考慮しながら、全教員がさらなる授業改善を試み、FD活動に積極的に取り組むことが必要であろう。

4. 大学院の TA アンケート調査

「TA アンケート調査」は、授業における教育支援者としてのティーチング・アシスタント（教育助手。以下、「TA」と記す）の在り方を教員間で検討することを目的に、平成 19 年度より開始された。今年度は、法文学部後期授業に TA として働いた人文社会科学研究科および理工学研究科生体工学システム工学専攻（博士前期課程）の学生全員を対象として、平成 24 年 1 月 18 日から 2 月 8 にかけて実施された。その結果は、以下のようにまとめられる。

- (1) TA に対するアンケート調査は今回が 5 度目であったが、アンケートへの回答が約 9 割以上寄せられ、TA の活動実態を知る上で、有意義なデータが得られた。
- (2) 「事前準備」「教員の指導等」「TA のメリット」の項目の結果から、TA は教員との間で適度な連絡をとりつつ、熱心に業務に従事し、TA 制度が効果的に実施されていることが確認できる。また、「TA の負担」については、研究活動等の大きな支障にはなっていないが、時期や担当授業によって

は負担と感じられている場合もあった。この点については、指導教員が TA の状況を把握し、柔軟な対応をとることが求められるだろう。

以上の結果から、今年度も、人文社会科学研究科の TA 制度は、学生へ教育経験の機会を提供し、業務の遂行も高く評価できることが確認できる。

教育学部・

教育学研究科

教育学部・教育学研究科FD活動報告

【1】はじめに —平成23年度の主な活動—

平成23年度の教育学部教育改善委員会の委員構成及び年間の活動内容について簡単に報告する。

教育改善委員会委員

- 日隈正守 : 文科系 (委員長)
假屋園昭彦 : 教育系
深川和良 : 理科系
石田匡志 : 実技系
中島祥子 : 生涯教育系, 自己評価委員会
山口武志 : 教務委員会
浅野陽樹 : 研究科運営委員会
松井智彰 : 全学FD委員会

教育改善委員会は原則毎月1回開催され(本年度は11回開催), 教育学部及び教育学研究科の教育改善のための活動を行った。主な活動は次の通りである。以下それぞれの活動の概要を報告する。(但し, 7の平成23年度教育改善委員会報告書を作成については省略する。)

《平成23年度の主な活動内容》

1. 第4回学生FDサミット・2011夏(於:立命館大学)に参加
(平成23年8月27日~8月28日)
2. 教育学研究科の授業アンケートを実施
(平成23年11月16日~12月16日)
3. 授業公開および授業参観を実施
(平成23年12月1日~12月22日)
4. Moodleによる授業アンケートを実施
(平成24年1月23日~2月6日)
5. 教育改善委員会学生実行委員会主催第7回FDシンポジウムを開催
(平成24年1月27日)
6. 教育学研究科の授業改善に関わる座談会を開催
(平成24年2月6日)
7. 平成23年度教育改善委員会報告書を作成
その他, 教育改善委員2名が, 24回開催された学生実行委員会にオブザーバーとして参加した。

【2】教育学部の教育改善に関する活動報告

1. 第4回FDサミット・2011夏(於:立命館大学)

教員が学部学生を引率して, 立命館大学衣笠キャンパスにおいて開催された「第4回学生FDサミット」に参加した。このFDサミットでは, 全国の学生FD委員が集結し, 2日間に亘って今後のFD活動等についての議論がなされた。他大学のFD委員と交流し意見交換や議論を行うことで, 問題意識を共有することができた。本学部において学生FD活動を主導する学生にとっても良い刺激となったと思われる。

2. 授業公開および授業参観

平成22年度に引き続き殆どの専任教員が授業公開し, 公開授業数は96に及んだにもかかわらず, 実際に参観がなされた授業科目数は18科目(授業科目総数19科目)で約19パーセント(全公開授業科目総数133科目の約14パーセント)に止まっている。全体の80パーセント以上の授業が参観されない状態である。

授業参観報告書の記述内容の中で, 自分の授業に取り入れたい事項を直接的・間接的に記載しているものは約43.5パーセントである。他の教員の授業を参観して, 積極的に自己の授業改善に結びつけようとする意図がみられた。また参観した授業に関して改善の余地がある項目及びその具体的な方法の提案等が約23パーセントにみられた。このように, 授業参観報告書の内容を授業担当教員にフィードバックすることで授業改善に資することになると考えられる。

3. Moodleによる授業アンケート

本年度も, 学部授業については, アンケートはMoodleシステムにより後期授業の最後の2週間に実施した(前期実施分は試行)。昨年度から行っているMoodleを活用して授業アンケートを実施することにより, 集計作業の軽減とアンケート結果のフィードバックの迅速化を図ることにした。

アンケート内容は学生自身に関すること, 授業に

関することで16項目の質問からなっていた。結果は、学生はシラバスを事前にチェックし、講義も比較的まじめに受講しているものの、やや自主性や積極性が弱いという傾向がみられた。また課題として、講義時間帯以外に Moodle でのアンケート回答の入力を学生に依頼した場合、どうしても入力率が低くなってしまふという点が浮き彫りになった。

4. 教育改善委員会学生実行委員会主催第7回FDシンポジウム

教育学部教育改善委員会学生実行委員会の学生が主体となって、教育学部教育改善シンポジウム

「EDU 会議 2012—みんなの理想の大学にするために—」が開催された。参加者は、教職員と学生を合わせて約220名で、内容は、より良い大学の実現に向けてのグループ討論及び全体討論であった。

シンポジウムでは、以下に示す4つのテーマ

- (1) 理想の授業とは、受けたい授業とは
- (2) カリキュラムについて
- (3) 教員採用試験対策について
- (4) 教員志望者を増やすためには

を用意し、参加者を8グループに分けて、各テーマについて2グループがディスカッションした。その後全体で発表・質疑応答がなされた。学生及び教員が、今日の大学の在り方について再認識し、より良い大学像に向けての課題を共有することができた。

【3】教育学研究科の教育改善に関する活動報告

1. 教育学研究科の授業アンケート

今回のアンケートは、座談会を踏まえた事前アンケートという位置づけで実施されたが具体的な有益な意見が多数得られた。特に、研究科共通科目等の議論・討論形式による学びに対する評価は高く、さらに充実した議論・討論を求めた具体的な意見は、今後の授業改善の手助けとなる。評価が高い分、期待や要望が高いことを真摯に受け止め、手始めに得られた意見の周知に努めたい。また、研究・学習環境に対する支援については、今後も研究科全体として継続していくべきだと考える。

また、本アンケートを通して大学院生の求める大学院教育について知る事ができ、これまでの教育改

善活動の成果が伺えた。一方で、大学院生からの要望に対して改善した方がよいにも関わらず改善されていない内容や、最大限努力して行った活動に対する不満等も明らかになった。したがって、大学院教育に対する教職員側と大学院生側双方の考え方とこれまでの活動に関する情報の共有化を図る事が最も重要な課題であると考ええる。

2. 教育学研究科の教育改善にかかる座談会

教育学研究科の授業内容と学習環境に関するアンケート調査の結果を基に、「教育学研究科の目指す方向性」と題して院生座談会を開催した。出席者は22名で、授業内容や学習環境に関する様々な意見が得られ、改善方法について検討した。アンケートでは得られない大学院生の本音が聞けるという点で有意義であった。一方で、アンケート調査や座談会で得られた有意義な情報や課題を、いかに関係教職員と大学院生に周知し共有化するかという点が、今後検討すべき課題として浮き彫りになった。

【4】おわりに

本年度のFD活動においては、他大学の先進的な教育改善活動を視察した学部学生らが主体となって学部シンポジウムを開催し、内容の充実が果たされるなど、複数の事業を有機的にリンクさせることによって成果が出たものが幾つかあった。この背景には、ここ数年の年間を通した学生実行委員会の活動の蓄積と、それに裏打ちされた学生自身の教育改善に対する意識の高まりがあると思われる。しかし同時に、授業アンケート回収率や授業参観者数の低さや、相変わらず学生自身の授業内容理解のための自助努力が不足したままで改善が見られないなどといった課題も残された。教育学部・教育学研究科では、これらの課題とその原因を正確に認識し、教育に関する諸活動をより良いものにしていくために、今後も教育改善委員会を中心に教職員と学生とが協力して教育改善の取り組みを充実させていくつもりである。

理学部

平成23年度理学部FD活動報告書

平成23年度に理学部で実施した主なFD活動は以下のとおりである。本報告書ではそれらについての概要を記載する。

- (1) 学生による授業評価アンケートの実施（7月、12月）
- (2) 授業公開および授業参観の実施（6月、12月）
- (3) FD講演会の開催および学生・教職員ワークショップへの参加
- (4) FDミニ図書館の開設
- (5) ピア・サポート研究室紹介の実施

1. 学生による授業評価に関するアンケート調査の実施

理学部における授業アンケートの目的は受講学生の率直な声を担当教員に還元することにより個々の授業や学科のカリキュラムをより有益なものへと改善していくことにある。平成13年度に初めて実施する際に集計結果を教員評価のための資料として利用しないことを取り決めている。今年度の授業アンケートは、原則として不定期実施科目、集中講義、教職専門科目、非常勤講師担当科目を除く全科目を対象に行われた。アンケート用紙は、授業ごとに受講者分を担当教員に渡し、授業時間の適切なタイミングで記入させた。13の質問項目を設定し、それぞれ5を最高値（高評価）とする数値で評価するようになっている。自由記述欄も設けているが、この種のアンケート取ることが共通教育と専門教育で定着するに従って自由記述欄に何らかの意見を記述する受講生が減少しているように思われる。受講しているほとんど全ての授業でアンケートへの記入を要求されるのであるから、受講生の側が「アンケート慣れ」の状態になって飽きてしまっているのかもしれない。記入済みの用紙は所定の封筒に入れて学生が自主的に（または学生の代表が取りまとめて）学生係に持参するか、教員が学生係に持参することにした。

このアンケート結果は、授業ごとの回収済みアンケート用紙の現物と、集計したデータを担当教員に返却し、担当教員からは結果に帯する自己分析書を提出してもらっている。理学部FD委員会ではアンケートの集計結果と提出された自己分析書を保存し、必要に応じて学部および各学科のカリキュラム改善のための基礎データとして活用できるようにしている。以下に23年度のアンケート結果について報告する。アンケート回収枚数・回収率については例年とほぼ同じである（回収枚数／実施科目受講者総数は前期69%、後期65%）。23年度の全質問項目の評価点平均値は前期、後期ともに3.81と4.0に近い高い値となっている。この種のアンケートでは回答者である受講生にとって最高または最低の評価点はつけにくいと思われることを考慮すると、平均値が4を大幅に超えるようになる（大多数の学生が5と回答し、3以下の回答がほとんどないような状況）ことはなさそうである。平均値が4.0に近いということは十分に高い評価に到達しているものとみなすことができる。過去4期（2年

23年度理学部前期
授業アンケート結果

部外報告用(統計データのみ表示)

学生によるアンケート結果をまとめましたので、授業の改善にお役立て下さい。

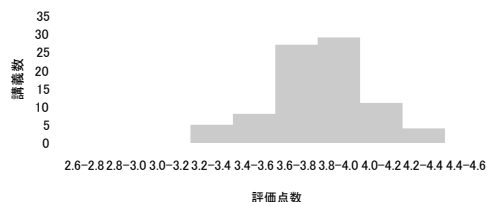
注意点

1ページ目にアンケート全体のまとめ、2ページ目以降に質問項目ごとの回答平均値と頻度分布が書かれています。各ページ中央の太線より上側が本授業のデータ、下側が学部全体および開講学科別のデータです。ただし理学部共通科目(理学の在り方)は省略し、2学科で開講している科目は代表担当教員の所属学科に入れてあります。

回答平均値の計算では、「わからない、その他」の数を除いてあります。質問11、12以外では、この平均値の数値が高いほど、学生の評価が高いこととなります。さらに13個の質問全体の評価点平均を計算しました。その際、質問11と12では、回答3に5点、4と2に4点、5と1に3点を与えて平均してあります。右図は、このようにして計算した理学部全科目の授業点数の頻度分布です。自分の授業がどの程度の位置にあるかの参考にしてください。

「受講者数」は理学部所属学生の数です。他学部生を含む授業では回答枚数が受講者数を超えることがあります。

全質問評価点平均の頻度分布(理学部全体23年度前期)



時間割コード	講義題目	代表担当教員名	学科	受講者数	回答枚数	学生の所属						回収率	評価点平均値							
						数理	物理	生化	地環	その他	学科未記		全質問	質問1,6,7	質問2-5	質問8-13				
			学部合計	全体	3254	2258	408	371	802	496	47	134	0.69	3.81	3.78	3.45	4.06			
			平均																	

23年度理学部後期
授業アンケート結果

部外報告用(統計データのみ表示)

学生によるアンケート結果をまとめましたので、授業の改善にお役立て下さい。

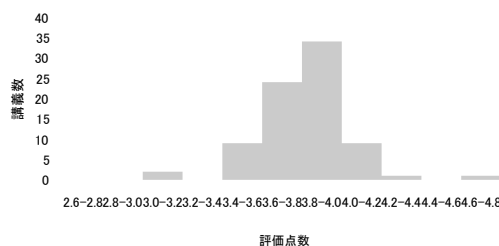
注意点

1ページ目にアンケート全体のまとめ、2ページ目以降に質問項目ごとの回答平均値と頻度分布が書かれています。各ページの赤い表示(文字とグラフ)が本授業のデータです。開講学科別の集計の際には、複数学科で開講している科目は代表する担当教員の所属学科が開講学科であるとみなしています。

回答平均値の計算では、「わからない、その他」の数を除いてあります。質問11、12以外では、この平均値の数値が高いほど、学生の評価が高いこととなります。さらに13個の質問全体の評価点平均を計算しました。その際、質問11と12では、回答3に5点、4と2に4点、5と1に3点を与えて平均してあります。右図は、このようにして計算した理学部全科目の授業点数の頻度分布です。自分の授業がどの程度の位置にあるかの参考にしてください。

「受講者数」は理学部所属学生の数です。他学部生を含む授業では回答枚数が受講者数を超えることがあります。

全質問評価点平均の頻度分布(理学部全体23年度後期)



時間割コード	講義題目	代表担当教員名	学科	受講者数	回答枚数	学生の所属						回収率	評価点平均値							
						数理	物理	生化	地環	その他	学科未記		全質問	質問1,6,7	質問2-5	質問8-13				
			学部合計	全体	3327	2157	542	508	341	610	37	119	0.65	3.81	3.82	3.46	4.05			
			平均																	

分)は3.56から3.83の間であり、多少の変動はあるものの十分に高い水準を維持している。評価点の頻度分布を見ると、前期、後期とも頻度のピークが評価点平均値の3.8から4.0の間にあり、過去4期では最も高い。今後もこのような高い水準を維持するには、各教員による継続的な授業改善の努力が必要であろう。

2. 授業公開と参観の実施

前期は6月27日から7月8日、後期は12月5日から12月9日に実施した。前期の公開授業数は8件で参観者数は6人、後期の公開授業数は9件で参観者数は5人であった。教員の多忙化が進むなかで、この種のイベントにノルマのようなものを課すと、FD活動を形骸化させることになり、教員をFD活動から遠ざける恐れがある。今年度の方

針として授業公開・参観への参加は教員の自主性にまかせることとし、委員会としては数値目標などを掲げなかった。結果的に公開授業数、参観者数ともに前年度より減少した。参観の有無にかかわらず公開授業を担当した教員全員が「授業公開・参観報告書」を提出していることから、これらの教員はFD委員会が旗を振り、太鼓を叩かなくてもFD活動の意義を理解できているものと思われる。報告書の内容からも参加した教員が授業改善に真摯に取り組んでいることがわかる。この成果を核として、授業公開と参観の意義を広めて自主的な参加を増やすような取り組みを行う必要がある。

3. FD講演会の開催および学生・教職員ワークショップへの参加

理工学研究科・工学部との共同企画として 10月21日にFD講演会を開催した。

演題：「金沢工業大学の科学力教育の現状と課題」

講師：金沢工業大学人間情報システム研究所教授 長尾隆司先生

参加者：46人（理学系教員 8人、工学系教員 28人、研究科・工学系事務 10人）

長尾先生は金沢工業大学の教育改革を学科から全学レベルにいたるまで長年主導してこられた方である。講演は先生の経験に裏打ちされた説得力があり、今後のFD活動の方向性を考える上で大いに参考にすべきものであった。要約すると次のような内容である。一般に地方の中規模以下の大学で「教育改革」を行うと、学生への面倒見のよさ（主に手厚い教育体制と就職指導）を強化する方向に進みやすい。しかし、「面倒見のよさ」を売り物にして受験生を確保しようとするとう受験生の学力レベルの低下が避けられず、低下した学力に見合う「さらなる面倒見の良さ」を追求する状態に陥る。これでは学生のやる気は引き出されず、教職員の士気が下って行き詰まりになる。学力があってやる気に満ちた受験生は「面倒見のよい教育体制」に魅かれて受験校を選んではいない。受験生から見たときに、その大学に「入学する価値がある」と感じてもらうには、大学で行われている「研究」が受験生にとって魅力のあるものでなくてはならない。つまり、教員が存分に研究活動を行えるような条件を整えることが教育改革を成功に導く鍵である。

全学におけるFD関連活動にも積極的に参加した。7月13日に開催された「ピア・サポート学生ワークショップ」に理学部所属の学生7人が参加している。この人数は学部別で最多である。12月22日開催の学生・教職員ワークショップ「鹿大らしいピア・サポートを創り出そう」には理学部所属の学生5名、職員1名、教員4名が参加している。

4. FDミニ図書室の開設

FD活動に関連する著作物が多数出版されている。それらの中には理学部の教員にとっても授業改善や学生指導の上で参考になるものがあるはずである。FD委員の経験者を除けば、FD活動について知見がある教員が学部内多数存在するわけではないので、書籍から一定の情報を得ることは有用であると思われる。しかし、自分の専

門とは直接関係がなく、役に立つかどうかもわからない書籍を教員個人が複数購入するというような状況も考えにくい。そこで、全学FD委員会において申請・配分されたFD活動経費によりFD活動に関連する書籍を購入し、理学部の各学科の図書室または事務室に配置して利用に供している。23年度に購入したものは下記のとおりである。

著者	書名	出版社
宮下賢路	「教職員のためのクレームリスクマネジメントの最新技術」	エコー出版
清水ほか	「学生と変える大学教育」	ナカニシヤ出版
ノエル・エントウィスル	「学生の理解を重視する大学授業」	玉川大学出版部
佐藤浩章	「大学教員のための授業方法とデザイン」	玉川大学出版部

5. 研究室紹介コーナーの設置

ピア・サポートの一環として「研究室情報を低学年生に提供」する事業に取り組んだ。生命化学科と地球環境科学科では学科管理の掲示板の一角に、研究室紹介のポスターを展示した。ポスターには各研究室に所属する学生の居室の情報を追加し、学生間の情報交換に役立つよう配慮した。物理科学科では大学祭等において低学年向けに研究室情報を提示する企画（上級生の参加を含む）をすでに行っていて、今年度も同様に実施した。数理情報科学科では研究発表形式で低学年生向けの研究室の説明を行った。次の写真は地球環境科学科の「研究室紹介コーナー」である。



医学部

医学部医学科 FD 活動報告

1. はじめに

医学教育を巡る国内外の動向は、大きく変化し、グローバルな教育の基準を超えるプログラムによる医師養成が全国医学部に求められるようになってきている。医学部 FD 委員会医学科部会は、平成 23 年 3 月に改訂された医学教育モデル・コア・カリキュラムで充実が求められた診療参加型臨床実習の推進をはじめとする教育改善を目的とした取組を実施した。

本年度は学生による授業評価アンケートを 1 年から 6 年までの全ての科目を対象として実施し、国内の医学教育の最新の動向を共有する講演会の実施、入試委員会との共催による講習会の実施を含む活動を行ったので報告する。

2. 学生による授業評価アンケート

平成 23 年度は新たに 5 年生 22 診療科、6 年生の臨床実習ローテーションの授業評価を開始し、全専門科目のアンケートを実施した。また、6 年次の実技試験 OSCE、卒業試験についても評価を実施した。

1~4 年の 45 科目から 4002 枚（平均 75 枚/領域）、5 年次臨床実習では 2028 枚（平均 92 枚/診療科）、6 年次臨床実習では 270 枚（平均 90 枚/診療科）の回答が得られた。医学科の授業は Semester ではなく、不規則な時間割で編成されている。5 年の臨床実習では 2~3 週間毎に小グループでの実習が終了するたびにアンケートを実施した。アンケートは学生が記入後、教員や指導医の目に触れずに医歯学教育開発センターに届けられ、速やかに集計して結果と自由記載内容を科目・領域責任者に報告した。5 年の臨床実習では 3 期に分けて各期毎に集計し、全てのアンケート結果は医学科 FD 部会、医学部教務委員会医学科部会、医学科会議に報告した。

全科目のアンケート結果の詳細は省略する。

新たに実施した臨床実習のアンケートでは、学生は各ローテーション毎の

- 自身の学習に対する自己評価（積極的な学習、自主学習、診療ルールに従った行動、患者・スタッフへの態度、グループメンバーの支援と協働）
- 修得内容（医療面接、身体診察、臨床推論・判断、診療録記載、医療安全、医療倫理、チーム医療、地域医療）
- 実習の形態（診療参加型、模擬診療型、見学型の時間比率）
- 担当患者数
- 症例提示回数
- 経験した医療の現場（外来、入院、救急・時間外）
- 指導者（教員、その他の医師、研修医、学外病院医師、看護師等医療スタッフ、上級生）
- 指導医の指導
- 全体評価

について回答した。これらにより 5 年の臨床実習では、診療参加型は 34% であり、6 割程度が見学・講義の実習であることが明らかになった。6 年の臨床実習における診療参加型の比率は、附属病院での実習は 42.5%、学外実習（鹿児島県内）72.7%、（鹿児島県外）64.7%、海外 40.9% であった。学内での実習を診療参加型実習へ改善する必要性が明らかとなった。アンケートにより実習の実態が明らかになるとともに、5 年の 3 期の各評価を比較すると全体評価の改善傾向が見られ、アンケート調査とフィードバックの効果が推測された。

3. 講演会

タイトル 医師臨床研修制度の現状と専門医制度のこれから～医師人材育成と地域医療～

日時 2011年11月18日(金) 17:30～19:30

講師 村岡 亮

(国立国際医療研究センター医療教育部副部長
厚生労働省医政局医事課医師臨床研修推進室 臨床研修調査員)

主催 鹿児島大学医学部FD委員会

共催 附属病院卒後臨床研修センター

医歯学総合研究科FD委員会

会場 鶴陵会館中ホール

概要 医師臨床研修制度の目的と概要、制度の緊急見直しの背景と内容、臨床研修制度の今後、後期研修制度(専門医制度)の動向についてご講演いただいた。

医師臨床研修制度は昭和21年のインターン制度、努力規定であった昭和43年からの旧医師臨床制度を改善するために平成16年に導入された。一般的な疾病に初期対応できる基本的な臨床能力を有する医師を育成する臨床研修とその後の専門医育成の後期研修により、総合性と専門性を持つ医師育成の制度が作られた。導入にあたり医師法の一部が改訂され基本理念、到達目標、体制、指導医の規定、安全管理、マッチングプログラムが整備された。医師臨床研修制度の導入により、医学生意識は、将来を自分で選択する、臨床研修の質を問う、博士号より専門医資格、総合医志向へと変化し、大学病院での研修が45%に低下した。全国の地域による研修医採用実績の増減が起こり、医師不足・偏在への対応と研修の質の向上を目的として、平成22年から制度の見直しが行われた。この見直しによりプログラムは弾力化し、基幹型研修病院指摘の基準が強化され、都道府県別定員の上限が設定された。今後は平成27年に見直し制度に基づく研修が開始される予定であり、それに向けての評価が計画されている。後期研修制度は医師偏在問題と直結しており専門医制度改革が必要となっている。専門医の在り方が検討され、日本専門医機構の設立が進められている。医療機関へのアクセスを含めた詳細な地域の専門医分布を検討した上で、初めて必要な専門医数の設定ができるものであり、医療用GISの作成も現在行われている。

ご講演の後に、鹿児島における医師育成について参加者と活発な意見交換が行われた。

4. 講習会 (FD委員会医学科部会主催に限る)

● 入学試験における面接の評価方法

日時 ①2012年1月25日(水) 16:30～18:30 ②2011年2月13日(月) 15:00～17:00

主催 医学部FD委員会医学科部会

共催 医学部入試委員会医学科部会

会場 第一会議室

講師 医学部FD委員会医学科部会委員、佐野 輝、桑木 共之(入試委員会医学科部会長)

参加者 医学科入学試験面接官(教授)

概要 受験生の能力を引き出す面接を行い、医学部医学科のアドミッションポリシーに基づいた評価基準に従った、公平で信頼性の高い評価を行う方法を講義とロールプレイで習得した。

● 第7回 指導医・指導者講習会 「臨床実習のカリキュラム開発」

日時： 2013年3月4日(日) 9:00～14:00

主催： 医歯学教育開発センター

共催： 医学部FD委員会医学科FD部会

会場： 鶴陵会館 中、小ホール

講師： 田川 まさみ (医歯学教育開発センター)

高村 昭輝 (金沢城北病院 小児科、地域医学教育センター)

参加者： 本学医学科5年6年の臨床実習で学生指導にあたっている附属病院ならびに医療機関の教員、指導医： 11名

概要： ECFMGの2023年問題に象徴されるように、医学教育のグローバル化に伴う教育の質保証への関心が非常に高まっており、特に本邦医学部における臨床実習の質、量、実施方法を国際基準に見合うものに改善することが急務とされ、活発な検討が全国、各大学で行われている。全国の動向をふまえ、本学の臨床実習のカリキュラム作成を学ぶワークショップを行った。また、平成23年12月2日に文部科学省 先導的・大学改革推進委託事業として実施された「参加型臨床実習をめぐって」のなかで紹介された指導者用ビデオも供覧し、実施可能な臨床実習カリキュラムの作成を行った。

5. 授業公開

医学科では医師養成に特化した一貫教育を行っている等の理由から、授業公開は定期的には実施していなかった。本年度は授業改善を目的として本学の医学教育に関わる教員が希望し、科目責任者が了承した場合は、授業参観を可能とする申し合わせを医学科会議で行った。

6. おわりに

FD委員会医学科FD部会の活動を報告したが、医学科では教育を推進するためのFD活動として、医歯学教育開発センター主催のチューター養成講習会、チュートリアル課題作成講習会、共用試験 CBT 問題作成のための講習会、客観的臨床能力試験 OSCE の評価者講習会、最終試験問題作成説明会、大学教育推進プログラム「地域医療を担うプロフェッショナル教育」事業として実施された講習会を行い、また臨床実習委員会での文部科学省作成臨床実習指導医用ビデオ供覧等、多彩なFD活動を行った。平成23年度は学生による全ての専門科目の授業評価とその報告体制が整備された。一方で講演会や講習会に参加する教職員の数は非常に少ない状況が続いている。医学教育に求められる教育技能も多岐にわたり、特に臨床実習に関しては従来の教育経験だけでは指導が不十分とされるようになってきている。FDの必要性が高まっているにも関わらず、また、教育に関心ある教職員もFD活動への参加が難しい状況を改善することが検討課題である。

平成 23 年度 医学部保健学科 FD 活動報告

1. はじめに

医学部FD委員会保健学科部会では、1) 学生による授業評価、2) 教員同士の授業公開・授業参観を通し、授業改善を継続的に実施している。これまでの本保健学科の教育に関する総合的満足度については、高い満足度を示す学生が大半を占めている。また、学生自身の学習意欲についても、「出席状況良好」「授業に意欲的に取組んだ」とするものが多い。

担当教員の講義技術についても学生は、「授業準備の周到さ」「教科書、参考書、配布資料などの有用性」「板書、OHP、スライド、ビデオなどの使い方」「授業中のリポート、ディスカッション」について高い満足度を示している。また、保健学科の特徴としてコミュニケーションを重視した双方向型授業が行われており、総合的に高い評価が示されている。今年度は、過去5年間の活動を振り返り、さらなる授業改善への示唆を得たい。

2. 学生による授業評価

すべての授業科目（実習、演習を除く）を対象にして、学生による授業評価を実施した。前期に授業評価が行われた科目は、54科目（実施率83%）であり、後期は、55科目（実施率67.9%）であった。

評価のためにアンケート調査を実施した。質問項目は、3つに分類され、1) 学生自身の自己評価として、「出席状況」「意欲的な取り組み」「予習・復習」、2) 授業の内容として「内容のふさわしさ」「明確なシラバスの内容」「授業内容とシラバスの整合」「適切な難易度」「他学生への履修の勧め」「自分にとっての価値」、さらに3) 教員の授業への取り組みとして「わかりやすい説明」「時間どおりの開講」「授業に対する熱意」「質問や相談への対応」の合計13項目を設定した。それぞれに対して、1点から5点の5段階評価（点が高いほど評価が良い）で回答を求めた。

また、アンケートの最後に、「この授業をよりよくするための意見や要望、受講者としての自分を省みたうえでの感想などを自由に書いてください。」と自由記述欄を設けた。自由記述については、それが学生全体の総意であるのか否かが不明であるため、正確に分析することは難しい。何故ならアンケートは無記名であるため「学生のレディネス」、「心理状態」、「授業への期待の程度・内容」などが掴めないことに加え、各学生が極めて短い言葉で記述しているため、真意を把握することが困難であるからである。

そこで、これらの意見は、最終的に各科目の教員が自由記述を読んで判断すべきと考えるため、担当教員にそのままフィードバックした。学生は、それぞれの授業について肯定的・否定的両面から様々なコメントを寄せているので、各教員は真摯に各コメントを読み、授業改善に活かしていくことが重要であると考えた。

一方、学生が授業に不満に感じる点としては、「配布資料がなく、パワーポイントだけの授業」「授業開始終了の時間管理がなされていない」「レジュメの配布がない」などテクニカルな内容が若干提示されており、これらについては改善努力が必要と思われる。

回収したアンケートは、授業終了後2か月以内に、当該科目と全科目の質問項目ごとの平均点を示した分析資料と共に各担当教員に返却して、即座に授業改善にその結果を反映できるようにした。

平成23年度の評価結果（全科目の質問項目ごとの平均点）を平成19年度から平成22年度の結果と共に下の表に示した。各項目の平均点の合計は、平成19年度53.65、20年度54.85、21年度55.35、22年度55.52、23年度55.70と徐々に増加している。

学生自身の自己評価は、19年度の平均3.89から平成23年度には平均4.09に、授業の内容は、19年度の平均4.20から平成23年度には平均4.35に、教員の授業への取り組みは、19年度の平均4.17から平成23年度には平均4.34に増加していた。各項目別に見ると、平成23年度には5つの項目で若干減少していたが、誤差の範囲内と考えられ、概ね経年的に増加していた。

過去5年間の学生による授業評価の結果（全科目の質問項目ごとの平均点）

質問項目	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度
出席状況	4.62	4.40	4.65	4.66	4.67
意欲的な取り組み	4.00	4.11	4.24	4.19	4.23
予習・復習	2.97	3.01	3.24	3.29	3.36
内容のふさわしさ	4.36	4.47	4.46	4.47	4.50
明確なシラバスの内容	4.11	4.38	4.27	4.34	4.38
授業内容とシラバスの整合	4.13	4.28	4.28	4.34	4.36
適切な難易度	4.34	4.39	4.39	4.30	4.26↓
他学生への履修の勧め	4.20	4.20	4.20	4.22	4.21↓
自分にとっての価値	4.22	4.35	4.34	4.38	4.36↓
わかりやすい説明	4.14	4.27	4.28	4.29	4.26↓
時間どおりの開講	4.26	4.38	4.34	4.37	4.45
授業に対する熱意	4.25	4.39	4.40	4.40	4.39↓
質問や相談への対応	4.05	4.22	4.26	4.27	4.27

*各質問項目に対して1点から5点の5段階で評価

3. 教員による授業公開・授業参観

教員による授業公開・授業参観は、前期においては6月14日から7月13日まで、後期においては11月1日から同月30日までの期間に実施した。前期には、17名の教員により延べ50科目が公開され、33人が参観し、後期には、16名の教員により延べ34科目が公開され、10人が参観した。参観後は、授業参観報告書を参観した教員に提出してもらい、授業公開した担当教員にフィードバックした。

4. 医学部FD委員会保健学科部会共催講演会

チーム医療の推進のために、看護学専攻、理学療法学専攻、作業療法学専攻の全学生、教員も対象とした講演会“作業療法の魅力を伝える講演会 2/17”を開催した。48名の学生、7名の教員が参加し、作業療法士、理学療法士と看護師の仕事を互いに共通理解するのに役立った。

5. おわりに

本アンケート結果をみて、本保健学科として、教育上組織的に緊急に改善が必要な点は特に見られなかった。毎年同じ内容で継続して調査を行うことにより、複数年間の各項目の動向を把握できた。今後も調査を継続し、その分析結果を教育改善に活かしていきたい。残った課題として、アンケートの質問項目には不適切と思われるものがあり、見直しを行う必要を感じた。

教員による授業公開・授業参観については、参加者が多いとは言えず、他の授業への参観動機を高めるための啓蒙活動をやっていききたい。実際に参加した教員からは、他の教員の講義を見て、授業の工夫がなされており参考になったとの意見が多くあり、授業参観の意義をアピールすることが大事である。例年、同じ時期に行うと同じ内容の講義となり関心も低くなるので、実施時期を変えることも考慮していきたい。

また、次年度からは、新カリキュラムの学生が入学してくるので、授業評価、教員による授業公開・授業参観を踏まえた授業の変更点に関する教員に対しての調査も行う予定である。

(文責 緒方重光)

歯学部

歯学部 FD 活動報告

1. はじめに

歯学部 FD 委員会では、従来からの全学的な取り組みとしての「学生による授業評価」、「授業公開・授業参観による教員相互の評価」、および共用試験歯学系 CBT 作問スキルアップに関する講習会、研修会、学部 6 年生対象の教育に対する卒業時アンケート調査、また外部講師を招いての講演会とともに、昨年度からの新たな取り組みとして、外部教育系セミナーへの教員派遣、外部教育系セミナーの活動協力、および共催活動として「平成 23 年度鹿児島大学医学部・歯学部附属病院歯科医師臨床研修指導歯科医講習会」への参画をおこなった。本報告では各活動について、その活動概要を記す。

2. 学生による授業評価

歯学部 FD 委員会では、年間の FD 活動の一環として、本学部において以前作成した「学生による授業評価票」を用いて、各自の予習、復習の実施状況、また各教員の授業方法について 5 段階評価で調査を行っていた。この方法は、集計を行い全体としての授業方法の評価を行うには適していたが、個別の授業担当教員に対するフィードバックは得られにくい構造となっていた。そこで本委員会では、学生からより具体的な意見を吸い上げ、実際の教育現場に活かせるように「評価表」の大幅な改訂を行った（右図）。従来 15 項目あった選択式の質問項目を 3 項目に減らし、その分自由記載欄を 3 項目設けた。選択式質問項目の評価方法は、Yes と No の間の 4 段階レイティングスケール方式とした。この授業評価は平成 23 年度に開講した全ての授業を対象に、各授業の終了時に適宜実施した（評価への参加は各教員の自由意思に任せた）。評価対象者は各授業担当教員であり、職位は教授、准教授、講師、助教であった。本調査票は記名式とし、学生が記入後、各学年のクラス委員が回収し、学務課歯学教務係へ提出してもらった。また無記名での提出を希望する場合は、所定のボックスへ各自で提出してもらうよう依頼した。得られた記入済み調査票は OCR により読み込み処理後、集計作業が行われた。

次項の表に調査結果の一部を示す。集計の結果、本調査に参加した授業数は合計 35 件であった。昨年度本委員会が行った同様の調査では参加授業数が 20 件だったので、かなりの増加が認められた。個別の数値については、各授業の難易度や背景、授業担当者もばらばらのため、総体としての数値で論ずることは避ける。個別の

【学生による授業アンケート】

授業年月日： 年 月 日 学年： 年次 授業名： _____

学生氏名： _____ 授業担当教員名： _____

学生の皆さんへ
この授業をよりよいものにするために、授業アンケートを実施します。回答は選択肢の中から一つ選び、該当部分を黒く塗りつぶして下さい。また自由記載欄は利りやすい字で丁寧に記載して下さい。なお、無記名での意見を希望する場合は、総務課事務室前（研究棟 1、2 階前）に設置してある「学生意見箱」を利用して下さい。

No ←————→ Yes

1. 今日の授業は、あなたにとって有益と感じましたか？

2. 今日の授業は、理解できましたか？（分かりやすかったですか？）

3. 教員の声や話し方は聞き取りやすかったですか？

4. 今日の授業で良かった点を挙げて下さい。

5. 今日の授業で芳しくなかった点を挙げて下さい。

6. その他、今日の授業で感じたことを挙げて下さい（要望など）。

鹿児島大学歯学部 FD 委員会

データは集計直後、各授業担当者に生の調査票を PDF 化し返送することにより、学生の意見や指摘事項について、次の授業へすぐに生かせるような体制を、今年度より構築した。そのため、調査に参加する授業数が大幅に増加したものと推察され、調査の手法としてはうまく機能したと考えられる。また、自由記載欄には多くのコメントが寄せられており、授業改善直接つながるような内容が多かった。次年度以降も同様の方式を進めていくとともに、より多くの授業に参加してもらうような広報を検討していく予定である。

	2年生	3年生	4年生	6年生
回答数	5	4	22	4
1. 今日の授業は、あなたにとって有益と感じましたか？	3.66	3.64	3.56	3.46
2. 今日の授業は、理解できましたか？(分かりやすかったですか？)	3.49	3.31	3.35	3.49
3. 教員の声や話し方は聞き取りやすかったですか？	3.64	3.58	3.45	3.71

3. 授業公開・授業参観における教員相互の評価

歯学部教員による授業公開・授業参観による相互評価は、全学的な取り組みの一環として例年実施しており、平成 23 年度は 11 月 21 日～12 月 2 日の期間に行われた。この期間の歯学部における授業は原則として全て公開とし、教員は FD 活動の一環として、随時授業参観することを可能とした。質問項目は下記の 14 項目とし、5：極めて優れている、4：良い、3：普通、2：やや劣る、1：よくない、の 5 段階での評価を依頼した。結果を下記に示す。

	A	B	C	D
シラバスに沿った授業がなされたか	4	4	4	4
授業の主題・概要・到達目標等の説明があったか	4	4	4	4
授業の準備がよくなされていたか	4	4	4	4
教材(プリント, スライド, 教科書, 参考書, 板書等)は適切であったか	4	3	4	4
実習器具・材料は適切であったか	0	0	0	0
実習は授業内容の理解に役立ったか	0	0	0	0
明瞭で聞き取りやすい話し方であったか	4	4	4	3
質問や学生による発表の機会を与えたか	3	3	4	2
質問をしやすい雰囲気であったか	4	3	4	2
適切な難易度であったか	4	4	4	4
学習意欲が刺激されたか	4	3	4	4
教員が学問分野の専門家として信頼できたか	4	4	4	4
教育に対する熱意が感じられたか	4	4	4	4
上記項目以外の観点も含めた「総合的な評価」	4	4	4	4

授業参観に参加した教員数は 4 名であり、昨年度（参加者 8 名）に比較して少ない傾向であった。本データは調査数が少ないため個別の項目について具体的に論じるには限界がある。この取り組みを通じて、教員が同僚の授業を見学することにより様々な意味で刺激を受け、よりよい授業の作り方を考え、自己の授業方法のあり方を再考するきっかけになればよいのであるが、未だ十分その趣旨や意義が各教員に浸透していないと考えられる。教員が相互の授業を見学し互いを評価・批判し合うには、互いの遠慮もあり、それ相応の環境整備が必要不可欠である。そのためには今後、本活動の目的や意義を広く周知する手段を検討するとともに、より多くの教員の本取り組みへの参加を促す必要があると考えられた。

4. 学部6年生対象の教育に対する卒業時アンケート調査

歯学部FD委員会では歯学部教育委員会とともに、学部6年生の卒業時に、6年間受けてきた教育全体の振り返りという意味で、各種教育内容、活動、施設などについて、歯科医師になる立場で有効であったかどうかについて、無記名式アンケート調査を実施している。本年度は、平成23年度学位記授与式が挙行された平成24年3月23日に、歯学部6年生を対象に行った（回収率62%）。調査項目は下表の18の各種教育内容、活動、施設などについて、5：極めて有効であった、4：どちらかと言えば有効であった、3：どちらとも言えない、2：どちらかと言えば無意味であった、1：全く無意味であった、の5段階で評価を行うよう依頼した。以下にその結果を示す。

<回答者に関する事項>

	県内	九州	他
出身	6	9	16
卒業研修先	16	6	8

<鹿児島大学入学後の教育内容、活動、施設などについて、歯科医師になる立場であなたにとって有効であったかどうか、ご記入ください。>

	5	4	3	2	1	平均
オリエンテーション	5	10	14	1	0	3.63
共通教育	4	9	12	4	1	3.37
導入系科目	4	19	7	0	0	3.9
基礎系科目	6	19	5	0	0	4.03
臨床系科目	10	15	5	0	0	4.17
医系科目	4	15	9	1	0	3.76
臨床実習	14	12	4	0	0	4.33
選択科目	15	6	8	0	0	4.24
共用試験(CBT)	6	19	5	0	0	4.03
共用試験(OSCE)	6	20	3	1	0	4.03
総合歯科学	7	12	9	1	1	3.77
チューター制度	5	10	11	1	2	3.52
課外活動	15	9	6	0	0	4.3
学術情報基盤センター	4	12	11	3	0	3.57
図書館	10	17	2	1	0	4.2
学習室	13	11	2	2	2	4.03
学生控室	8	14	7	0	1	3.93
学務事務室	7	12	8	2	0	3.83

調査の結果、評価の平均値が「4」を超えた項目は、「基礎系科目」、「臨床系科目」、「臨床実習」、「選択科目」、「CBT」、「OSCE」、「課外活動」、「図書館」、「学習室」であった。質問が「歯科医師になる立場で」ということであり、また歯科医師国家試験合格発表直後という調査時期から、これらの項目が高く評価されることは理解できる。また昨年度は「4」以下であったものの今年度が「4」を超えた項目は「選択科目」、「OSCE」、「学習室」であった。逆に評価が「4」以上であったが「4」以下へ下がった項目は認められなかった。相対的に評価が低い傾向であった教育内容は、調査時期や質問方法による影響かもしれないが、学生のニーズに合っていない教育内容や改善の必要なカリキュラムや組織であった可能性もあり、今後詳細に検討していく必要がある。

5. 共用試験歯学系 CBT 作問スキルアップに関する講習会

1) 目的

共用試験歯学系 CBT において、より質の高い作問を行うとともに、作問の教育活動上の意義に対する認識を深め、教員の教育能力開発に資するために、学内の CBT 作問委員会コアメンバーおよびアドバイザーによる講習会を開催した。

2) 日時

平成 24 年 1 月 11 日（水）18：00～19：30

3) 場所

歯学部第 4 講義室

4) 講師

梶山加綱先生

中山 歩先生

田松順一先生

岩下洋一朗先生

5) 参加者

歯学部教員：66 名

6) 内容

本学部では共用試験歯学系 CBT の作問を、全講座を挙げて取り組んでいる。本年度は平成 23 年 12 月より作問を開始し、例年通り共用試験実施評価機構からの正式な作問依頼が来る前にある程度の作業を進めておくようスケジュールを組んだ。各講座への作問依頼は 12 月下旬、提出締め切りを 1 月下旬とし、その作問作業に直接的な参考となるように本講習会を企画した。特に昨年 3 月に歯学教育モデルコアカリキュラムが改定され、新しい基準での作問作業を行う必要があった。このあたりも踏まえ下記のような講習内容とした。

- ・モデル・コア・カリキュラム改訂と作問の割り振り
- ・PC・セキュリティ
- ・画像の取り扱い
- ・作問のコツ

7) 事後アンケート結果

(1) 今日の FD 講習会を受講して

【理解できた点】

- ・画像（視覚素材、写真）の撮り方（18）
- ・画像（視覚素材）の重要性、必要性（12）
- ・画像の作成、加工の仕方（9）
- ・被写界深度（3）
- ・露出の調整について（2）
- ・画像の選択方法
- ・画像の取り扱い
- ・いい写真は日頃の臨床から出てくる

- ・ CBT 作問のコツ、ルール (2 1)
- ・ 設問の表現方法 (主文、副文の書き方)、慣用句など (8)
- ・ CBT 作問ソフトの変更点、使い方 (5)
- ・ CBT の目的、意義、必要性 (5)
- ・ CBT 作問に関して細かいルールが決められている訳を理解できた (2)
- ・ 作問依頼の詳細
- ・ モデルコアカリキュラムが改定されたこと、変更点 (1 5)
- ・ 問題の漏えい防止等セキュリティーについて (1 0)
- ・ 連問の作成方法について (2)
- ・ 採択率、4/6 の意味、ブラッシュアップの必要性
- ・ 昨年度との変更点
- ・ 良問のポイント
- ・ 臨床の流れに沿った作問
- ・ (学生間の) 不公平をなくすための手段
- ・ 統一ルールの重要性
- ・ (共用試験実施評価) 機構からの作問依頼について
- ・ (共用試験実施評価) 機構のブラッシュアップの部屋内での状況が目には浮かぶようでおもしろかった。

【理解できなかった点】

- ・ 作問ソフトの使い方 (3)
- ・ カメラの設定方法 (2)
- ・ 画像処理の方法 (2)
- ・ 被写体への光の当て方、実際はどうすれば良いのでしょうか？
- ・ 「形式」以上の良問を作る方法
- ・ より難しい問題 (70%正答) を作る方法
- ・ 多くの決まりごとがあるので、しっかり問題作成できるかが不安
- ・ セキュリティーについて
- ・ より良い SBO を作問で実現する方法
- ・ コアカリの活用方法
- ・ コアカリの位置づけ (意義) はなんだろう
- ・ その担当分野での採択されやすい問題の傾向

【ご意見等があればご記入ください】

- ・ 資料が配布されたほうが良い (3)
- ・ 国試同様学生が同じ問題を解けば不公平はなくなる、なぜ CBT は受験者間で違う問題でなければならないのか？
- ・ 毎年感じることであるが、CBT 作問に関して講座の中でも教員によってかなり温度差があり、実際に取り組むのは限られた人しか参加していない事がある。
- ・ 当科では臨床系の中でも実際に検査系しか担当しておらず、Q 問題の作成にはかなり無理が生じている。

・センター試験説明会と重なりました。教員数の少ない講座だと手分けして参加できません。少しご配慮をお願いします。

・CBT 開始以前と以後で学生の臨床実習の成果がどう変わったのか（変わらなかったのか）について調査結果があれば知りたいです。

・開催時間と進行、設定を少し工夫すると参加者も変わるのかもしれない。

・またこのような機会を設けて頂けると有難い。

・暖かかくしてほしい。

・毎年初心者対象の FD を行っていますが、参加者のうち初心者の割合が少ないのではないかと思います。実際の BU 作業の例を示した内容のほうが役立つのではないかと思います。

・鹿大 3 部作よりも機構のマニュアルを読むのを薦めるほうが良いのではないかと。

・医局間で温度差があり、作問の完成度にかなり差がある。少なくとも作問関連の FD にするのはどうでしょう？完成度が低いと BU の時間がかかりすぎる。

・視覚素材を意識して作るため、CBT ブラッシュアップを教室内で年 2 回くらいすれば良いと思います。

・1 問を選ぶのに何問も作成するのが大変。

・作問シーズンに先立って作問の注意点を聞いてとても勉強になった。

・（講演を）ビデオ撮影して欠席した教員が DVD を見られるようにすると良いと思います。

・もう少し参加者が多ければと思います。

2. 今後 FD 講習会で取り上げてもらいたい内容があればご記入ください。

・授業方法について（2）

・採択問題はどのような問題か、また不採択になる問題はどのようなものを分野別に教えて頂けると良い。

・作問で気を付ける点、例えばよくない問題などがあれば参考になると思います。

・授業デザインスキル

・教員の CBT 作問（共用試験）に対する要望（不満が多いと思いますが）を聞き取る場、アンケート

・本日取り上げられなかったルール（ナンセンス肢の排除など）

・ワークショップ形式の講習会を多く開催してほしい。

・教育技術に関連したもの

・評価について

6. 共用試験歯学系 CBT 作問スキルアップに関する研修会

1) 目的

共用試験歯学系 CBT において、作問における基本的事項の理解を深めるとともに、より質の高い作問を行うために、教育委員会共用試験実施部会における CBT 作問委員会主催のグループ内ブラッシュアップに参加し、作問作業の実際を体験する。

2) 日時および場所

<第 1 回>

A グループ・ブラッシュアップ

平成 23 年 2 月 9 日（水）18：00～20：00 医歯学総合研究科棟 1（歯学系）3 階 第 1 示説室

B グループ・ブラッシュアップ

平成 23 年 2 月 7 日 (月) 18:00~20:00 医歯学総合研究科棟 1 (歯学系) 9 階 会議室

C グループ・ブラッシュアップ

平成 23 年 2 月 8 日 (火) 18:00~20:00 医歯学総合研究科棟 1 (歯学系) 3 階 第 1 示説室

<第 2 回>

A グループ・ブラッシュアップ

平成 23 年 2 月 21 日 (月) 18:00~20:00 医歯学総合研究科棟 1 (歯学系) 9 階 会議室

B グループ・ブラッシュアップ

平成 23 年 2 月 23 日 (水) 18:00~20:00 医歯学総合研究科棟 1 (歯学系) 9 階 会議室

C グループ・ブラッシュアップ

平成 23 年 2 月 22 日 (火) 18:00~20:00 医歯学総合研究科棟 1 (歯学系) 3 階第 1 示説室

3) 対象者および参加者

<対象者>

歯学部教員全員

<参加者>

第 1 回 A グループ・ブラッシュアップ: 38 名

B グループ・ブラッシュアップ: 41 名

C グループ・ブラッシュアップ: 32 名

第 2 回 A グループ・ブラッシュアップ: 13 名

B グループ・ブラッシュアップ: 16 名

C グループ・ブラッシュアップ: 21 名

4) 内容

本学部では共用試験歯学系 CBT の作問を、全講座を挙げて取り組んでいる。歯学部 FD 委員会では、教育委員会共用試験実施部会とともに CBT 問題作成過程を歯学部 FD 活動の一環としてとらえ、歯学部教職員に対して各 CBT 作問グループ (A、B、C グループ) で行われるブラッシュアップに参加してもらい、問題作成上の基本的事項の確認とともに、自らの作問能力向上へ向けて取り組んでもらう機会を設けた。

7. 外部講師を招いての FD 講演会

1) 第 1 回 FD 講演会

講師: 俣木志朗教授 (東京医科歯科大学大学院、日本歯科医学教育学会理事長)

講演タイトル: 歯科医学教育の現状と将来への展望

日時: 平成 23 年 9 月 30 日 17:00~19:00

場所: 歯学部第 3 講義室

参加者: 歯学部教職員

事後アンケート結果

【本講演会に参加して良かった点】

- ・海外や国内他大学の歯学教育の状況、臨床実習、評価システムを知ることができた (26)

- ・日本も世界の歯学水準に後れをとらないようにしなければならないということを再認識した（２）
- ・突然世界基準にさらされる可能性があるという内容は心構えとして非常に意義深い言葉でした。
- ・大きな視点から歯科医学教育を見る大切さが分かったこと
- ・現在の教育の状況と行政的な流れがよく理解できた。
- ・世界の傾向の中で鹿大がどう動くべきか、目指すべきか理解できた。
- ・英国における評価システムの紹介が見れたこと。
- ・東京医科歯科大学の教育実践例（３）
- ・現在の歯科医学教育の抱えている問題と、今後の展望について理解できた（５）
- ・国の歯科教育の方向性を知ることができた。
- ・教育の質の保障、第三者評価が非常に重要であることがよくわかった（１１）
- ・各大学独自の教育基準から統一基準への取り組みが必要であることがわかった。
- ・教育の大切さ（２）
- ・教育評価の必要性（２）
- ・卒前教育の意味、必要性
- ・モデルコアカリキュラムの必要性、重要性、今回の改訂の意味（９）
- ・これまで束縛感の強かったコアカリの必要性を（ひしひしと）理解することができた。（コアカリ導入後、学生の受講態度がはっきりと変わってしまったという感触があります）
- ・卒前卒後教育の一貫性の重要性（卒前教育のつけが臨床研修にのしかかる）
- ・現在の臨床実習、臨床教育の方向性、流れ、臨床実習の文化の育成、質の管理（GDC, QAA）について改めて認識できた（４）
- ・診療参加型実習および臨床実習後の評価がなぜ必要なのかを理解することができました（１３）
- ・鹿大でもこれから臨床実習 OSCE を導入する方向であるということを理解することができました。
- ・臨床実習の評価について難しさがよく分かった。評価をするためには、臨床実習でコアカリを教える必要があるが、本当に実施するためにはシステムから大きく変える必要があると思った。
- ・臨床実習を中心に、現状のままではやっていくことが難しいことがわかった。
- ・国が歯学部生に対して診療参加型の臨床実習をさせる為に患者負担を無くそうとしている話など、本気で改革を図っていることが分かった点（４）
- ・協力患者増の対策に関する事例とアイデア（３）
- ・台湾での実習コンテストは興味深かったです、導入してみても（９）
- ・教員の参加型臨床教育促進に対する意識の向上が図れたと思う。
- ・自分自身、学生に対しての教育を再認識して、これからどうやっていくかを考える参考として良かったです。
- ・学生により良い教育をするには自己の意識をよりあげる必要があると思った。
- ・プロフェッショナリズムの習得を重要視している（世界的には）。
- ・いろいろと考えるきっかけとなりました。
- ・私自身も底辺の一端ではありますが、教育にも力を注ぎたいと思います。
- ・教員のモチベーションが重要であることを痛感した
- ・いかに学生の向上意識を引出し、臨床能力を高めていく方略を整えて、素材を獲得する

・現在必要なことがよく分かりました。基礎の教員としてはやはり研究もできる人、病理の立場からは「臨床診断できる人」を育てないといけないと思っていますが、医科歯科大学の取り組みを見て大変参考になりました。

- ・教育活動も業績として評価すべきとの意見が出たこと。
- ・中央で仕事をされている先生ならではのお話が聞けたのが良かったです。
- ・情報が多く分かりやすかった。
- ・「あんパン」の例えがわかりやすかった。

【本講演会に参加して芳しくなかった点】

- ・スライドの文字が小さい気がしました（2）
- ・現在の鹿児島大学歯学部の臨床実習を指摘して頂ければよかったですと思います。
- ・少し時間が長かったので、もう少し歯学教育の将来につながる話が聞きたかった。
- ・歯科医学教育に関する FD 講演会であったが、臨床研修実習に関する内容が全体として多かったように思えます。もう少し学生教育に関する内容も聞いてみたかった。
- ・研究者の養成が大切であると言及されていましたが、なぜかをもっと具体的に話を聞きたかったです。（学生への強い動機付けが必要だと思いますので。）
- ・自分は基礎系教員なので、恥ずかしながら近年変更がしばしば行われる本学の臨床実習、研修医教育の現状を必ずしも詳しく理解できていない。そのため、本日の話も基本的な部分もついていけないところもあった。テーマ的に関係ないのかもしれないが、もう少し基礎系教育のことについても話や意見や国側の考え方等を聞きたかった。少しだけ触れていた「未来の歯科医療を拓く研究者の養成」に個人的には期待したい。
- ・基礎系の先生たちにも参加してほしかった。
- ・参加者が少ないように思いました（2）
- ・今後の具体案がよくわからなかった。また、学生や教育の質の保障とあったが、教員の質の保障がない。また教育に対する評価が全くされていない現状をどう変えるかが根本だと思いますが。
- ・研修医教育の話がなかった。
- ・今後の話なのですが、研究者を育てる部分を視野に入れたカリキュラム改善の展望などをお聞きしたかったです。

【その他、ご意見があればご自由にお書きください】

- ・診療参加型をそのように行うべきか学部内のワークショップがあっても良いと思います。各教室での温度差があるという表現が目立ったので。
- ・非専門家（心理学専攻）として歯学教育に携わる上での困難（制約）を感じながら教育活動をこなしているのが現状ですが、臨床の先生方ともっと積極的に連携して、「美味しい饅頭」の一構成要素になりたいです。有難うございました。
- ・“臨床実習でもっとやっておきたかった事“のアンケートによる臨床実習内容のフィードバックが有用と思われた。
- ・私は新潟大学出身で学生時代に Kr さんの金属床義歯を制作しました。その時の診療費は半額以下となる制度があったことを記憶しています。
- ・鹿大での教育実習が十分に進まないのは、上級教員の意識の低さが原因だと思います。上級教員、特に

教授会メンバーの参加は必須とすべきと思います。

- ・臨床実習後の評価が必要であることが分かったが、学生は6年生でマッチングのことも頭にあり6年半ばでの時にやる難しさも感じます。(鹿大は5年で終了します)。
- ・国試での実技を再導入してはどうでしょうか。
- ・GDCのページは自分でも見てみます。
- ・第3者による評価がどこまで公平なのか不明と思われまます。最近色々な場面で第三者委員会という組織が出ているが(マスコミ等)、日本においては委員会が相手(評価される側)の問題をいかに見つけるかということに重きが置かれていると思われまます。第3者委員会の質の評価はどのようなものであるのか、教育の現場においては公平性が強く求められると思われまます。
- ・本日の講演等を踏まえて学内で教員が学びあう活動があればよいと思います。
- ・FDは自分の知らなかったことを学ぶよい機会になるので、今後も継続して行ってほしいと思います。
- ・開業医院とは異なる大学独自の診療費体系があってもよいのではないかと思った。
- ・高齢者に対する一次、二次予防の充実を図るためのプログラムが必要ではないか。
- ・海外の事情はなかなか分からないので良かったです。ただし各国に応じた文化もあります。この日本という国の歯科教育はどういった方向へ進むのが良いのか難しい課題です。
- ・とても参考になるお話、有難うございました。
- ・地域医療、多職種連携についての教育を今後どうしていくのか
- ・在宅医療(歯科)の教育を今後どのようにしていくのか、の検討が必要
- ・素案の話は興味深かったが実現するのでしょうか
- ・参加型実習を積極的に導入することは賛成しますが、医療事故を出した場合、学生、教員は保護されるのか心配です。医療訴訟の増加が心配です。
- ・今後もこのような機会を設けてほしい。
- ・文科省と厚労省を結びつける方法はないでしょうか。これらの事実を公開していくことが大切なのではないでしょうか。大学間で危機感を持って、自主的にまとまっていく方向に行くしかないでしょうか。
- ・OSCEの外部評価でローカルルールに驚くことがあったり、教育のばらつきに戸惑うことがあります。ある程度画一化できると良いと思います。
- ・一部の私大では有名な開業医をClinical Profとして雇っていますが、これを国立大学でもやればよいと思います。
- ・コミュニケーション能力も大事と思われまますので対人援助職としての自覚や患者さんの立場に立って診療を行うということも技術のみではなく学生さんに教えていく機会を増やしたほうが良いのではないかとも思われまます。やはりグローバル的視点も学生さんに提示し、臨床や研究の楽しさを学生さんと共有することも大事ではないかと思われまます。

2) 第2回FD講演会

講師：小川哲次教授(広島大学病院、日本総合歯科協議会理事長)

講演タイトル：「臨床能力の教育法と評価法」

日時：平成24年3月2日(金) 17:30~19:00

場所：歯学部第3講義室

参加者：歯学部教職員 32 名

事後アンケート結果

【本講習会に参加してよかった点】

- ・ 広島大学の臨床実習の取り組みを知ることができた（5）
- ・ 臨床実習の教育体制のアイデア → 研修医と6年生または3年生をペアにする先輩後輩の関係
- ・ 卒論作成を学部生にさせるというアイデアはとても良いと思います。（鹿大でも考えては？）
- ・ グローバルな視点から教育論をわかりやすく教えていただいた。日頃あまり意識していない教育のありべき姿を教えていただいた。
- ・ アメリカ、ヨーロッパの歯学教育に日本が遅れていることを知った。
- ・ 歯科医のグローバルライセンスの話を知ったこともよかったと思います。
- ・ 臨床教育の本来のあり方（価値ある行動を促す）について知りやすく聞くことができた（12）
- ・ 学生や研修医の理想的な臨床実習方法を知ることができました。ただし、これを実行するためには、現在のままでは無理だと思われ、どのように実行すればよいか分かりませんでした。
- ・ 臨床能力の教育にはある程度の負荷が必要であることがわかった（2）
- ・ 臨床能力の意味が理解できた（2）
- ・ 臨床能力のモデル、レベルを考える必要があることがわかった（2）
- ・ 教育の質の確保の重要性
- ・ 臨床教育においては教員も悩み模索している姿を見せることが大切である（2）
- ・ 師弟関係、兄弟子をメンターといい、それらのかかわりを理解できた（2）
- ・ 学生が自ら計画し自主的に臨床実習を行えるようにする（参画型、体験型）ことが効果的であることが分かった
- ・ プレゼン（症例カンファレンス、短時間プレゼン）学習内容の発表が学習効果が高いこと（3）
- ・ 見学をさせないで臨床教育をする。どうしても見学となってしまった場合、Drが何をしていたかを後でプレゼンさせる方を今後活用していきたいと思った（4）
- ・ 教育を行うための重要なポイントが分かりやすく説明されました。昔の医局制度のよかったことも思い出しますが、学生の質も下がっているのも確かなので、教員は常にこのような話を聞く必要があると思います。他大学のやり方を知るのは、非常に自分のFeedbackには役に立ちます。臨床だけでなく基礎の教育でも、これからの改善点をいろいろと考えることができました。
- ・ 臨床現場は教育しやすいようにはできていない・・・その通りだと思います。
- ・ 臨床実習（参加型実習）の教え方（チェアサイドティーチングが重要）（2）。
- ・ 学習目標の持つ性格（RUMBA）を理解できた（2）
- ・ 臨床能力の評価の意義、重要性（4）
- ・ 評価法としての具体的な手段（ポートフォリオ、症例カンファ、チェアサイドティーチングなど）を用いて、学生の何を評価するのか（臨床能力、スキル、歯科医師として求められる資質、コミュニケーション能力、自己研鑽など）がわかった（2）
- ・ ポートフォリオ（振り返り）が大切（4）
- ・ 評価を教育内容の関連性をよく理解できた（特に教育目標の設定の重要性）（2）
- ・ 臨床能力評価について、何が大切で何が難しいのかを考えさせられた。臨床実習を受ける学部生にと

って臨床能力を適切に正確に評価されることは重大な問題であって、評価者もしくは評価と同様の視線で教育にあたる教員の資質を確保することはとても重要だと感じた。このことができてはじめて質の高い医療を患者さんに提供しうる素地ができると思った。

- ・主観的評価は大事だということ
- ・臨床能力とは何か？を解説していただく中で、10年くらい忘れていた鹿児島大学歯学部の教育目標に改めて気づかされたこと。
- ・評価の視点が提示されたこと、将来、各専門分野の違いを超えて、共有できそうだった。
- ・フィードバックが大事であることがわかった（2）
- ・臨床教育で暗黙知の部分を言語化して教えることが必要ということが理解できた。（2）
- ・実地的な臨床実習の仕組み、制度が分かった。（3）
- ・臨床教育体制について有益な情報が得られた（メンター、チューター）
- ・今後の臨床実習に生かすことのできる大変有意義な講演でした。見学だけの実習を何とかやめて、「臨床実習チーム」等の実習システムに持っていったらよいと思いました。
- ・継続した臨床実習の必要性を感じた。
- ・基礎系で臨床教育の評価とそのベースとなる考え方に触れることがなかったので参考になった（2）
- ・Advanced OSCE について、その求めるものの理解ができた（4）
- ・マネキンの OSCE 評価であっても課題を工夫して能力を聞き出すことを図ることが大切
- ・一人の患者さんの治療の流れを模した課題の作り方がある（2）
- ・模擬患者とそれに見合った課題の重要性
- ・教育の Evidence を論文にして次世代に伝える必要性が理解できた（4）。
- ・「教育を研究する」ことへの意欲がわいてきた。
- ・臨床実習終了時 OSCE 後の振り返りができたこと。
- ・専門家として臨床医の教育者としての役割がよく理解できた（2）
- ・初めて歯科教育について深く考える機会を得ることができ、大変刺激になりました。
- ・初めて聞く内容が多く、とてもためになりました（2）
- ・今後の指導について参考になりました（2）
- ・大変なことをしなければならぬのだ、ということが少しわかったような気がする。
- ・事前に配布されていたレジメ内容とかなり変わっていたので、さらに多くの情報（資料）が見れてお得な感じがした。
- ・最新の教育理論・方法を学ぶことができ、今後の実教育に役立てられる内容を得ることができた。
- ・次世代のあり方
- ・ゆとり世代の学生への対応
- ・おおよそよく理解できました。しかし内容のバックグラウンドというかベースの部分が非常に深いようで、自分の理解度がもっと深ければもっと色々と多くの情報を得ることができただろうと思いました。
- ・臨床研修のやるべきことがまだまだあるという実感です
- ・臨床能力を評価する立場ではありませんが、自分ができる範囲で努力しようと思いました。
- ・演者は明確な喋り口でわかりやすい

【本講習会に参加して芳しくなかった点】

- ・専門的な用語が難しく、また内容が広く専門的で理解が追い付かないところがあった（４）。
- ・講演開始時にマイクの調子が悪かったこと（３）
- ・レジメとスライドが一致していない点（２）
- ・教育の重要性は理解できるが、一人の先生が教育と臨床をつきつめて良くしようとするのはかなりの能力、時間が必要であり、自分の研究や自己研鑽を両立させていくのはかなり困難である。
- ・評価について、まだまだ分からないことが多いことに気づかされました。
- ・ルーブリックが難しかった。若干ついていけない感があった。
- ・学生実習なのか、研修医の研修なのかがわかりづらかったです。
- ・すべての教授、すべての准教授、すべての講師、すべての助教が参加していないこと。是非全員が拝聴すべき講演であったのに、実に惜しい、悔やまれる、残念なことである。
- ・臨床の先生の質問が少ないのが気になる
- ・ディスカッションが少なかった
- ・会場が寒い

【その他、ご意見があればご自由にお書きください】

- ・今後もこのようなFD講習会を増やしてほしいと思いました。大変参考になりました。（３）
- ・本日の講演内容は決して臨床系講座の医局員だけの問題ではなく、基礎系の先生方にも聞いてほしかったと思います。基礎系の先生にも聞いてもらって、鹿児島大学歯学部の学生教育を包括的に、一緒になって考えてもらいたいと思います。
- ・大変有意義な抗議を有難うございました。鹿大でも実際にこのようなことが可能であればよいと思いました。そのためにも教授たち頑張ってください。決定されれば教員も協力すると思います。
- ・学生への教育能力も個人差が大きく考える力を引き出そうとしている先生と、ただ単に教えるだけの先生もいる。教育者としての能力のレベルを埋めるのは難しく、個人差が大きい。
- ・技術・知識のみならず情意領域の項目をどのように教育内容に組み込んでいくのかが必要（今まではあまり考えていなかった）。
- ・よいメンターになるためには、自分自身がよいメンターに出会うという経験をしないといけないと思います。スキルだけでなく人として、という部分が大きいと思います。教員一人一人がそのことを認識すべきなのだと思います。
- ・小川先生がなぜ鬼教員からそうでなくなったのか（そのきっかけ）を、体験談を交えてお話を聞きたかったです。
- ・臨床能力の教育について、さらに具体例を示して教示して頂く機会があればと思います。
- ・大学以前の高等教育で大学教育とのリンクについて不明であった
- ・実体験から鑑みると大学のカリキュラム以外の活動（サークル、ボランティア活動）が現活動に活かされている
- ・「失敗」体験をどのように経験させるかについての内容が不明であった
- ・基礎系と臨床系の教育リンクについての説明が不明であった
- ・とても参考になりました。有難うございました。是非ローテーション研修から総合方式に変えてください（広大のように）。

- ・むかしからやっていたことは間違いだったのでしょうか、時代がかわったのでしょうか。
- ・人とのコミュニケーションをとりにくい学生さんに時々会います。臨床に出ると大変苦勞するのではないかと懸念します。どのようなサポートをするのが難しい課題と感ずることがあります。
- ・臨床教育の必要性については今までも十分に考えてきたが、やはり時間的な制約が多く、また病院での他業務も多く、それによって十分な教育ができていないことを痛感した。
- ・小川先生のお話はいつもおもしろく楽しみにしていましたが、外来で遅くなってすみませんでした。

8. 「第 5 回医療コミュニケーション ファシリテータ養成セミナー（新 初級編）」への教員派遣報告

報告者：梶原和美（心身歯科学分野）

主 催：日本歯科医学教育学会 教育能力開発委員会

日 時：平成 23 年 12 月 10 日（土）～12 月 11 日（日）（2 日間）

場 所：邦和セミナープラザ（愛知県名古屋市）

参加者：歯科医療者養成機関の医療コミュニケーション担当教員 27 名

1) 到達目標：

一般目標 GIO

歯科医療者の卒前教育・卒後研修における教育指導能力を向上させるために、医療コミュニケーションの指導・評価法について態度、技能、知識を習得する。

行動目標 SBOs

- 1) 対人コミュニケーションの要素を述べる。
- 2) 医療コミュニケーションを説明する。
- 3) スタッフコミュニケーションを説明する。
- 4) ファシリテータの役割を説明する。
- 5) 医療コミュニケーションの教育法を述べる。
- 6) 医療コミュニケーションの評価法を述べる。
- 7) 模擬患者について説明する。
- 8) 模擬患者シナリオを作成する。
- 9) 模擬患者への演技指導をする。
- 10) 模擬患者シミュレーション（ロールプレイ）法を実施する。
- 11) 模擬患者養成法を説明する。
- 12) フィードバックを行う。

2) 実施形態：ワークショップ形式

3) スケジュールと内容：

第 1 日：

10：00 開講式

レクチャー1：「医療コミュニケーション教育のゴールは 一段階を踏まえたコンピテン
ス？」

セッション I：「対人コミュニケーション教育技法 1」

—能動的（双方向）授業：他者から学ぶ—

- 13:00 レクチャー2:「医療コミュニケーション教育におけるファシリテータの役割」
 セッションII:「対人コミュニケーション教育技法2:SPシナリオの作成」
 —まず、ロールプレイからはじめましょう—
 セッションIII:「対人コミュニケーション教育技法3:SP演技指導,シナリオ修正」 —
 さあ,SPさんと一緒に—
 レクチャー3:「フィードバックとは」 —コミュニケーション教育(双方向授業)—
- 19:30 レクチャー4:「対人コミュニケーションの基礎」
- 21:00 情報交換会
- 第2日:
- 8:30 セッションIV:「対人コミュニケーション教育技法4:フィードバックとトランスクリプト」
 —効果的なフィードバックのための基本技術—
 セッションV:「対人コミュニケーション教育技法5:模擬授業(SPシミュレーション)」
 —能動的(双方向)授業でファシリテーションの実際—
- 13:00 セッションVI:「対人コミュニケーション教育技法6:評価」
 —能動的(双方向)授業の振り返りと授業評価
 セッションVII:「総合討論」
 —模擬患者養成法,対人コミュニケーション教育技法,Q&A—
- 16:00 修了書授与式

本セミナーは、医療コミュニケーションの教育技法の普及・啓発やそれに携わる教員の教育能力の向上を図るために、日本歯科医学教育学会が本年度から開催した「医療コミュニケーション・ファシリテータ養成セミナー(新 初級編)」である。

はじめに医療コミュニケーション教育は医療面接 OSCE 対策教育ではないことが強調され、対人コミュニケーションの基礎、医療コミュニケーションの特殊性、コミュニケーション教育に求められる授業設計と評価方法が概説された。ワークショップでは様々な医療場面におけるロールプレイのシナリオ作りを、SPの協力を得ながら基礎から段階的に学んでいった。またロールプレイを通して、教授者(ファシリテータ)・評価者に求められる態度を体験的に学ぶことができた。参加者の熱意の中、あっという間に過ぎた2日間であった。

<ワークショップの実際>

セッションI:「対人コミュニケーション教育技法1」

—能動的(双方向)授業:他者から学ぶ—

与えられたテーマで話をするを通して、話の組み立てと聞くことの難しさを体験し、グループ討論を通してメンバーと共有した。

セッションII:「対人コミュニケーション教育技法2:SPシナリオの作成」

—まず、ロールプレイからはじめましょう—

学部生を対象にした「対人コミュニケーション学」のシラバスとSP用のシナリオのアウトラインを作

成し、ロールプレイを行った後、問題点を検討した。

セッションⅢ：「対人コミュニケーション教育技法 3：SP 演技指導，シナリオ修正」

—さあ，SP さんと一緒に—

名古屋 SP 研究会の SP に参加してもらい，セッションⅡで作成したシナリオの詳細を検討した。その後 SP とのロールプレイを通してシナリオをさらに推敲し，学習目標を決定した。

セッションⅣ：「対人コミュニケーション教育技法 4：フィードバックとトランスクリプト」

—効果的なフィードバックのための基本技術—

学生と SP のロールプレイのビデオ録画を見ながら観察メモを作成し，どのような内容をどのようにフィードバックすればよいのかをグループで討論し，発表した。

セッションⅤ：「対人コミュニケーション教育技法 5：模擬授業（SP シミュレーション）」

—能動的（双方向）授業でファシリテーションの実際—

他のグループが作成した初見のシナリオに基づいて，学生役とファシリテータ役をロールプレイした。さらに他の参加者のロールプレイを観察し，気づいた点を記録した。

セッションⅥ：「対人コミュニケーション教育技法 6：評価」

—能動的（双方向）授業の振り返りと授業評価—

セッションⅤで作成した観察メモをグループで持ち寄り，KJ 法によって分類した。その結果をもとにコミュニケーション教育で求められる授業評価のあり方について討論した。

セッションⅦ：「総合討論」

—模擬患者養成法，対人コミュニケーション教育技法，Q&A—

全体を通した SP からのフィードバック，SP 養成の現状についての報告を受けた後，受講者アンケートのフィードバックを閲覧し，対人コミュニケーション教育の方法論について討論した。

レクチャー1：「医療コミュニケーション教育のゴールは一段階を踏まえたコンピテンス？」

伊藤孝訓先生 日本大学松戸歯学部

レクチャー2：「医療コミュニケーション教育におけるファシリテータの役割」

藤崎和彦先生 岐阜大学医学部医学教育開発研究センター(MEDC)

レクチャー3：「フィードバックとは」—コミュニケーション教育（双方向授業）—

伊藤孝訓先生 日本大学松戸歯学部

レクチャー4：「対人コミュニケーションの基礎」

渡辺義和先生 南山大学総合政策学部

8. 「IDE 高等教育研究フォーラム：大学教育のアウトカム評価・国際的趨勢と日本の課題」への教員派遣報告 報告者：岩下洋一朗助教（医歯学総合研究科 歯科医学教育実践学分野）

主 催：IDE 大学協会、千葉大学、国立教育政策研究所

日 時：平成 24 年 2 月 22 日 13：00～16：00

場 所：学術総合センター（東京都千代田区）

1) はじめに

大学における高等教育の現在の国際的な動向と日本の対応について、先日 IDE 高等教育フォーラムが

開かれた。本フォーラムは IDE 大学協会、千葉大学および国立教育政策研究所が主催で、2012 年 2 月 22 日（水曜）午後 1～4 時に、学術総合センター 2 階会議室で行われ、参加したので報告する。

開会のあいさつとして、IDE 副会長の大崎仁氏が話された。IDE 大学協会は大学のあり方に関心がある人に、共通の情報や交流の場を提供するのが目的のボランティアだが会員組織である。日本は自己評価をもとに行っているのでアウトカム評価が乏しい。しかしながら社会の期待が増加しつつあるので客観的評価へ進んでいく必要がある。そのために、大学教育のアウトカム評価について、日本とアメリカの動向と、OECD による AHELO プロジェクトについて報告を検討し、討論してもらいたいとのことだった。

2) 「大学教育のアウトカム評価－動向と問題」

国立大学財務経営センターの金子元久氏が大学教育のアウトカム評価の動向と問題について講演された。アウトカム評価への高まる圧力がある。「結果」への着目、大学教育への不信、そして大卒者の雇用問題がある。大学はそれに対して無関心、防衛的であるが、国際的には動きが見られる。また、アウトカム評価に対する概念上、技術上の疑問、疑念がある。多様な定義があり、計測が困難で信頼性が少なく、情報の受け取り手の解釈、行動で変わってしまう。これらに対して大学はどう位置付け、行動すべきか検討する必要がある。

アウトカム評価の事例としては、標準化テストにはアメリカで College BASE と OECD での経済学、工学の AHELO がある。汎用能力にはアメリカの CLA、OECD の AHELO Generic Skill がある。質的評価にはアメリカの VALUE、日本では学会の「参照水準」、そしてイギリスで分野別参照基準 Rubric がある。学習行動にはアメリカでは NSSE、日本では金子らの調査、OECD では AHELO の Contextual がある。

アウトカム評価への社会的な圧力はむしろ強まる傾向にある。大学が変わらないという印象が強く、何かしろ、という圧力もある。政策課題で具体的な手段を講じる必要がある。国際的な動きもある。しかし、技術的な問題は大きい。重要なアウトカムほど把握が難しい。特に、汎用能力が問題になる。この問題に結論はなく、問題は続いていく。大学自身の改善に結びつけたい。改革手段としてアウトカム評価を用いた多様な形態、利用方法を視野に入れていきたい。

3) アメリカにおける高等教育の質保証と学習アウトカム

全米大学経営センターの Peter T. Ewell 氏がアメリカにおける高等教育の質保証と学習アウトカムについて講演された。アウトカムが着目されるのは、これにより教育目的が明確になり、対象、学習形態環境を通じた評価が可能になり、機関の種別を超えて学修成果の累積が可能な点である。しかしながら、アウトカムの定義が難しく、大学人の反発もある。また、重要な教育成果を見逃す可能性がある。アウトカム評価における論点として、標準化尺度と比較不可能な尺度、達成水準と付加価値の選択、社会に公表する方法等が問題になる。対象と目的で評価方法は様々に分かれる。

アメリカの質評価システムは州政府による監督と州立大学の直接評価があり、また機関評価と専門分野（プログラム）評価がある。適格認定は連邦政府資金の条件なので、連邦政府から承認されている必要がある。その中で学習アウトカムを重視する傾向が強くなっている。適格認定制度は、100 年以上に渡って基準を維持されているが、社会全体へ出す情報が少ないため社会からの無理解がある。適格認定で評価することは注目されており、評価結果の公表は大学の透明性を示す。適格認定での争点として、アカウントビリティ改善、最低基準対到達目標基準等の問題がある。適格認定団体により重点事項の組み合わせが異なる。最近では学習アウトカムが着目され、対立する問題を柔軟に組み合わせることで社会への情報開示を重視する傾向にある。社会的関心は国際的な状況に対応した改革を求める方向にある。

質保証において、アカウントビリティと改善の間に矛盾があれば、通常はアカウントビリティの論理が勝つ。これを避けるには、適格認定機関が、個別機関の改善に資する評価の基準と方法を設定する必要がある。伝統的な評価は、学習アウトカム評価に取って代わられていく。学習評価への着目は国際的な動きである。OECD-AHELOはその反映である。

4) AHELO 実施可能性調査

オーストラリア教育研究審議会の H. Coates 氏が AHELO 実施可能性調査について講演された。世界的に、大学経営、評価、質の評価について、少ない資源でよりよい結果の要請があり、高等教育の重要性と拡大傾向から、アウトプットの増大とアウトカムの質保証が求められている。さらに、コスト圧縮と競争の圧力からエビデンス重視の経営が教育の拡大と質の維持をもたらす。国際化が教育と学習の両面で重要になり、国際的視点が不可欠になる。AHELO は高等教育における情報ギャップに対応し、アウトカムのについてのデータは政策形成に不可欠である。学習アウトカムの計測が高等教育の問題点の診断と改革に有用である。

AHELO の参加国は多数に渡り、言語の上でも多様である。各国内でも反応は活発で、ホームページ等が公開されている。関連機関・個人は専門家が 300 人以上、100 を超える教育機関等、行政関係者、教員、学生が 1 万人以上、さらに数千の関係者がおり、電子メールや様々な会議を通じて連携している。

一般能力、経済学、工学について、背景情報、国別、機関、教員、学生について調査票の設計を行った。その構造は、既存事業のカリキュラム、適格認定システム、分野別調査に基づき思考力を対象とした質問項目を作成し、調査票の有効性をテストした。さらに各国語への翻訳と妥当性チェックを行った。背景情報については AHELO 専門家グループ(P. Ewell 氏が議長)、工学については工学専門家グループが行った。工学評価では、問題が一般と領域別にあり、それを分析、デザイン、実践の工学過程について問題を作成した。選択問題の作成については日本の技術士試験が基礎になり、基礎的な工学に焦点を当て、40 項目を選択、修正し各国に適用可能か調べ、質問項目を整理した。記述回答問題については別の国が担当し作成した。また、心理統計学的な結果分析も行い、各問に対する学生の反応をアンケート等で採取した。

進行状況としては、Phase 1 を終了し、現在 Phase 2 の途中である。これまでの達成・知見としては、各国、大学、学生の協力体制の確立、AHELO としてのビジネスモデルの確立、評価の枠組みと質問票の開発により多次元・多環境での使用可能性、設計開発、翻訳、チェック方法の確立、国際的にテストを行うための質的管理の確立と国際的な AHELO の活動の認知がある。今後の予定としては、さらなる調査の実施、コンピュータによる実施システムの開発、実施の訓練、監理と分析等である。また国と機関が連携したビジネスモデルを確立していく。期待される成果として高等教育システムの現状評価、機関目的の明確化、教員の開発、政策研究、学生へのフィードバック、そして社会とのリンクである。

5) AHELO 工学分野 アウトカムズ評価試行に参加して

東京工業大学の岸本喜久雄氏が AHELO 工学分野アウトカムズ評価試行の参加について講演された。近年の高等教育の拡大や国際化の進展に伴い、高等教育の多様な質を評価することが重要になってきている。OECD は、高等教育における学習成果の評価についてフィージビリティスタディの実施を提案した(AHELO)。政府や高等教育機関、質保証機関による学習成果の評価方法の改善に資することを目的としている。日本は 2008 年から参加を決定し、工学分野を中心とした AHELO フィージビリティ・スタディの実施のあり方に関する調査研究に着手した。

我が国の大学の評価システムの中で、医・歯学部、教育学部、工学部の一部では、大学卒業水準の試験が行われている。工学部では日本技術者教育認定機構(JABEE)により認証評価が行われている。JABEE基準でも学習・教育到達目標と、分野別要件（ここでは土木系分野）が設定されている。

2009年にブリュッセル専門家会議でAHELO工学分野におけるチューニングが行われた。そこで、学習成果(L0)とは何かを決定し、AHELOの工学分野におけるL0の選択基準を各国の基準を参照して決定した。これはOECD Education Working Paper No.60に報告されている。

問題の作成のために、コンソーシアムが原案を作成した。記述式問題は豪州側が提案し、多肢選択肢問題は日本側が日本技術士会技術士第1次試験と日本土木学会認定土木技術者資格試験から提案した。国際専門委員会合では、提案された問題を取捨選択し、採択された問題について国際通用性を高める方向で検討した。

問題の妥当性検証作業と調査では、筆記式のテスト問題とそのアンケート、学生への聞き取り調査(ディスカッション)からなる。テスト問題は記述式問題と多肢選択式問題を行った。アンケートでの学生のコメントでは、記述式問題について、現実問題を倫理的な面で扱った点の評価、選択式問題では安易で広く浅いと感じた評価(実際の成績は良くないが)があった。

海外訪問調査では、欧州の5か国、米国の6大学、豪州、および中国を訪問調査した。その結果、「よい教育」「優れた質保証」のあり方は、大学のミッション・学生の特徴・大学の規模によって異なり、アクレディテーションは、教育改善を促すシステムとして有効であるが、各大学の特色を活かすためには、柔軟な運用が必要であることが明らかになった。学習成果を明記して、その達成度を評価する取り組みは、教育改善・質保証のポイントといえる。

得られた成果・意義として、工学教育における学修成果の内容は国際的に共通認識が醸成されることを具体的な場面で確認できた。問題作成のプロセスに参画し、我が国における工学教育の視点から国際的に積極的に情報発信できた。国際的・国内的枠組の双方において、工学関係者と教育学関係者が協働して教育改善に取り組むことの重要性を認識することができた。

6) 終わりに

参加者は全国の大学から集まり、会議室の机がほぼ満席になる程度に集まっていた。また、比較的幅の広い年齢の方々が参加しているように見受けられた。講演の後、質疑応答があった。主に、達成水準の問題作成の方法と問題点、AHELOでの試験の受験者の参加方法、および評価の方法について活発な討論があった。

医学部や歯学部においても医師や歯科医師の資格認定について国際化への流れが欧米で進められている。本フォーラムはそれらを含む大学全体での高等教育についての国際化の流れの趨勢であるアウトカム評価の動向についての報告であった。社会から大学での高等教育の結果を客観的評価で公表を促す流れは、医・歯学部ではCBT、OSCEを進める方向への流れであろう。今後、さらに大学へのアウトカム評価と国際化は加速していくと感じられた。これに大学が率先して対応し、教育、診療や研究の自主的なアウトカム評価とその公表を進めていくことにより、社会からの就職率や試験合格数等による一意的な評価を受けないようにする必要があるのではないかと思われた。

最後にこのフォーラムに参加する機会を与えてくださったFD委員会に感謝いたします。



Hamish Coates 氏



Peter T. Ewell 氏

9. 歯学部FD委員会委員による学外施設へのFD及び教育研修活動協力実績

田口則宏

平成 23 年 6 月 11～12 日 広島大学霞キャンパス

広島大学病院主催「第 13 回 中国・四国地区歯科医師臨床研修指導歯科医講習会」

役割：タスクフォース

平成 23 年 12 月 9～11 日 富士教育研修所

日本歯科医学教育学会主催「第 2 回 歯科医学教育者のためのワークショップ」

役割：タスクフォース

平成 24 年 2 月 11～12 日 九州大学病院

九州大学病院主催「平成 23 年度九州大学病院歯科医師臨床研修指導歯科医講習会」

役割：タスクフォース

10. 平成 23 年度鹿児島大学医学部・歯学部附属病院歯科医師臨床研修指導歯科医講習会

実施報告書

別冊

工学部

平成23年度工学部FD活動報告

FD委員会委員（工学部）

工学部FD委員会委員長

内山博之（理工学研究科教授）

1. 平成23年度のFD活動

工学部では、7学科中6学科の教育が日本技術者教育認定機構（JABEE）の認定プログラムとして認められており、残りの1学科もJABEEに準拠した教育を行っている。これまで継続的に工学部FD委員会が実施してきた授業アンケートによる授業改善などのFD活動は、JABEEの求める教育改善のためのPDCAサイクルにうまく取り込まれた形で実施されている。23年度の第1回工学部FD委員会において、既に学部に着したこのような活動を本年度も継続して遂行することが決定され、年度内に以下の活動が実施された。

- 1) 授業アンケートの実施と授業計画改善書の作成
- 2) 授業公開と授業参観の実施
- 3) FD講演会の実施
- 4) 学習成果と質の向上の検討

2. 授業アンケートの実施と授業計画改善書の作成

工学部の学生による授業評価アンケートは、平成23年度も例年通り前期は7月、後期は1月に実施した。また期の中頃に中間アンケートも実施した。期末アンケートは、5段階のリッカート尺度評価による15項目の質問と自由記述欄で構成されている。5段階評価（「大いにそう思う」、「そう思う」、「どちらとも言えない」、「そうは思わない」、「全くそうは思わない」）は5から1までの値で数値化し、科目ごとの各項目の平均値を評点として集計後、担当教員に学生の記入したアンケート用紙とともに印刷して返却した。各教員は、授業評価を受けて、授業計画改善書を提出した。授業計画改善書には直近三年間の各項目の評点の推移と当該年度の評価値に対する自己評価と改善対策案を記入する。この改善書は系列科目担当の教員間で共有されたり、学科内での自由な閲覧を可能にするなど、各教員の教育の質改善のみならず、各学科の教育の質改善にも利用されている。

この授業評価アンケートは平成16年度より8年間継続して実施しており、多くの項目の評点についての経年的な変化やトレンドを把握することが可能となっている。各学科のFD委員は、学科ごとの評点の分析を詳細に行い、報告書を作成した。

3. 授業公開と授業参観の実施

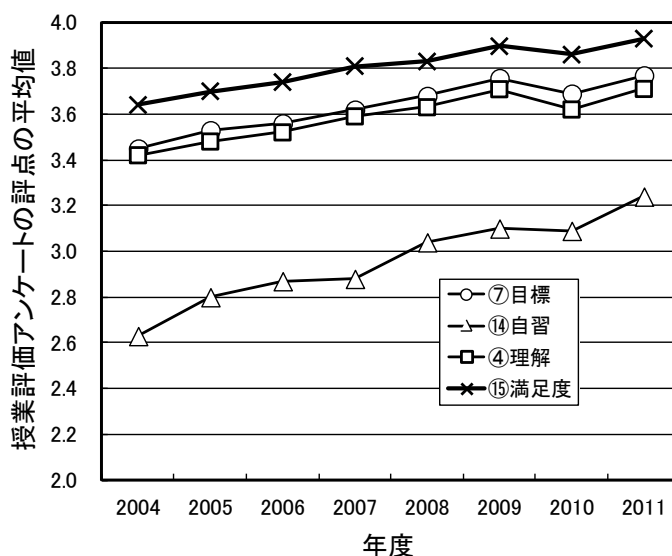
平成23年度は、前期28科目、後期38科目を公開科目とした。これらの公開科目に対して、工学部教員による授業参観が前期15件、後期6件実施された。このように平均で公開科目の32%で実際に参観が行われた。ただし参観の実施は、学科間で大きな差があった。

4. FD講演会の実施

平成22年度の工学部FD講演会は、平成22年10月21日（金）午後4時から5時半まで、稲盛会館において、理工学研究科、理学部との共同共催で、金沢工業大学人間情報システム研究所教授の長尾隆司先生を講師に招いて開催した。47名の聴講者があった。「金沢工業大学の科学力教育の現状と課題-高等教育機関の自立を目指して-」と題された長尾先生のご講演は、ご自身の所属される金沢工業大学の具体的な事例も交えた非常に興味深いものであった。そのため講演終了後の質疑応答も活発となった。

5. 学習成果と質の向上の検討

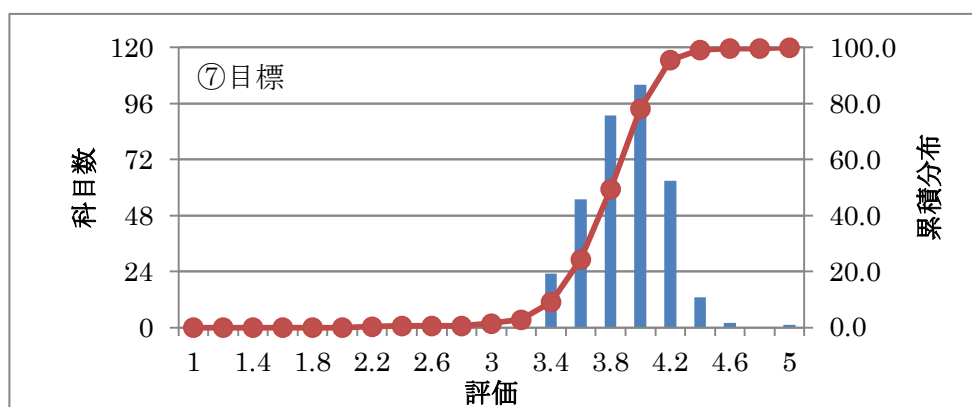
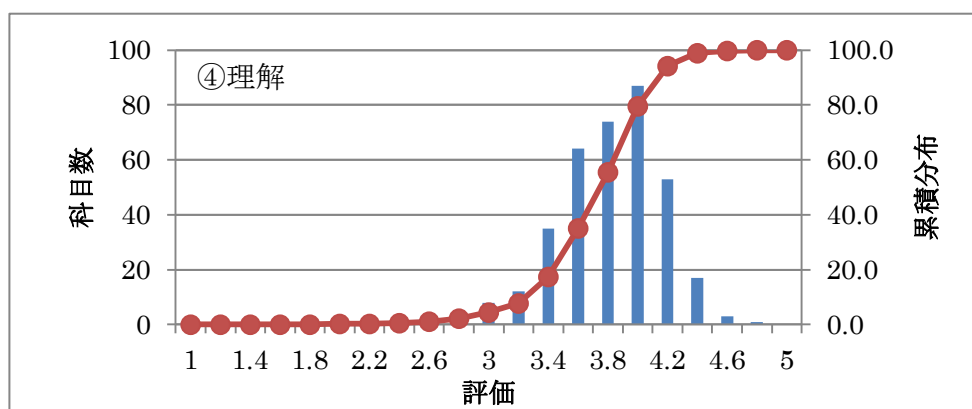
工学部FD委員会では、平成21年度から学習成果と教育の質の向上の定量的な評価のために、学生による授業評価アンケートの評点と科目GPAとの相関を吟味してきた。23年度も過去2年間と同様の検討を行った。授業内容の理解、授業目標の達成、満足度と行った項目の評点は、受講生の成績の平均値と相関があることが23年度のデータでも示された。つまりアンケートという学生の主観的評価が、特定の項目においては成績という学生の理解度の客観的評価とも相関があることが見いだされ、アンケートデータの有用性が改めて確認された訳である。但し自習時間の長さに関しては、科目受講生の成績の平均との相関は見られなかった。

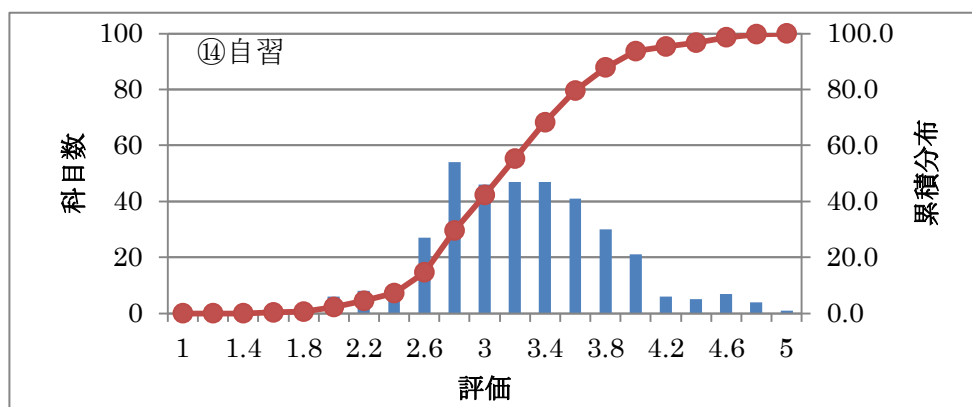


上図は、授業内容の理解、授業目標の達成、予習・復習の自習時間の長さ、満足度の4項目について、工学部の全科目の評価値の平均の8年間の推移を示すグラフである。このようにどの項目の

値も8年間ほぼ持続的に上昇している。授業実践後の学生による授業評価アンケートと、その結果を受けた授業計画改善書の提出、そして次年度の授業実践というPDCAサイクルがうまく機能し、毎年授業の質が相対的に向上していると考えられる。特に理解、目標、満足度の3項目では、評点の平均が徐々に4に近づきつつある。しかし、自習に関しては8年間で評点の平均は大きく向上しているものの、未だ3.2程度の値に留まっている。但し、自習時間の設問ではリッカート尺度ではなく、1コマの授業に対する平均の予習・復習時間を「3時間以上」、「2～3時間」、「1～2時間」、「30分～1時間」、「30分未満」の5段階で回答させている。3.2という値は、「1～2時間」相当以上の値であり、さほど極端に短い時間ではない。

上記の分析はあくまでも全科目の評点の平均が対象であるが、以下のグラフは23年度の理解、目標、自習の3項目に関する科目平均のヒストグラムである。理解に関しては前述のように平均としては毎年改善しているが、23年度も評点が3.2以下、つまり「理解できたか」という問に、「どちらとも言えない」相当に近い自己判定の平均となった科目が未だにおよそ1割あった。工学科目の場合、難易度の高い科目が必然的に多く含まれるが、このような高難易度科目の担当教員の更なる講義方法の工夫による理解の評点の改善を期待したい。





自習時間に関しては、科目平均が大きくばらついていた。これは、レポート作成に時間のかかる実験、実習系の科目や宿題やレポートが多く課される科目がある一方、受講生の多くがほとんど予習・復習を行わない科目があることを意味している。卒業後も継続的かつ自主的に学習する態度を獲得した、所謂「進取の気性」を持った学生をどのように育成するかは重要な課題であり、具体的な検討が求められる。

6. 今後のFD活動

工学部は上述のようにJABEEに基づく教育を行っており、教育改善のPDCAサイクルが比較的良好に機能していると思われる。しかし現状では、教育システムが完成されるに連れて、学生は受け身になるという皮肉な傾向も見られる。教員が多くのレポートを課して半ば強制的に学習させること以外に、自主的な学習態度の育成の検討が求められる。そのような自主性の育成などに関して各学科、各教員の効果の見られた様々な取り組みや工夫について、学部の全教員で情報共有できるようにする仕組みづくりを検討したい。

農学部・ 農学研究科

平成23年度

鹿児島大学農学部・農学研究科 FD 活動報告書
(概要)

鹿児島大学農学部 FD 委員会
平成24年3月

平成23年度農学部FD活動の記録

まえがき

農学部FD委員会は、委員長、副委員長（教務副委員長が兼任）、および各学科から選出された委員4名、および、教務係長で構成されている。委員会は、毎月定例で開かれ、さまざまなFD活動計画や取りまとめ、また、全学FD委員会や、全学FD活動への対応について協議した。

農学部のFD活動の3本柱は、授業公開・授業参観、学生による授業評価アンケート、および、農学部FDワークショップである。

授業公開・授業参観の予約、学生による授業評価アンケートの集計などには、農学部FD-WEBシステムを活用している。

1. 農学部FD活動組織（FD委員会の構成と活動状況）

委員長 徳永正雄
委員 西野吉彦
委員 高山耕二
委員 玉置尚徳
委員 紙谷喜則
委員 川口博明
事務担当者 吉村大作（教務係長）
原田ゆかり（学生係長）
データ処理 池田日出男

第1回FD委員会 平成23年5月16日（月）

議題：1. 平成23年度FD委員会の活動計画について
2. 平成23年度FD経費予算要求・配分方法について
3. その他

第2回FD委員会 平成23年6月20日（月）

議題：1. 平成23年度前期授業公開について
2. 授業評価アンケート（大学院）について
3. FD-Webシステムの改善について
4. その他

メール会議 平成23年8月16日
報告事項のみ

第3回FD委員会 平成23年9月13日（火）

議題：1. 公開授業（授業参観）について
2. 農学部FDワークショップ・教育実習事後研究について

3. ピアサポートへの取り組みについて
4. 「前期FDウィーク授業公開のまとめ」について
5. PDCAサイクルとFD-WEBについて（継続審議）
6. その他

第4回FD委員会 平成23年10月17日（火）

- 議題：1. 農学部FDワークショップ・教育実習事後研究について
2. 公開授業後期授業参観について
 3. 「前期FDウィーク授業公開のまとめ」について
 4. ピアサポートへの取り組みについて
 5. その他

第5回FD委員会 平成23年11月21日（火）

- 議題：1. 農学部FDワークショップ・教育実習事後研究について
2. FD報告書作成の方針・分担について
 3. その他
 - ・鹿児島大学農学部ファカルティ・ディベロップメント委員会規則の改正（案）について

第6回FD委員会 平成23年12月19日（月）

- 議題：1. 共通教育における学習実態・学習成果に関する調査2011の実施について
2. 全学FDWS（平成23年12月22日開催）について
 3. FD報告書作成担当者の確認について
 4. その他

メール会議 平成24年1月20日（金）

報告事項のみ

第7回FD委員会 平成24年3月13日（火）

- 議題：1. 3月27日の教育・学生支援担当教職員講習会について
2. H23年度のFD活動のまとめと報告書作成について
 3. 次年度への引き継ぎ事項について
 4. その他

2. 授業公開と授業参観の取り組み

農学部では、平成15年度後期より公開授業・授業参観の取り組みを実施している。平成22年度からは、授業公開科目と授業参観参加希望科目の登録をFD-WEBで行うようにし、今年度もこのFD-WEBを活用することとした。その使用法は教授会ならびにメールにて説明し、周知した。授業公開は、例年どおり全学の教職員を対象にすることとし、全学の教職員に周知した。

授業公開と授業参観のスケジュールは以下の通りであった。

前期

5月18日（水） 授業公開の実施についてのお知らせ（教授会）

5月20日（金）～6月10日（金） 公開不可能な授業科目調査
6月13日（月）～7月1日（金） 授業参観予約
7月4日（月）～7月8日（金） 授業公開（農学部FDウィーク）
7月4日（月）～7月22日（金） 授業参観報告書作成・提出

後期

10月19日（水） 授業公開の実施についてのお知らせ（教授会）
10月11日（火）～10月28日（金） 公開不可能な授業科目調査
10月31日（月）～11月25日（金） 授業参観予約
11月28日（月）～12月2日（金） 授業公開（農学部FDウィーク）
11月28日（月）～12月16日（金） 授業参観報告書作成・提出

授業担当者と授業参観者には、可能な限り、授業参観終了後に意見交換をお願いした。
また、参観者には、FD-WEBを通じて、授業参観報告書を作成・提出いただいた。

また、後期の授業公開・授業参観の取り組みにおいては、平成22年度後期の授業のうち、学生の評価が高い授業科目を農学部の教員に周知した。これらの授業の選抜は、学生の授業評価アンケートの結果、「満足した」「どちらかと言えば満足した」という回答が100%であり、受講生が30名以上の授業科目を選び、各学科から満足度が最も高かった授業科目を3科目選出した。選抜された授業は、以下の表の通りであった。本年度の授業参観予約数は、前期69名、後期63名と多くの先生方の参加があり有意義な取り組みであった。

3. 授業アンケートの改善

昨年度平成22年度のFD委員会で検討された「大学院生に対する授業評価アンケート内容の改善」の結果を受けて、さらに文言等を検討し、従来のものより自由記述を重視したアンケート内容を決定した。

4. 農学部FDワークショップ

農学部FDワークショップ開催の経緯と実施要領

平成23年度の農学部FDワークショップの実施に当たっては、FD委員会で検討を重ねた。昨年度までの方式を踏襲し、教育実習の事後指導と共同で講演会を開催し、その後グループディスカッションを行って、学生たちから授業に対する感想や要望を聞くことにした。また、最後に全体討議で、各班からの討議内容を報告してもらい、全体で意見交換を実施することにした。実施内容は、以下の通りである。本年度は、附属中学校・山元卓也教頭に、「学校の先生に求められること」と題して講演をお願いした。

平成23年度農学部FDワークショップ 教育実習事後指導実施要領

1. 日時：平成23年12月7日（水）14：30～（参加者14：20集合）
2. 場所：講演及び総合討論 201号教室
グループ別ディスカッション（グループ分けは、別紙のとおり）
21.22.23.24.35 各セミナー室
3. 参加者：(1)実習終了者32名
(2)講演講師（附属中学校教頭）
(3)グループ別ディスカッション指導者
教務委員長・FD委員会委員6名・各学科選出教員3名（獣医学科除く）
4. 実施要領
配布物： 実施要領・研究レポート用紙・教育実習記録・メモ用紙

《進行：徳永農学部FD委員長》

14:30 教務委員長挨拶

（次の研究レポート記載内容及び提出期限の説明を含む）

- ・研究レポートは、教育実習全般及び本日の講演及びグループ別ディスカッションで得られた内容とし、提出期限は12月15日（木）とする。

14:40 講演

講師：附属中学校・山元卓也教頭

テーマ：『学校の先生に求められること』

【各セミナー室へ移動】

15:30 グループ別ディスカッション（1グループ6名程度）

- ・グループディスカッションの内容説明。
- ・三役（司会、発表、書記）決定。
- ・教育実習の総括として、教育実習で感じた教えることの難しさや大学での授業に対する要望等について話し合う。
（FD委員は、FD報告書に反映させるので、必ずメモを取り意見の集約を行ってください。）

【201号教室へ移動】

16:30 総合討論（201号教室）

- ・各グループでの討論内容について発表し、質疑応答を行う。

17:00 終了

*レポートは、教務委員長が採点し、事前指導と併せて評価する。

山元卓也先生講演



講義に対する「要望」または「改善すべき点」に関する班別討議内容要約

講演会のあと、学生、教員がグループに分かれ、グループディスカッションを行い、さまざまなテーマについて討論した。以下に、学生たちから出た大学の講義に対する要望をまとめた。他の詳細は、農学部 HP に掲載した報告書を参照いただきたい。

- ・生徒からの疑問を引き出して、それをきっかけにすすめる。
- ・統計など教養で習ったが必要に迫られていないので身に付かない。カリキュラムに工夫を。
- ・テストの解答用紙を返却してほしい（間違っていた点を復習したい）。
- ・授業時間を短くしてほしい。もしくは、途中で休憩を入れてほしい。
- ・授業評価アンケートを途中で実施してほしい（最後だと改善を要望しても自分たちの講義には活かされないのだ）。
- ・履修申請の際には、シラバスを確認出来るようにしてほしい。
- ・90分の授業が長くて集中できない。→休憩時間がほしい。
- ・パワーポイントを使用すると早くついていけない。→文字だけでなく実物写真等を見せる。
- ・内容を詰め込みすぎで、基礎をしっかり教える講義があっても良い。
- ・スライドの文字が多すぎて追いつけない。写せない。
- ・配付プリントが見にくくて分かりづらい。重要度によって見やすいプリントにして欲しい。
- ・講義によってプリントの大きさが異なるのでまとめにくい。

- ・パワーポイントの資料をネットで見られるようにしてほしい。
- ・パワーポイントを使用する場合は、プリントアウトしたものを配ってほしい。重要なところを明示してほしい。
- ・レポートなどで束縛された方がよい。
- ・学生に対する接し方の統一。
- ・授業の仕方の統一。
- ・シラバス（ネット上）の更新や充実。進捗状況が不明な場合がある。更新している先生はいる。
- ・教職の授業が一方的すぎておもしろくない。退職者の非常勤講師等に依頼してはどうか。
- ・高価な教科書を買ったが使わない。

各班からの報告と全体討議



5. 学生による授業評価

平成23年度前期・後期の2回学生による授業評価のアンケートを実施した。ここには、平成22年度後期分と平成23年度前期分の概要を記載した。集計結果をグラフ化したデータは、農学部 **FD-WEB** を参照されたい。また、学生からのコメントも同様に農学部 **FD-WEB** にまとめて記載しているので参照されたい。

平成22年度後期、および、平成23年度前期に実施した授業評価アンケート集計結果の概要

【平成22年度後期】

学部

(講義科目・演習科目)

講義科目3745、演習科目150の回答があった。講義科目に関して、全体的に欠席率が高いことが指摘できる。一方で、参考書などの使用率が低いことが特徴といえよう。講義で理解が不十分であったところに関して、自主的に学習することが少ないことと、教員による参考書や副読本の紹介や利用の呼びかけが少ないこともその原因であろう。また、予習と復習の量が少ない傾向がある。一方で、内容のレベルについては、妥当であったとの回答が多く、理解には達していると考えられるが、実際には、若干、レベルが低かったということも考えられる。

学習目標の達成については、ほぼ達成できたと思っているといえる。満足度に関して、授業科目がほぼ満足できるものであったという回答であった。

シラバスに沿って進められたかどうかに関しては、ほぼ、そのように感じているようであった。

演習科目に関しては、予習・復習の時間が多く、関連する参考書の使用も多かった。

(実験科目・実習科目)

実験科目308、実習科目647の回答があった。講義科目等と比較して、欠席率が少ないことが特徴といえる。満足度が非常に高く、実験や演習は効果的な授業形態であるといえよう。一方で、受講者数が少ない場合と多すぎる場合について、予習復習の時間が短かったり、参考書の使用が少なかったりという特徴が見られた。

大学院

大学院に関する授業評価アンケートは、講義科目に対しては109、演習科目に関しては30の回答があった。少人数で行われるものが多いと推察されるため、授業評価自体は良好なものであった。概ね、講義のレベルは妥当で、分量も適当であったとする回答が多く、内容に関しても、満足しているものが多かった。アンケートの結果からすると、大学院の授業に関する問題点を指摘することは難しいといえるだろう。学部の結果に比べ、欠席の回数が相対的に多いことが指摘できる。

【平成23年度前期】

学部

(講義科目・演習科目)

講義科目3358、演習科目133の回答があった。回答内容に関しては、22年後期とほぼ同じ傾向を示していた。

(実験科目・実習科目)

実験科目408、実習科目752の回答があった。回答内容に関しては、22年後期とほぼ同じ傾向を示していた。

大学院

平成23年度前期については、大学院独自の形式の異なる授業評価アンケートを実施したため、統計処理にかけるとはできなかった。各専攻でとりまとめて分析したので、

そちらを参照されたい。

アンケートグラフ

アンケート結果を以下の項目について集計し、グラフ化した。データ量が膨大なので、本年度は報告書に記載しない。農学部 FD-WEB において参照できる。

2010年度 後期（講義・演習）【学部】

質問項目ごとの授業形態別の比較
授業形態ごとの質問項目間の関係
質問項目ごとの受講者規模別の比較
受講者規模別特徴

2010年度 後期（実験・実習）【学部】

質問項目ごとの授業形態別の比較
授業形態ごとの質問項目間の関係
質問項目ごとの受講者規模別の比較
受講者規模別特徴

2010年度 後期（講義・演習）【大学院】

質問項目ごとの授業形態別の比較
授業形態ごとの質問項目間の関係
質問項目ごとの受講者規模別の比較
受講者規模別特徴

2011年度 前期（講義・演習）【学部】

質問項目ごとの授業形態別の比較
授業形態ごとの質問項目間の関係
質問項目ごとの受講者規模別の比較
受講者規模別特徴

2011年度 前期（実験・実習）【学部】

質問項目ごとの授業形態別の比較
授業形態ごとの質問項目間の関係
質問項目ごとの受講者規模別の比較
受講者規模別特徴

第2節 全学FD活動への参加

全学FD委員会には、農学部FD委員長が出席し、また、多くの教職員、学生が、平成23年度の様々な全学FD活動に参加し、全学FD活動の一翼を担った。平成23年度全学FD活動参加者のリストは、以下のとおり。

平成23年度全学FD活動参加者

平成23年度FD活動参加者					
研修等名	開催年月日		参加者		
			学科	職名	氏名
学生ワークショップ	平成23年7月13日	水	生産	2	松本大亮
			生産	4	久田真士
			生産	院1	重松法光
FD・SDフォーラム	平成23年11月26日	土	資源	教授	徳永正雄
			生産	准教授	高山耕二
			環境	教授	西野吉彦
			事務	係長	吉村大作
			事務	係員	山口 聡
			資源	4	山崎晃路
			環境	3	下田卓弥
学生・教職員ワークショップ	平成23年12月22日	木	資源	教授	徳永正雄
			事務	係長	吉村大作
			生産	3	塚野 桂
教育・学生支援担当 教職員講習会	平成24年3月27日	火	資源	教授	徳永正雄
			環境	教授	岩崎浩一
			環境	助教	末吉武志
			資源	准教授	玉置尚徳
			資源	教授	境雅夫
			事務	係長	吉村大作

以下に、それぞれの参加者による参加報告・感想を掲載した。

平成 23 年度新任教員 FD 研修会に参加して

農学部 生物環境学科 河野澄夫

平成 23 年 4 月 1 日付けで鹿児島大学の農学部に着任した私は、平成 23 年 10 月 25 日及び 27 日に行われた新任教員 FD 研修会としてのワークショップ、及びその前後に開催された授業参観に参加した。

ワークショップは、講演と小グループでの論議を通して学生の学びについて理解し、学生の抱える学習上の問題及びそれを解決するための教育方法について理解を深めることが、また、共通教育科目または専門科目の公開授業を参観し、自らの授業の改善に役立てることがそれぞれ目的であった。

講演会では、「学生の実態を知る」と題する小講演があった。講演内容について必ずしも正確に理解した訳ではないが、鹿大の学生について、①高校時代には比較的成績も良く、家庭での学習の習慣があったこと、②授業にはまじめに出席すること、しかし、③積極的に勉強しようとする姿勢に欠けていること、④将来に対して強い不安を持っていること、⑤危機感はあるが、何をしたいかわからないことなどが指摘された。以上のことは、必ずしも鹿大生に限った話しではなく、現在の学生全体に当てはまる実態ではないかと思った。

以上のような小講演の後、小グループでのフリーディスカッションが行われた。約半年前のことなので記憶が定かでないが、①どの様にして授業内容に興味を持たせるか、②予備校の講義との違いは何か、③学生に考えさせる授業とは何かなどが話題になったと思う。私も以上のことを気にしながら、授業内容の構成、学生との接し方など試行錯誤している段階である。

公開授業の参観については、前期に 1 つの共通教育科目及び 2 つの専門科目、並びに後期に一つの専門科目について参観をさせてもらった。現在、私の担当している授業では PowerPoint を用いて内容の説明を行っている。この場合、学生にはその資料を配付しており、そのためか一部の学生を除いてあまりメモを取る様子ではない。PowerPoint を用いた授業で本当に良いのかどうか迷っている時、専門科目で昔ながらの黒板（実際は白板）と OHP を使った講義を偶然参観した。学生には図、表のみの必要最小限の資料しか配布されていない。従って、学生は先生の話に注意深く聞き、一生懸命メモを取っていた。メモをすることにより、理解を深めていると感じた。

PowerPoint による授業が悪いのではなく、配布資料として情報を与えすぎると授業に対する緊張感や学生自らの思考を阻害すると感じ、来期からの授業では多少改善しようと思った。

平成 23 年度 新任教員 FD 研修会に参加して

農学部 生物生産学科 吉田 理一郎

平成 23 年 10 月 25 日に開催されました、新任教員 FD 研修会ワークショップに参加させていただきました。最初に、教育センターの伊藤先生の講演を拝聴し、近年の大学生の傾向、鹿児島大の学生の実態等を知る機会を頂きました。私は、大学卒業後、研究所勤務が

メインでしたので、恥ずかしながら自身の中にある「大学生」に対する基準がおおよそ 20 年前のままで推移しており、鹿児島大学に勤務後、その基準が大きくかけ離れていることにある種のショックを覚えました。それが具体化され自分の中で整理するよいきっかけとなりました。時代が変わればその時代に生きている人間の思考も変わりますし、求めるものも刻々と変化すると思いますが、大学もまさにその「時代」の流れを適確に把握する、または、その先を読み、次代を担う学生に多様なレシピを提供することができる体制が要求されると感じました。

また、本研修会では、グループ討議が行われ、1) 各教員が経験した学生の学習上の問題、および2) 学生の望ましい学習態度、習慣とは、について様々な学部の先生方と情報交換および中身の濃い議論が行われました。その中でも、昨今の学生に関する様々な状況を具に把握することができました。このテーマの性質上、終始、学生に対するネガティブな意見が大方を占めたのですが、逆に、ポジティブな部分に関しても話題に上げる必要性があったように思います。時代の変化の中で、我々教員が自身と学生とのギャップを認識し、フレキシブルに対応する必要性を感じました。議論の中で、「大学が目指す学生像を明確化すべき」、「時代と共に教育も変化すべき」との意見が交わされたことが自分にとっては印象的でした。

このような全学による教育の取り組み、意見交換を行う機会は非常に有意義であったと思います。しかしながら、それが各学部での教育にどのように浸透および反映されているのかが経験不足な自分にはいささか消化不良で把握しきれしておりません。各学部で行われているユニークな取り組み等を知る、あるいは学部間で議論する機会が増えれば、今後の教育に大いに活用できるものと思います。また、鹿児島大学の学生に不足気味なものをより明確化し、その埋め合わせが大学教育の中でどの程度可能かを議論することも、今後、鹿児島大学を卒業した学生が社会で活躍する上で、また、鹿児島大学を活性化させる上で無視できない点だと感じます。

大学は自由な発想のもと、夢や希望を国内外に発信・提供する場であると私個人は信じています。これは国や企業の試験研究機関のプロジェク的なスタンスとは一線を画する点でもあります。着任して僅か一年余の教育研究歴の乏しい私が申し上げるのは甚だ烏滸がましい限りではありますが、ユニークで質の高い研究が、長いタイムスパンで必ずや教育レベルの質の向上に繋がるものと思いますし、自分もそれを常に意識した教育研究を展開できるよう努力する所存です。

「平成23年度 FD・SD 合同フォーラム」に参加して

西野吉彦

大学地域コンソーシアム鹿児島 FD・SD 活動事業部会と鹿児島大学 FD 委員会の共催で開催された「平成23年度 FD・SD 合同フォーラム」に参加した。開催された日時は2011年11月26日(土) 13:00~16:30で、場所は鹿児島大学郡元キャンパス 共通教育棟3号館2階321号教室であった。

開催趣旨は、以下のようなものであった。

「進学率が 50%を超え、ユニバーサル化した大学において、21世紀の新しい市民感覚を持った大学生を育てるためには、大学教育は教職員から学生への作用だけでなく、学生から教職員への反作用、そして学生から学生への相互作用のある緊密な学習環境を醸成しなければなりません。すなわち、大学の中で新しい市民感覚を創り出すことが重要となります。今回の FD・SD フォーラムでは、学生から学生、学生から教職員への働きかけの大切さを、学生自身や教職員へ啓発するとともに、実際の方策について考えてもらい、大学と

しても今後の支援システムの開発に役立てることを目指します。」

招聘講師として、秦 敬治（愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室 教授）と ELS（愛媛大学リーダーズ・スクール）学生 4 名がプレゼンテーションを行った。このフォーラムに参加したのは、鹿児島大学並びに大学地域コンソーシアム鹿児島参加機関の教職員、鹿児島大学学生（30名程度）、大学地域コンソーシアム鹿児島参加機関の学生（15名程度）であった。当日は、教室がほぼ満杯となるほどの参加者あった。このフォーラムの目的および到達目標は以下のとおりであった。

学 生： 新しい市民感覚の形成と自己成長に必要となる自分自身の課題を模索する。そして今、何をなすべきかをワークショップ等を通して具体化する。

教職員： 学生の学び合いを進めるために大学として、個人として何をすべきか、具体的な方策を見出す。

大 学： 新しい学習環境の構築や学生支援の方策について、方向性と具体策を見出す。

愛媛大学の秦 教授によるプレゼンテーションは刺激的で、全国的に「FDの愛媛大学」と評価されている評判もうなずけるものであった。内容は、学生の中からリーダーズスクールを受講希望するものを募り、リーダーズスクールの教育プログラムにより、リーダーとしての能力を高め、リーダーシップを発揮できるような人材に育て上げ、それらの学生の活動により、大学の諸活動の活性化を促していこうというものであった。

大学教育の運営上、リーダー的な学生の存在は、好都合であり、さまざまな活動において、スムーズさや利便性をもたらしてくれる。そういった観点から、リーダーシップを発揮できる学生を育成して、大学教育に生かしていこうという趣旨は合理的かもしれない。一方で、大学教育は、大学のもつ確固たる教育方針や理念に基づき行われるべきものであり、やはり、専任のスタッフによって、粛々と実施されるべきであると考えている。したがって、率直な感想を述べると、今回の内容は、FD活動とは少し違うものであると感じた。全体を通して、大学の役割や存在意義とは何なのかについて考えるいい機会になったと思う。

リーダー教育についても、若干の違和感を持った。学生にはそれぞれ、個性があり、リーダーの素養を持ったものもいれば、裏方で力を発揮するものもいる。また、人との関わりが苦手で、むしろ、論理的思索に長けているものもいるだろう。そういった個性を認めあうことが重要であり、無理矢理、優秀な学生をリーダーに育て上げようとする取組は、さまざまな困難を伴うのではないだろうか。FD活動という観点からは、それぞれ個性をもつ学生に対して、大学の教育はどのように対応していくべきなのかを、今回のフォーラムで課題として認識できた点であったのではないだろうか。

平成 23 年度の FD・SD 合同フォーラムに参加して

生物生産学科 高山 耕二

テーマは「学生の学び合いを通じた活力ある大学づくりを目指して」。愛媛大学リーダーズ・スクール（ELS）に学ぶのがフォーラムのメインであった。ELS を立ち上げた秦 敬治氏（教育・学生支援機構教育企画室）による「愛媛大学の学生支援とリーダーズスクールの事例～学生と教職員が本気で向き合うとは～」と題した基調講演が行われ、続いて教職員はパネルディスカッション、学生は愛媛大学の ELS の学生をファシリテーターとし、鹿児島大学学生・大学地域コンソーシアム鹿児島参加機関の学生を対象にしたセミナー「自分を見つめ、組織を見つめる」を行った。確かに、フォーラムに参加した愛媛大学 ELS の学生は質問に対し、まごつくことなくハキハキと答え、活発な印象と ELS の成果を感じさせてくれた。何故だろう。通常、学生支援は何か困っている学生を対象に行われてきた。

これに対し、ELS はスタディ・スキルならぶにソーシャル・スキルに秀でた学生を対象としたプログラムである。ここがポイントであった。 ELS では、1) リーダーならびに将来リーダーになり得る学生が、在学中（授業やゼミ，サークル活動，ボランティア活動，大学行事など）の様々な問題を解決できるようになり，その経験を通して“人間的に成長”すること，2) 修了生が卒業後の市民社会や職場においてリーダーシップを発揮することで社会を貢献すること，そして 3) ELS に参加した学生のスキルアップが従来，教員による学生支援の対象となっていた学生にプラスの効果をもたらすことを目的にプログラムが実施されている。 講演の中で紹介された ELS の成果は素晴らしかった。一方で，講演では紹介されなかったが，ELS に参加していない大多数の学生への波及効果が気になった。そして，大学はリーダーを育てる場なのか？リーダーシップ＝リーダーの資質なのか？悶々としながら約 1 時間の講演を拝聴した。私自身，学生への指導のあり方を見詰め直した有意義なフォーラムであった。

学生・教職員ワークショップ 「鹿大らしいピア・サポートを創り出そう」に参加して

生物資源化学科 徳永正雄

平成23年12月22日（木）、16：10から3時間半程度に渡り、標記「学生・教職員ワークショップ」が、稲盛アカデミー棟 A11 教室で開催された。

今回のピア・サポートに関するワークショップは、平成23年2月の「鹿大のピア・サポートを考える」、7月の「みんなでつくろうピア・サポートの輪」に続く3回目の催しであり、本学のピア・サポートの具体的な体制作りを目指したものであった。

出席者は、学生・教職員合わせて63名と盛況であり、7～8名ずつの8グループに分かれ、「新入生支援」、「学習支援」、「学生生活の支援」、そして「就職活動支援」の中からテーマを選択し、それぞれ学生の進行でディスカッションを行った。

私が参加した班は、学生4名、教職員4名（うち1名欠席）からなり、学生、教職員のわけへだてなく、活発な討論が行われた。当班では、「就職活動に関する支援」をテーマに選んだ。就活がとても大変な時代であり、学生の皆さんにとって最も切実な課題と思い、私もこのテーマで話し合うことを希望した。グループの学生さんは、すでに就活を終わった4年生が一人と、これから就活を始める2年生が3人であり、上級生からは、自分の就活を振り返って自分の経験から、どのようなサポートができるか？ また、これから始める人達からは、自分たちにとって「どのような情報が欲しいか？」を提案してもらった。

具体的な意見・要望は以下のようなものであった。幅広い職種を考える機会として、企業説明会の時などできるだけ幅広い分野の企業に参加して欲しい、教育学部の学生に対して、教員以外の職につく学生も多いので幅広い情報と支援が欲しい、学部学科にこだわらない就活サポートが欲しいなど、「幅広い情報」を求める要望が多かったように思う。また、就活にお金がかかる悩みも強く、就職活動に関する「授業」の開講を望む声もあった。サポーターとしては、上級生だけでなく、すでに社会に出た卒業生にも経験を話してもらえるサポーターになってもらえるように、在学中から依頼しておくシステムが欲しいとの意見もあった。就活中の学生にとっては、自分と同じ方向を目指す人たちとの交流の場が欲しいとの声があった。就職支援室をはじめ、各学部でも就職支援を重視しているが、参考になる意見交換の場であった。

最近のニュースで、「2010年春に卒業した大学生・専門学校生のうち、52%が、就職できなかったか、3年以内に退職している」ことが報道されていた。半数以上の人々が、職についていないか、転職しているという事実には驚かされた。多くの学生諸君が大事な時間を大量に費やした消耗戦の結果、やっと手に入れた職のかなりの部分が「期待と異な

っていた」という現実、今の就職戦線、特に求人方法・選考方法に問題があることを物語っていると思われる。自分の意見をどんどん発表できる活発な学生さんにはリーダーシップが期待できるだろうし、口下手で控えめな学生であっても、物事を成し遂げるある種の「職人的こだわり」を天性に持っている人も少なくない。技術職の現場では、器用さや状況を正しく的確に見定める観察力が必要であり、このような部分はエントリーシートと限られた短時間の面接では、容易に評価できないと思われる。もっと本来あるべき、人を見た選考方法に戻って欲しいものだと痛感している。

ピア・サポートから、話題がそれてしまったが、順調に学生生活を送っている人に対しても、問題を抱えて苦しんでいる人に対しても、教職員、学生を問わず周りにいる人達がいかに親身になって支えてゆけるか？が、高等教育の教育現場にも求められている。

学生・教職員ワークショップ 「鹿大らしいピア・サポートを創り出そう」に参加して

農学部教務係長 吉村大作

学生・教員・職員のミックスしたグループが8班に分かれ、ピア・サポートの対象となる「新入生支援・学習支援・学生生活の支援・就職活動支援」のそれぞれのテーマを選び、問題提起から解決方法までのディスカッションを行った。

学生の立場としての意見、教員の意見、職員から見た意見が出され、それぞれの立場から見た鹿大に対する要望が明るみになり、問題解決まで根気よく話し合いが続けられた。

ピア・サポートとは「学生生活上で支援（援助）を必要としている学生に対し、仲間である学生同士で気軽に相談に応じ、手助けを行う制度」となっているが、今回の話し合いが学生の積極的な参加により進められたところをみると、案外学生に任せてみたらこの制度は順調に進むのかも知れないと思った。（ただし、研修は必要。）

また、若い教職員にも積極的に参加してもらいたいワークショップだった。

平成 23 年度教育・学生支援担当教職員講習会に参加して

農学部附属焼酎・発酵学教育研究センター
玉置 尚徳

去る 3 月 27 日に平成 23 年度教育・学生支援担当教職員講習会に参加した。私は、平成 24 年度の生物資源化学科の教務委員を担当することになっており、新入生オリエンテーションにおいて説明を行う必要があるため新入生オリエンテーション説明者講習会として参加したのであるが、この会が教育・学生支援担当職員講習会も兼ねているということに当日気がついた。最初の講師は、福岡大学人文学部の徳永豊先生で演題は「発達障害のある学生とその支援 ～知らないと困る、ちょっと変わった学生への対応～」というものであった。講演の内容は、発達障害とはどのようなものか、どのような特徴があるのか、我々職員はどのように対応しなければいけないのかという内容について詳しく説明された。講演に先立って開会の挨拶をされた鹿児島大学教育担当理事の阿部美紀子先生も、鹿大でも発達障害と思われる学生の数が増えつつあり教職員も対応を迫られている現状を説明されていた。さらに鹿児島大学保健管理センター所長の伊地知信二先生が、実際に保健センター

が取り組んでいる内容について紹介されたのであるが、それを聞いて大変驚いてしまった。保管管理センターでは、発達障害などの学生支援として、朝授業に出るようにモーニングコールをしたり、部屋まで迎えに行ったりされているとのこと。また、彼らのために勉強スペースを確保したり、担当の先生に来てもらって保健管理センターで卒論発表を行ったりもされている。私は、それほどまでに大変な現状であるとの認識を持っていなかったためにかなりショックを受ける内容であった。今回の講習会に参加したことで、発達障害の学生に対して我々教職員はどのように対処すべきか、また自分たちだけで対応するのではなく保健管理センターとの連携によってそれらの学生支援を行うことも重要であるということを知ることができ大変有意義であった。肝心の新入生のオリエンテーションでの説明内容については、説明会までのあと数日に復習するつもりである。

より身近な FD 活動の重要性

生物資源化学科
徳永正雄

農学部や全学の FD 活動を企画したり参加する機会を得、講習会に出たり、ワークショップを体験したり、自分にとっては大変ためになる経験をさせていただいた 1 年であった。農学部 FD 委員会の規則によると農学部及び農学研究科の「教育の内容及び方法の改善」を図ることが FD の目的と定められている。もちろん、個々の教員は自分たちの学問領域がいかに重要でいかに面白いかを、どのようにすれば学生諸君に伝えられるかについて日々考え、実践し続けている。FD はそれを少し「組織的に」みんなで考えようとするものである。個々の教員の努力やその成果を皆で共有し、それらの成果に学んでさらに自分たちの教育を充実させようという趣旨である。組織的に実施することになれば、個々の教員にとっては、日々大変忙しい中、参加を強いられるという感覚があり、窮屈に感じることもあることは事実である。

今年、様々な FD の催しに参加して強く感じたことがある。教員は日々学生諸君と向き合って教育・研究活動に打ち込んでいる。ここで自分を振り返った時に、自分の専門分野（私の場合は、微生物学や、生化学、遺伝子工学など）については、毎年セミナーや学会に参加して自分たちの成果を発表したり、新しい情報を得ようと努力している。しかし、教育方法などの教育に関する専門知識を得ようとする努力はしていない。その種の学会にも入っていない。FD の企画というのは、そのような知識を提供してくれる、もしくは、教育の方法について少し考えてみるきっかけを提供してくれる貴重な場である。非会員性の学会のようなものと思えば良い。学生諸君の学問や大学教育に対する意識の多様化が感じられる昨今、自分の経験に頼っているだけではなく、教育方法や学生諸君の意識の動向など新しい知識と情報を得ることがますます重要になってきていると思われる。この意味で、FD は重要であり、形式的なものではなく、もっと自分たちの「身近にあり、役に立つもの」でなくてはならないと思う。

本年度の最後に開催された教育・学生支援担当教職員講習会（新入生オリエンテーション説明者講習会）は、新入生の支援に携わる教職員を対象として、履修制度をはじめとする共通教育の仕組みについて理解するとともに、特別支援教育の専門家の講演や本学保健管理センターの取り組み報告を聞くことにより、多様な学生に対する理解を深め、対応のために必要な基礎的な知識を習得することを目的として、平成 24 年 3 月 27 日（火）13:30 より開催された。

最初に福岡大学人文学部の 徳永 豊 先生から、「発達障害のある学生とその支援」～知らないで困る、ちょっと変わった学生への対応～と題した講演があった。先生は、

特別支援教育の専門家であり、様々な事例を挙げながら「発達障害」について分かりやすく説明いただいた。徳永先生は、「発達障害のある学生の困難さと支援のとらえ方」のイメージ図として、グラウンドで野球をしている子供たちのイラストを示され、通常の学生は通常のきれいなグラウンドで野球を楽しんでいるが、発達障害のある学生の周りには、大小様々の大きさの岩がゴロゴロころがっていて、野球ができず途方に暮れている子供の姿が描かれていた。彼らの行動を困難にしているこのゴロゴロころがっていて岩が、我々教員に見えるか？ また、その岩を丹念に取り除いてゆけるか？ 個々の局面での教員の努力と大学の組織としての体制の整備が必要である。

徳永先生の講演に引き続いて、本学保健管理センター所長の伊地知信二先生より、「保健管理センターの学生支援体制について」と題する講演があった。学生へのカウンセリング、イベントの企画による学生支援、毎朝学生に電話して登校を促すモーニングコール、アパートへ迎えに行ったり、管理センタースペースでの学習支援等々、数々の取り組みをされていることが紹介された。筆者の学科でも毎年のように問題を抱えて苦しむ学生さんが在籍し、保健管理センターの先生方やスタッフのみなさんには、本当にお世話になっている現状であり、教員がどのように対処したら良いかを専門的な立場から助言していただけるのは、当該の学生さんにはもちろんのこと、我々教員にも対応の拠り所になっている本当にありがたい存在であると感じている。休息を挟んで、後半は、本学の新生に対する履修説明のポイントが集約的に解説され、意義のある講習会であった。

最後にもう一度くりかえしになるが、FDは重要であり、形式的なものではなく、もっとも自分たちの「身近にあり、役に立つもの」でなくてはならないと思う。

水産学部・ 水産学研究科

よりよい教育環境を創るために

学生の、学生と教職員による、学生のための
ファカルティ・デベロップメントの取り組み

2011

鹿児島大学水産学部 FD 委員会

1. はじめに

水産学部では、教育に対する学生満足の実現を目的として、水産学部教育システム運用マニュアルを策定し ISO9001 を取得しています。このマニュアルに基づいて、水産学部ファカルティ・デベロップメント委員会（FD 委員会）は、教職員の力量を維持し高めるための教育訓練、学生満足度を把握するための授業アンケートを実施し、その評価を行っています。FD 委員会は、ISO9001 が求める PDCA サイクルの Check（授業アンケート）を中心に Action（教育訓練の実施）にも関わり、授業改善、教育改善において重要な役割を担っています。

本年度、FD 委員会が策定した年間教育訓練計画は以下のとおりです。

第 1 回 平成 23 年度前期授業公開・授業参観

第 2 回 水産学部 FD 講習会「授業へのディベート学習の導入—『水産業と倫理』を例に—」

第 3 回 水産学部 FD ワークショップ「～水産学部の教育のあり方をみんなで議論しよう～」

第 4 回 平成 23 年度後期授業公開・授業参観

第 5 回 平成 23 年度教育・学生支援担当教職員講習会

また、今年度は、授業アンケートの質問項目、書式を改訂するとともに、鹿児島大学ファカルティ・デベロップメント委員会（全学 FD 委員会）の依頼を受けて、ピア・サポート制度の構築にも取り組みました。以下に、それぞれの概要とその成果を報告します。

2. 授業アンケートと 授業改善

FD 委員会は、受講生に対し、各学期末に授業アンケートを行っています。授業アンケートでは、教室の環境、授業内容、教員の授業の進め方、受講生の授業への取り組みについて質問し（表 2.1）、各質問項目について 4 段階の評価を受けています。ここでは、平成 22 年度後期と平成 23 年度前期の授業アンケートについてまとめます。

表 2.1 水産学部授業アンケートの質問項目（講義・演習科目）

質問項目 A 群：教室の環境に関する質問 A-1. 教室の大きさは受講人数に対して適していた A-2. 授業中は私語がなく、授業に集中できた
質問項目 B 群：授業内容に関する質問 B-1. シラバスには、授業の目的、内容が分かりやすく示されていた B-2. 授業内容はシラバスに沿っていた B-3. 授業内容は理解可能な範囲であった B-4. 授業時間外にも学習を求める内容であった B-5. この授業は知識や考える力を深めるのに役立った
質問項目 C 群：教員の授業の進め方に関する質問 C-1. 授業は時間通りに行われた C-2. 教員の声、話し方は聞き取りやすかった C-3. 説明は分かりやすかった C-4. 板書、配付資料、パワーポイント等は授業理解に効果的だった C-5. 授業中または時間外に質問する機会を設けてあった
質問項目 D 群：受講生の授業への取り組みに関する質問 D-1. あなたはこの授業に何回出席しましたか D-2. この授業のシラバスを読みましたか D-3. この授業を理解するための基礎学力はありましたか D-4. この授業を意欲的に学ぼうとしましたか D-5. 予習、復習など、時間外に勉強しましたか D-6. あなたがこの科目を受講した理由を選んで下さい

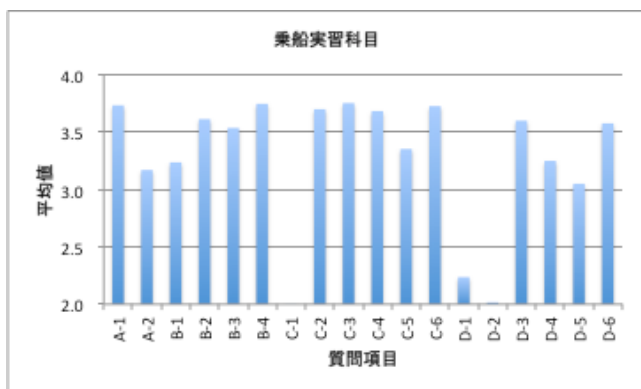
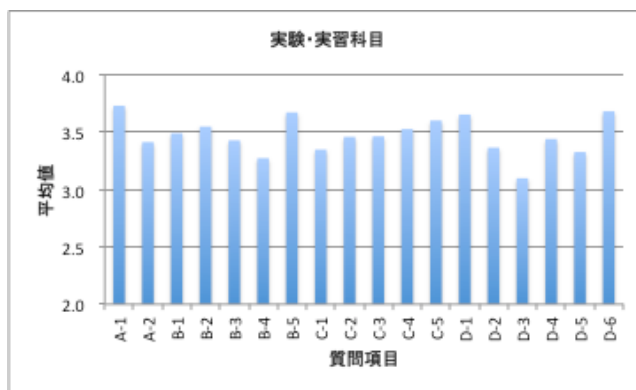
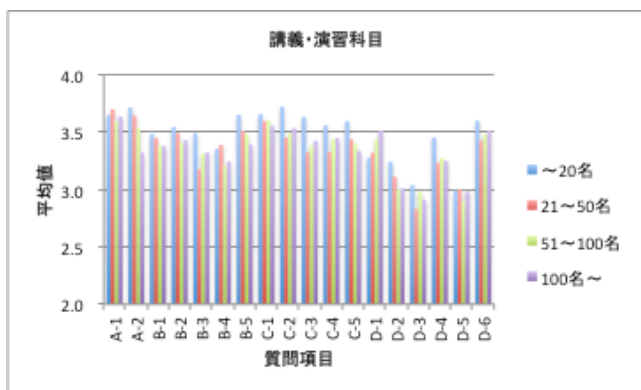


図2.1 平成22年度後期開講科目の授業アンケート集計結果

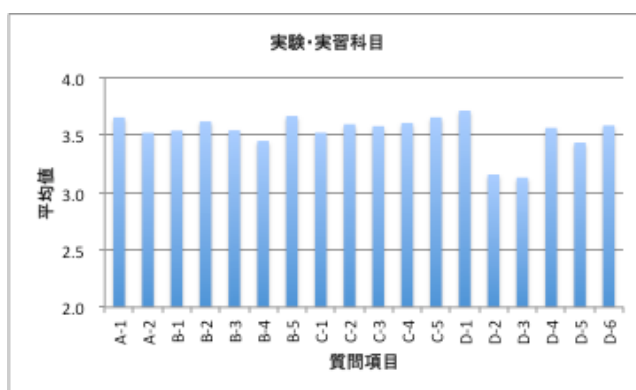
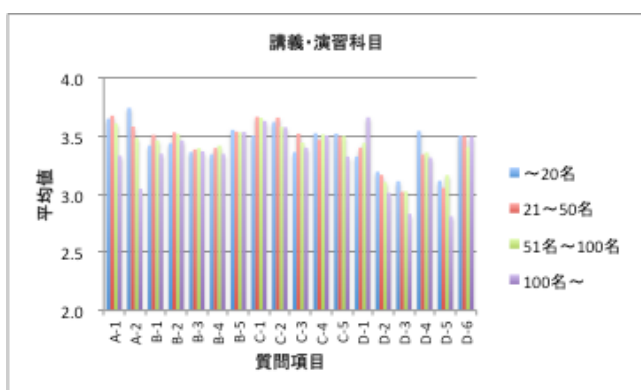


図2.2 平成23年度前期開講科目の授業アンケート集計結果

各質問項目の科目間の平均値を図 2.1～図 2.2 に、質問項目間の相関係数を図 2.3～2.4 に示します。講義・演習科目の平均値は受講生数別に示しました。講義・演習科目では、質問項目 D-3「この授業を理解するための基礎学力はありましたか」のポイントが低い傾向にあり、特に平成22年度後期ではいずれも「そう思う」のポイント、3.0を下回っていました。また、D-3は質問項目B-3「授

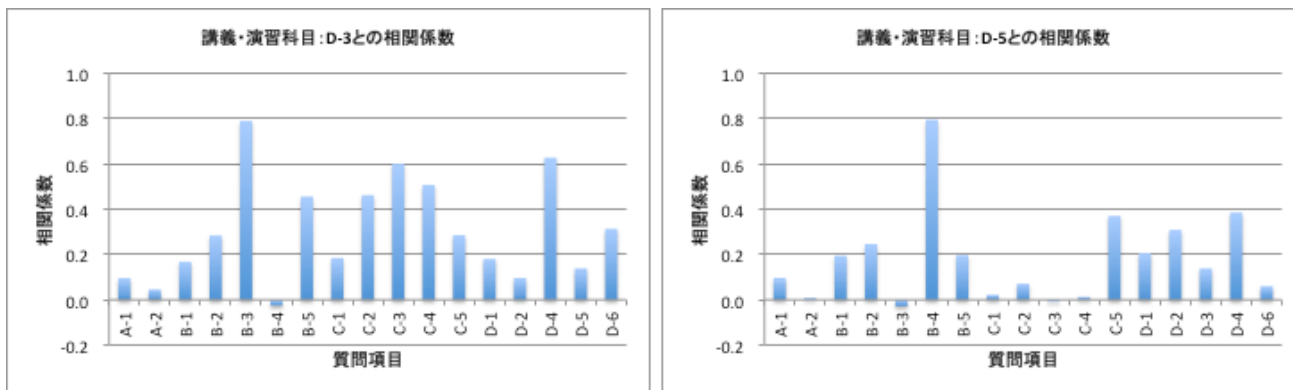


図 2.3 平成 22 年度後期講義・演習科目における質問項目間の相関係数

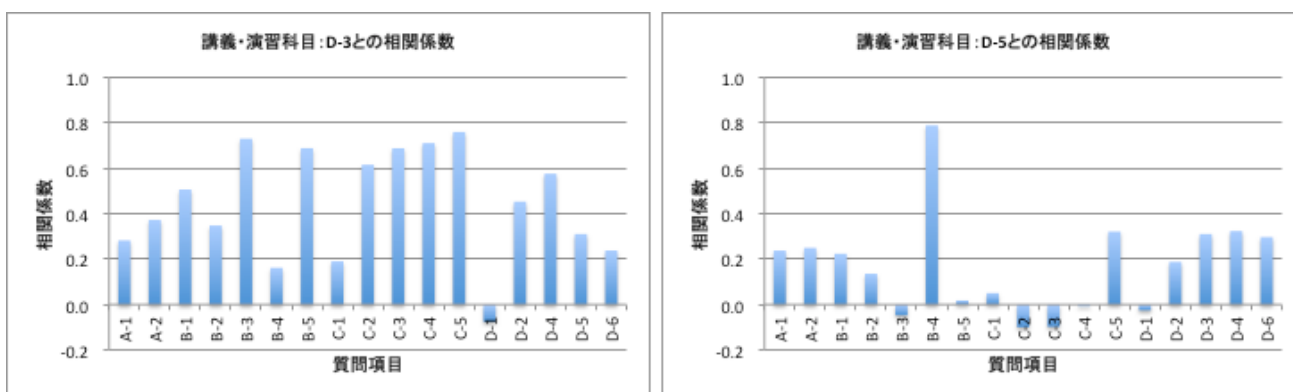


図 2.4 平成 23 年度前期講義・演習科目における質問項目間の相関係数

業内容は理解可能な範囲であった」と高い相関を示しています。その一方で、平成 21 年度後期の受講生 20 名以下の科目 20 科目中 5 科目が、受講生 21～50 名の科目 24 科目中 6 科目が 2.5 未満の値を示していたのに対し、平成 22 年度後期ではそれぞれ 18 科目中 1 科目、25 科目中 4 科目と漸減傾向にありました。前年度に比べて平均値も漸増していることから、全体的に改善傾向にあると思われます。ただ、前期の受講生 100 名以上の科目において D-3、D-5 のポイントが低いのは、入学して初めて触れる水産学関連科目への戸惑いを反映しているのかもしれませんが。

D-5「予習、復習など、時間外に勉強しましたか」についても、総じて D-3 と同様の傾向にあります。質問項目 D-4「この授業を意欲的に学ぼうとしましたか」が 3.25～3.56 とさほど低くないことから、学ぶ意欲はあるものの、学習の仕方が分からないのではないかと思います。加えて、D-5 は質問項目 B-4「授業時間外にも学習を求める内容であった」との高い相関を示しています。このことから、時間外の予習・復習についても、教員の十分な指導とサポートが必要であると思われます。なお、実験・実習科目で例外的に 3.33～3.44 と高い値を示しているのは、成績評価の対象としてレポートを課しているためと考えられます。

3. 授業公開・参観と授業改善

FD 委員会では、教育従事者の教育訓練の一環として授業公開・授業参観を行っています。各学期

の初めに授業公開への協力を依頼し、公開可能との回答をいただいた科目について授業公開をします。水産学部に限らず、全学の教職員や当該授業を受講したことのある学生の参観も可としています。授業公開にご協力いただいた担当教員には授業公開・授業参観報告書(表 3.1)を提出いただき、授業改善の基礎資料としています。本年度は、前期に 10 科目、後期に 13 科目の授業公開を行い、それぞれ 14 名(うち学生 2 名)、9 名(うち学生 6 名)の参加を得ました(表 3.2)。また、後期には、平成 22 年度水産学部 FD ワークショップに参加した学部 4 年生の意見に基づいて、3 科目を授業参観推奨科目に指定し、参観者を募りました。

授業公開・授業参観報告書の記載内容を以下にまとめます(表 3.3)。本年度の特徴として、受講生の積極的な参加を目的とした取り組みが挙げられます。たとえば、グループ学習の手法を活用し、課外調査活動をグループ単位で課題として与え、その結果を発表、ディベートさせるといった事例が紹介されています。自由課題として受講生に実験内容を企画させている実験科目の例もあります。また、近年の学習に対して受動的な学生気質を反映してか、重要なポイントをいかに意識付けさせるかに苦労を重ねている様子がうかがえます。

一方で、授業参観者数は、授業公開・授業参観報告書が提出された公開授業 1 科目当たり平均 1.0 名と昨年度(0.5 名)からは改善しましたが、授業参観者がなかった公開授業は 65.2%と昨年度と同レベルでした。今後、授業公開・授業参観を意義あるものにするためにも、授業の実施方法の工夫を議論し合う場から、授業内容の連携を図りつつカリキュラム

表 3.1 授業公開・授業参観報告書の記入項目

本授業の長所 授業担当者からの意見を記入。 学生から良い点として寄せられた意見、特に留意している点、工夫している点など
本授業の改善に参考となる意見など 参観者からの意見を記入。
本授業に対する感想など 授業担当者が自身の感想、参観者からのその他の感想を自由に記述。

表 3.3 平成 23 年度授業公開・授業参観報告書から抜粋した授業改善への取り組み事例

<p>受講生の積極的な参加を目的とした工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> グループ学習の手法の活用 (課外調査活動、発表、ディベート) 自由課題としての実験内容の企画(実験科目) <p>重要なポイントの意識付けのための工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> 配付資料への重要点の明記 重要点を強調する話し方 <p>興味を喚起するための工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> 最新の研究成果、社会的に注目されるトピックの導入 <p>時間外学習を促すための工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ミニツツペーパー、レポートの活用 次回の授業内容のレポート作成 試験の際に持ち込む参考資料の作成
--

表 3.2 平成 23 年度授業公開・授業参観のまとめ

	授業公開科目数	授業改善報告書 提出科目数	参観者数 (うち学生の参観者数)
平成 23 年度前期	10	7	14 (2)
平成 23 年度後期	13	3	9 (6)

の質的向上を目指す取り組みへと発展させる必要があると思われます。たとえば関連する科目群の担当教員でグループを形成し、目的意識を共有した上で定期的に授業公開・授業参観を行うのも効果的ではないかと考えます。

4. FD 講習会「授業へのディベート学習の導入—『水産業と倫理』を例に—」

教育従事者教育訓練の一環として、平成 23 年 9 月 21 日に、FD 講習会「授業へのディベート学習の導入—『水産業と倫理』を例に—」を開催しました。「水産業と倫理」は学部基盤科目として平成 21 年度より開講された 3 年生の必修科目です。当初は外部講師による集中講義として、座学形式で授業が行われていましたが、平成 23 年度からは通常開講授業として水産学部の 5 名の教員（山本智子先生、永松哲郎先生、山本淳先生、佐久間美明先生、木村郁夫先生）が担当されることとなりました。加えて、本授業の教育目標である水産技術者としての倫理観、職業観の育成を目指し、発表会やディベート学習の形式が取り入れられました。これまでに、水産学部の授業でディベート学習を採用した例はほとんどないのではないかと思います。そこで、「水産業と倫理」における取り組みについて理解を深めていただき、ディベート学習について考えていただく機会を提供することを目的として本講習会を開催し、担当教員の山本智子先生、佐久間美明先生にご講演をいただきました。また、「水産業と倫理」では多くのティーチングアシスタント（TA）が参加し、模擬ディベートを披露したり、各班の学習支援に当たりました。そこで、3 名の TA にも参加した際の印象や感想などを報告していただきました。

山本智子先生、佐久間先生のご講演内容を以下にまとめます。「水産業と倫理」では、水産技術者として備えるべき資質と責任感、倫理観を身に付けさせることを目標として、水産業に関連して近年社会的に議論の対象となっているテーマを取り上げ、発表会形式、ディベート形式の学習方法が取り入れられました。テーマとしては、例えば調査捕鯨、諫早湾潮受堤防排水門の開門、フグ養殖におけるホルマリン使用、水産加工食品の産地偽装、魚転がしによる魚価操作などが取り上げられました。受講生は、各テーマに関する基礎的な知識を講義で学んだあと、6 人ずつの班に分かれ、さらに自ら情報を収集します。それらを総合し、発表あるいはディベートを行います。特に、ディベートの場合は、あらかじめ各班に主張すべき立場が与えられており、相反する主張を持つ班に対して自身の班の主張を立論します。その後、相手方の班に対して反対尋問を行い、それぞれの主張の正当性について討論します。ディベート後、自身の班の立論、反対尋問の自己評価ならびに他の班のディベートの評価（勝敗）をミニレポートにまとめさせ、ディベートの成績評価に利用しています。今後改善すべき点としては、より少人数で授業を行うこと、発言を通してのコミュニケーション能力の向上を図ること、主張すべき立場をよりシンプルにすること、ディベート後にディベート方法やその内容の適否について解説し、受講生にフィードバックすることが挙げられました。

また、TA の方からは、以下のような報告をいただきました。TA の役割は、授業の進行や受講生の学びをサポートすることにあります。そこで、班内でのディスカッションを促したり、授業中の発言を促すなど、受講生がより積極的に参加できるような配慮を心掛けたとのことでした。また、TA

として参加することによって、自らのコミュニケーション能力の向上につながり、例えば就職面接でも大いに役立つとの感想もいただきました。

講演後の質疑応答では、職業観や倫理観をディベートを通して養う取り組みは画期的であり、今後、ディベートや発表会形式を取り入れた授業を充実させる必要があるとする意見がありました。その一方で、ディベートは職業観や倫理観の育成とは相容れないものであり、カリキュラム上整理してディベート技術の向上に特化した授業を検討すべき、あるいは、ディベート後の受講生へのフィードバックの充実が成功の鍵となる、といったご意見もいただきました。ディベート学習のメリットにはさほど異論はなかったものと思いますが、今後どのように水産学部のカリキュラムに取り入れていくか吟味する必要があると思われまます。

また、ディベート形式の授業への TA の参加が TA のスキルアップに役立つのではないかと期待も寄せられました。受講生とのディベートに加わるには TA も相応の準備が必要となりますし、たとえば受講生が TA を評価する仕組みを取り入れれば、TA の活性化にもつながるといった提案もいただきました。

今回の FD 講習会が、水産学部のカリキュラム体系の中でディベート学習や発表会形式の授業をどのように位置付け、組み込んでいくか、その議論の端緒となれば幸いです。

5. FD ワークショップ「～水産学部の教育のあり方をみんなで議論しよう～」

趣旨

鹿児島大学水産学部では教育全般に対する満足度を向上させるため、ファカルティ・デベロップメント (FD) に関する様々な取り組みを行っています。例えば、品質のマネジメントに関する国際標準化規格である ISO9001 を教育分野に国立大学として初めて導入し、授業アンケートも他学部在先駆けて導入しました。しかし、これらの取り組みは教職員主体によるものであるため、学生の Needs を十分に把握しきれていない可能性があります。そこで、学生の視点からの意見を集約するための FD ワークショップを平成 20 年度から実施し、授業や教育コース、研究室の選択に関する問題点を議論すると共に、教育の改善に反映させてきました。本年度は、学生が望む教育や教授法、教育に対する満足度、大学生活における水産学に対する意識の変化について考えることを主な目的としました。

平成 23 年度の FD ワークショップでは、学生間の意見交換によるワークショップを平成 23 年 12 月 14 日に行いました。今回のワークショップでは時系列ごとに学生の水産学部に対する印象がどう変化していったか、ということから学生達の水産学部へ希望していたこと、その希望へと学部が十分応えていたかどうか、ということ捉えることを目的として、学生達への意見聴取を行いました。この結果に基づき、平成 23 年 12 月 21 日に教職員によるワークショップを実施し、学生からの意見について、全体的な解析を FD 委員会が行い、各分野から出た意見については各分野担当チューターによる解析結果の発表を行いました。

第1部：学生間の意見交換によるワークショップ

水産学部各分野（漁業工学、水産生物・海洋学、食品・資源利用学、養殖学、水産経済学）およびセンターに所属する4年生30名（各5名ずつ）に参加してもらい、下記に示した5つの大まかなテーマに沿って学生に意見交換してもらいました。各分野・センターの代表学生がMoodleのシステムを用いて個々の意見を記述しました。

主なテーマ

- (1) 水産学部に対する印象の変化（入学前後、研究室配属前後、現在）
- (2) 水産学部・所属分野の教育や指導の印象（良かった点や改善点、要望）
- (3) 実験、実習（航海含む）、演習等の印象（良かった点や改善点、要望）
- (4) 卒業研究等の印象（卒業研究開始前後、改善点や要望も可）
- (5) 就職活動や進学、進路決定に役立った科目や指導、情報（改善点や要望も可）

第2部：教員によるワークショップ

教員によるワークショップでは、分野チューターが各分野の意見をテーマごとに整理し、紹介しました。また、全体に関する部分をFD委員

表1. 水産学部に対する印象の変化（代表的意見の抜粋）

入学前	魚の養殖池がある 海の生き物のことしか勉強しない 乗船実習ばかり 漁師になる人が来ている
入学後 (1~3年生の時)	建物が古い 野外調査が少ない いろんな分野がある (多くて困った、いろいろ勉強出来て良かった、等)
研究室配属後	就職活動と研究の両立が難しい 思ったより研究が忙しい 設備が乏しい、古い

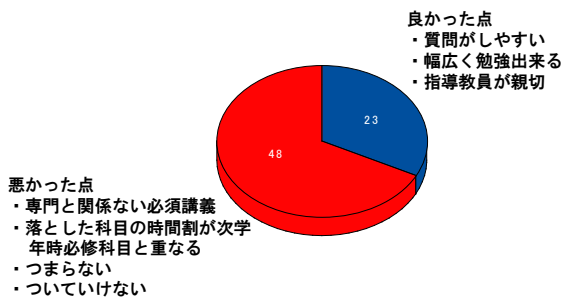


図1. テーマ2「水産学部・所属分野の教育や指導の印象」

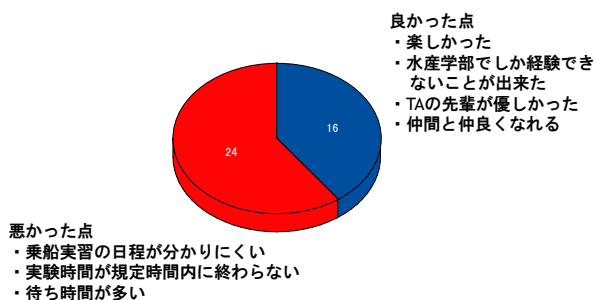


図2. テーマ3「実験、実習（航海を含む）、演習等の印象」

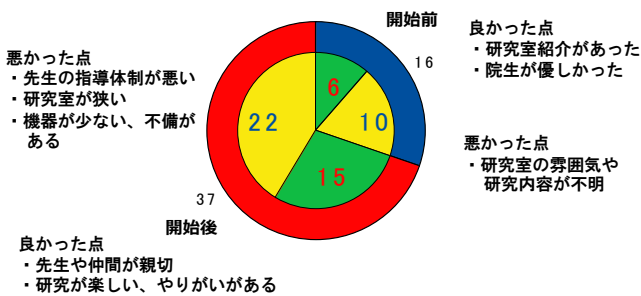


図3. テーマ4「卒業研究等の印象」

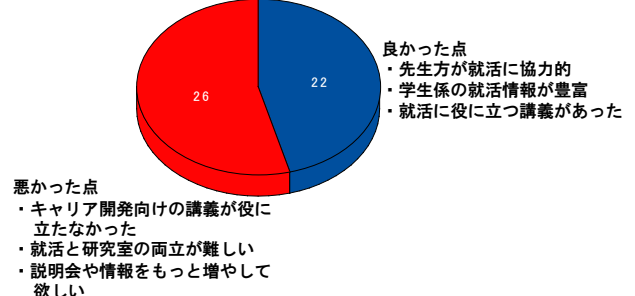


図4. テーマ5「就職活動や進学、進路決定に役立った科目や指導、情報」

会が解析し、水産学に関する印象の変化や教育の印象等について考察しました。

FD 委員会による考察結果

全テーマに渡って、マイナスイメージ（施設が古い、教育システムに不備がある、など）の回答が多く寄せられていました。水産学部に対するイメージは、学年や年度が進行するにつれて、学生達はその都度直面する問題に関わる印象へと変化しており、(2) の教育指導の印象、(3) の実験実習の印象、(4) の卒業研究等の印象でも、その都度学生自身に降りかかった問題に関するものが多数ありました。一方で、良かったとする回答では、人間関係や、講義・実習内容に関するものが多く、回答としては少なかったのですが、ある程度の満足感を学生達は抱いていることがくみ取れました。逆にマイナスイメージとして上がっている問題点はその都度に直面していることなので、深刻なものは少なかったのですが、(5) の就職活動に関するテーマでは、キャリアデザイン関係の講義内容に関わるものが圧倒的に多く、こうした講義に改善の必要性があると感じられました。

厳しい意見があった一方で、「当初の希望職種とは異なる職に就くことになったが、全く不満はなく、むしろ、より良い職種に進むことができたと感じている。」「4年間通して、水産学部に来てよかったと思う。」などといった意見が寄せられており、学部での教育や指導が学生にとって的外れでないことが示されていました。マイナスイメージを払拭するような処置も必要ですが、前述のような「水産学部に来て良かった」というような意見を増やせるように努力するべきだと思われま

6. 授業アンケートの質問項目、書式の検討

水産学部では、学部で開講される全科目について授業アンケートを行っています。現行の授業アンケートは、FD の教員への周知、学生満足度を向上させるための授業設計、「契約書」としてのシラバスの作成、単位数に応じた授業時間数の確保といった観点から質問項目がデザインされています。しかしながら、こういった取り組みが十分に浸透し、FD への取り組みの理解も深まった現状にはすぐわかない質問項目もあります。そこで、FD 委員会では以下の改善方針に基づき授業アンケートの書式の改訂を行いました。

- ・ 教員の授業改善につながるような質問項目を厳選する。
- ・ 受講生に尋ねるまでもなく教員が把握できる、あるいは教員が判断すべき質問項目は入れない。
- ・ 受講生の生の意見が得られるよう、記述式回答を求める質問項目を設ける。
- ・ Moodle を利用した授業アンケートに取り組む。

図 6.1 に新しい授業アンケートを示します。受講生の満足度に応じ、満足した点あるいは満足できなかった点について具体的な記述を求める様式としました。また、担当教員が自由に質問項目を設定できる欄も増やしました。新しい授業アンケートは、本年度後期から試行し、その効果を検証する予定です。また、Moodle を利用しての実施も一部の科目で施行を予定しています。なお、授業アンケートの Moodle への移植については、漁業工学分野・日高正康先生にご尽力いただきました。ここに厚くお礼を申し上げます。

7. ピア・サポート制度導入への取り組み

ピア・サポートとは、もともとは同じ立場にあるもの同士で助け合う仕組みのことを言います。教育現場では、学生の相談に対し学生が助言を行う、学生同士の助け合い制度として紹介されています。大学においては、授業内容の質問に対する回答・助言や学習方法のアドバイスといった学習支援、あるいは、科目選択や履修登録方法の助言、指導といった履修支援が挙げられます。

鹿児島大学は、平成 22 年度以降の第 2 期中期計画において、「平成郷中サポーター（仮称）」というピア・サポート制度の導入を謳っています。水産学部においても、全学 FD 委員会からの依頼を受け、ピア・サポートの制度作りに着手することとなりました。本年度は、分野・サブ分野分属や研究室配属の際の参考にしていただくとともに、水産学部の教育・研究に対する関心を高めてもらうことを目的として、研究紹介を試行することとしました。鹿児島大学農学部連合大学院（博士課程）、水産学研究科（修士課程）の学生の皆さんを中心にピア・サポート検討チームを立ち上げ、具体的な実施方法を議論しました。有志を募って各自の研究内容を紹介するポスターの作成を依頼し、講義棟に掲示するとともに、11 月 21 日～11 月 25 日にポスターセッション形式の発表会を行いました。

検討チームの皆さんには積極的に取り組んでいただきましたが、残念ながら学生の関心を引きつけるには至りませんでした。検討チームのレビュー内容を表 7.1 に示します。今後、学生のニーズを十分に把握した上で、ピア・サポートの方向性を明確にする必要があると思います。また、「学生同士の助け合い」ではありますが、教員の理解と協力体制の構築が極めて重要であると思われる。

8. 終わりに

水産学部 FD 委員会では、教育システム運用マニュアルに規定された教職員の力量の維持、向上を実現するために、授業公開・授業参観を企画し、FD 講習会、FD ワークショップを開催しています。また、学生満足度の調査を目的として授業アンケートを行い、その結果を教職員にフィードバックすることにより、授業改善に役立てていただいています。しかしながら、近年、FD の意義や重要性

表 7.1 平成 23 年度に試行した水産学部ピア・サポート制度「研究紹介」のレビュー結果

教員の積極的な関与の必要性

- ・ ピア・サポート活動に対する教員の認識不足
- ・ サポートメンバーに対する目的、方向性の明確化
- ・ ピア・サポート活動のサポート：
告知への協力、授業との連携、教務日程・各種ガイダンスとの連携
- ・ サポートメンバーと教員の役割分担の明確化

学生のニーズの把握

- ・ 学生の関心・興味からの乖離：
研究紹介よりは授業・単位に関心あり



図 7.1 水産学部 4 号館（講義棟）に張り出した研究紹介のポスター

が十分に認識され、教員が自ら授業改善、教育改善を進めているなかで、FD 委員会の提供する FD 活動が形骸化しつつある印象も否めません。本年度は、その解消を目指し、授業アンケートの改訂やピア・サポート制度の試行に取り組みました。今後の課題として、これらの成果を検証するのに加え、授業改善、カリキュラム改善に資するような授業公開・授業参観のあり方の検討、水産学研究所（修士課程）の FD の構築、ピア・サポート制度の検討と実施が挙げられると思います。その実現のために、他の教育関連の委員会との連携も図りながら、教員が積極的に関与し議論できるような仕組み作りをめざしたいと考えています。

水産学部 授業アンケート

このアンケートは受講生の皆様とともに授業改善に取り組むための基礎資料として活用します。回答内容が成績に影響することはありません。あなたの考えを率直に記入してください。

選択肢欄は、該当する枠内にチェックマーク（レ）を記入してください。

受講科目名： _____ 学籍番号： _____ 氏名： _____

	水産生物 海洋学	養殖学	食品資源 利用学	漁業工学	水産経済学	教員養成 課程	未決定	その他
所属分野：	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

Q1. この科目を履修した動機を選んでください。（複数選択可）

- | | | |
|--|--|--|
| <input type="checkbox"/> この授業に興味を持ったので | <input type="checkbox"/> この授業に学習意欲がかき立てられたから | <input type="checkbox"/> 履修しやすい曜日や時間帯だったから |
| <input type="checkbox"/> 必須科目だから | <input type="checkbox"/> 単位修得のため | |

Q2. この授業の内容は全体的に満足できるものでしたか。 はい いいえ

Q2で「はい」と答えた方に尋ねます。

Q3. 満足した点を以下から選んでください。（複数選択可）

- この授業は興味や関心を抱かせる内容だった
- この授業によって学習意欲がかき立てられた
- 授業の内容が理解できた
- 教員の説明が分かりやすかった
- 学習について教員からのアドバイスやサポートがあった
- その他

Q2で「いいえ」と答えた方に尋ねます。

Q4-1. この科目の学習に積極的に取り組みましたか。

- 強くそう思う そう思う あまりそう
思わない そう思わない

Q4-2. 満足できなかった点を以下から選んでください。（複数選択可）

- 授業の内容がよく理解できなかった
- 授業の内容に興味や関心がわかかなかった
- 教員の説明が分かりにくかった
- 学習について教員からのアドバイスやサポートがなかった
- その他

Q5. 授業の満足度についての意見を具体的に記述してください。

- | | |
|--|--|
| Q6. (担当教員設定項目1) <input type="checkbox"/> 1 <input type="checkbox"/> 2 <input type="checkbox"/> 3 <input type="checkbox"/> 4 | Q7. (担当教員設定項目2) <input type="checkbox"/> 1 <input type="checkbox"/> 2 <input type="checkbox"/> 3 <input type="checkbox"/> 4 |
| Q8. (担当教員設定項目3) <input type="checkbox"/> 1 <input type="checkbox"/> 2 <input type="checkbox"/> 3 <input type="checkbox"/> 4 | Q9. (担当教員設定項目4) <input type="checkbox"/> 1 <input type="checkbox"/> 2 <input type="checkbox"/> 3 <input type="checkbox"/> 4 |
| Q10. (担当教員設定項目5) <input type="checkbox"/> 1 <input type="checkbox"/> 2 <input type="checkbox"/> 3 <input type="checkbox"/> 4 | Q11. (担当教員設定項目6) <input type="checkbox"/> 1 <input type="checkbox"/> 2 <input type="checkbox"/> 3 <input type="checkbox"/> 4 |

Q12. この授業についての意見、要望などを記述してください。

図 6.1. 水産学部授業アンケートの新書式

9. 資料編

表2.1 後期開講科目の3年間にわたるシラバスに対応した授業と学生満足度の比較(アンケート回答数別)

平成22年度後期(講義・演習)										
平均評価点	シラバス					満足度				
	20名以下	21～50名	51～100名	101名以上	計	20名以下	21～50名	51～100名	101名以上	計
1～2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2～3	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0
3～4	18	25	10	6	59	18	25	11	6	60
平成21年度後期(講義・演習)										
平均評価点	シラバス					満足度				
	20名以下	21～50名	51～100名	101名以上	計	20名以下	21～50名	51～100名	101名以上	計
1～2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2～3	1	0	0	1	2	0	3	0	1	4
3～4	19	24	12	4	59	20	21	12	4	57
平成18年度後期(講義・演習)										
平均評価点	シラバス					満足度				
	20名以下	21～50名	51～100名	101名以上	計	20名以下	21～50名	51～100名	101名以上	計
1～2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2～3	2	0	1	0	3	0	1	1	0	2
3～4	19	22	9	6	56	21	21	9	6	57

平成22年度後期(実験・実習)			平成21年度後期(実験・実習)			平成18年度後期(実験・実習)		
平均評価点	シラバス	満足度	平均評価点	シラバス	満足度	平均評価点	シラバス	満足度
1～2	0	0	1～2	0	0	1～2	0	0
2～3	0	0	2～3	1	0	2～3	0	0
3～4	6	6	3～4	7	8	3～4	19	19

平成22年度後期(乗船実習)			平成21年度後期(乗船実習)			平成18年度後期(乗船実習)		
平均評価点	シラバス	満足度	平均評価点	シラバス	満足度	平均評価点	シラバス	満足度
1～2	0	0	1～2	0	0	1～2	0	0
2～3	0	0	2～3	1	0	2～3	0	0
3～4	3	3	3～4	5	6	3～4	12	12

表2.2 後期授業アンケート・授業改善報告書の提出状況

	授業アンケート			授業改善報告書	
	授業科目数	提出科目数	提出率(%)	提出科目数	提出率(%)
平成22年度後期	81 (73)	69	94.5	47	58.0 (74.6)
平成21年度後期	79	70	88.6	46	65.7 (79.3)
平成18年度後期	—	85	—	39	45.9

授業科目数のカッコ内は、履修申請者10名以下の科目を除いた科目数。

授業改善報告書提出率のカッコ内は、平成22年度末退職者、外部講師担当科目を除いた場合の数値。

表4.1 前期開講科目の3年間にわたるシラバスに対応した授業と学生満足度の比較(アンケート回答数別)

平成23年度前期(講義・演習)										
平均評価点	シラバス					満足度				
	20名以下	21～50名	51～100名	101名以上	計	20名以下	21～50名	51～100名	101名以上	計
1～2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2～3	1	0	0	0	1	1	1	0	0	2
3～4	11	15	11	4	41	11	14	11	4	40
平成22年度前期(講義・演習)										
平均評価点	シラバス					満足度				
	20名以下	21～50名	51～100名	101名以上	計	20名以下	21～50名	51～100名	101名以上	計
1～2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2～3	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
3～4	8	14	10	4	36	8	13	10	4	35
平成19年度前期(講義・演習)										
平均評価点	シラバス					満足度				
	20名以下	21～50名	51～100名	101名以上	計	20名以下	21～50名	51～100名	101名以上	計
1～2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2～3	1	0	0	1	2	0	2	2	0	4
3～4	13	19	15	6	53	14	17	13	7	51

平成23年度前期(実験・実習)			平成22年度前期(実験・実習)			平成19年度前期(実験・実習)		
平均評価点	シラバス	満足度	平均評価点	シラバス	満足度	平均評価点	シラバス	満足度
1～2	0	0	1～2	0	0	1～2	0	0
2～3	0	0	2～3	0	1	2～3	1	2
3～4	16	16	3～4	16	15	3～4	19	18

平成23年度前期(乗船実習)			平成22年度前期(乗船実習)			平成19年度前期(乗船実習)		
平均評価点	シラバス	満足度	平均評価点	シラバス	満足度	平均評価点	シラバス	満足度
1～2	0	0	1～2	0	0	1～2	0	0
2～3	1	0	2～3	0	0	2～3	0	0
3～4	8	9	3～4	9	9	3～4	7	7

表4.2 前期授業アンケート・授業改善報告書の提出状況

	授業アンケート			授業改善報告書	
	授業科目数	提出科目数	提出率(%)	提出科目数	提出率(%)
平成23年度前期	77 (71)	66	85.7	32	48.5 (57.1)
平成22年度前期	81 (73)	69	94.5	47	58.0 (74.6)
平成19年度前期	79	70	88.6	46	65.7 (79.3)

授業科目数のカッコ内は、履修申請者10名以下の科目を除いた科目数。

授業改善報告書提出率のカッコ内は、平成22年度末退職者、外部講師担当科目を除いた場合の数値。

表 平成22年度後期授業アンケートにおける各質問項目の平均値と質問項目間の相関係数

講義・演習科目	質問項目																	
	A-1	A-2	B-1	B-2	B-3	B-4	B-5	C-1	C-2	C-3	C-4	C-5	D-1	D-2	D-3	D-4	D-5	D-6
平均値	3.66	3.61	3.44	3.49	3.31	3.33	3.54	3.61	3.55	3.44	3.43	3.47	3.35	3.12	2.93	3.31	2.98	3.50
B-5との相関係数	0.23	0.41	0.63	0.58	0.63	0.27	1.00	0.58	0.77	0.80	0.72	0.75	0.04	0.31	0.46	0.82	0.20	0.35
D-3との相関係数	0.10	0.05	0.17	0.28	0.79	-0.02	0.46	0.18	0.46	0.60	0.51	0.29	0.18	0.10	1.00	0.63	0.14	0.31
D-4との相関係数	0.14	0.32	0.63	0.64	0.65	0.36	0.82	0.51	0.74	0.79	0.75	0.78	0.19	0.53	0.63	1.00	0.39	0.40
D-5との相関係数	0.10	0.00	0.19	0.25	-0.03	0.79	0.20	0.02	0.07	0.00	0.01	0.37	0.21	0.31	0.14	0.39	1.00	0.06
D-6との相関係数	0.39	0.26	0.16	0.15	0.39	0.02	0.35	0.24	0.42	0.40	0.32	0.42	0.15	0.02	0.31	0.40	0.06	1.00
実験・実習科目	質問項目																	
	A-1	A-2	B-1	B-2	B-3	B-4	B-5	C-1	C-2	C-3	C-4	C-5	D-1	D-2	D-3	D-4	D-5	D-6
平均値	3.73	3.41	3.49	3.55	3.43	3.27	3.67	3.35	3.46	3.46	3.53	3.6	3.65	3.37	3.1	3.44	3.33	3.68
B-5との相関係数	0.89	0.51	0.8	0.25	0.76	-0.8	1	0.53	0.64	0.35	-0.1	0.92	0.73	-0.3	0.42	0.79	-0.5	0.92
D-3との相関係数	0.51	-0.1	0.33	0.57	0.68	0.14	0.42	0.02	0.21	0.67	0.29	0.49	0.39	0.02	1	0.65	0.5	0.05
D-4との相関係数	0.88	0.33	0.89	0.7	0.89	-0.3	0.79	0.22	0.65	0.41	0.26	0.79	0.86	-0.1	0.65	1	0.07	0.54
D-5との相関係数	-0.3	-0.5	-0.2	0.58	0.08	0.86	-0.5	-0.4	-0.3	0.33	0.49	-0.4	-0.2	0.5	0.5	0.07	1	-0.8
D-6との相関係数	0.76	0.6	0.7	-0	0.51	-0.9	0.92	0.57	0.61	0.1	-0.3	0.82	0.62	-0.4	0.05	0.54	-0.8	1
乗船実習科目	質問項目																	
	A-1	A-2	B-1	B-2	B-3	B-4	C-1	C-2	C-3	C-4	C-5	C-6	D-1	D-2	D-3	D-4	D-5	D-6
平均値	3.73	3.17	3.24	3.61	3.54	3.75	0.00	3.70	3.75	3.68	3.35	3.73	2.24	2.02	3.60	3.25	3.05	3.58
B-4との相関係数	-0.54	-0.83	-1.00	-0.65	-0.99	1.00	—	-0.93	-0.70	0.55	-0.87	0.12	-0.83	-0.71	1.00	-0.75	0.83	1.00
D-3との相関係数	-0.56	-0.82	-1.00	-0.64	-0.99	1.00	—	-0.94	-0.71	0.54	-0.86	0.13	-0.82	-0.72	1.00	-0.74	0.84	1.00
D-5との相関係数	-0.92	-0.38	-0.79	-0.11	-0.76	0.83	—	-0.98	-0.98	0.00	-0.45	0.65	-0.38	-0.98	0.84	-0.26	1.00	0.79
D-6との相関係数	-0.48	-0.87	-1.00	-0.70	-1.00	1.00	—	-0.90	-0.64	0.61	-0.90	0.04	-0.87	-0.66	1.00	-0.80	0.79	1.00

表** 平成23年度前期授業アンケートにおける各質問項目の平均値と質問項目間の相関係数

講義・演習科目	質問項目																	
	A-1	A-2	B-1	B-2	B-3	B-4	B-5	C-1	C-2	C-3	C-4	C-5	D-1	D-2	D-3	D-4	D-5	D-6
平均値	3.62	3.55	3.46	3.49	3.38	3.38	3.54	3.61	3.62	3.44	3.50	3.49	3.41	3.14	3.03	3.40	3.08	3.47
B-5との相関係数	0.25	0.29	0.49	0.40	0.89	0.03	1.00	0.43	0.81	0.87	0.81	0.71	0.03	0.26	0.69	0.53	0.02	0.40
D-3との相関係数	0.28	0.37	0.51	0.35	0.73	0.16	0.69	0.19	0.62	0.69	0.71	0.76	-0.08	0.45	1.00	0.58	0.31	0.24
D-4との相関係数	0.21	0.51	0.13	0.08	0.41	0.26	0.53	0.17	0.30	0.32	0.39	0.59	0.10	0.31	0.58	1.00	0.32	0.34
D-5との相関係数	0.24	0.25	0.22	0.14	-0.05	0.79	0.02	0.05	-0.10	-0.10	0.00	0.32	-0.03	0.19	0.31	0.32	1.00	0.30
D-6との相関係数	0.29	0.10	0.50	0.48	0.23	0.24	0.40	0.23	0.06	0.16	0.22	0.28	0.35	0.24	0.24	0.34	0.30	1.00
実験・実習科目	質問項目																	
	A-1	A-2	B-1	B-2	B-3	B-4	B-5	C-1	C-2	C-3	C-4	C-5	D-1	D-2	D-3	D-4	D-5	D-6
平均値	3.65	3.52	3.54	3.62	3.54	3.45	3.67	3.52	3.60	3.58	3.61	3.66	3.71	3.16	3.13	3.56	3.44	3.58
B-5との相関係数	0.09	0.50	0.71	0.72	0.50	0.39	1.00	-0.08	0.14	0.34	0.43	0.87	0.62	0.65	0.67	0.81	0.39	0.16
D-3との相関係数	-0.24	0.31	0.39	0.45	0.24	0.25	0.67	-0.47	-0.31	-0.07	-0.02	0.56	0.51	0.73	1.00	0.64	0.40	0.41
D-4との相関係数	-0.06	0.60	0.59	0.75	0.63	0.43	0.81	-0.24	0.04	0.29	0.16	0.59	0.61	0.52	0.64	1.00	0.20	-0.10
D-5との相関係数	0.07	0.47	0.28	0.35	-0.26	0.61	0.39	-0.32	-0.26	-0.38	0.11	0.35	0.27	0.37	0.40	0.20	1.00	0.66
D-6との相関係数	0.05	0.03	0.02	-0.04	-0.45	0.02	0.16	-0.15	-0.39	-0.46	0.07	0.15	0.29	0.13	0.41	-0.10	0.66	1.00
乗船実習科目	質問項目																	
	A-1	B-1	B-2	B-3	B-4	B-5	C-1	C-2	C-3	C-4	C-5	C-6	D-1	D-2	D-3	D-4	D-5	D-6
平均値	3.72	3.47	3.50	3.64	3.57	3.67	3.60	3.55	3.52	3.63	3.50	3.71	3.03	3.52	3.51	3.36	2.93	3.33
B-4との相関係数	0.62	0.76	0.82	0.76	0.86	1.00	0.62	0.52	0.62	0.94	0.87	0.83	-0.10	0.62	0.45	0.73	0.25	0.77
D-3との相関係数	0.12	0.18	0.56	0.44	0.29	0.45	0.62	0.18	0.59	0.52	0.60	0.20	-0.07	0.59	1.00	0.67	0.63	0.22
D-5との相関係数	-0.32	-0.04	0.42	0.04	-0.11	0.25	0.31	-0.40	0.05	0.30	0.61	0.06	-0.50	0.05	0.63	0.41	1.00	0.09
D-6との相関係数	0.72	0.68	0.70	0.85	0.74	0.77	0.35	0.77	0.64	0.86	0.73	0.77	-0.52	0.64	0.22	0.73	0.09	1.00

編集：鹿児島大学水産学部 FD 委員会

委員長：重廣律男

副委員長：吉川 毅

委員：安樂和彦、小谷知也、寺田竜太、山本美穂

鹿児島県鹿児島市下荒田 4-50-20

099-286-4111（代表）

理工学研究科

はじめに

理工学研究科のFD委員会は、大学院設置基準の第14条の3（教育内容等の改善のための組織的な研修等）で「大学院は、当該大学院の授業及び研究指導の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究を実施するものとする。」とされていることに基づき、昨年度に引き続いて以下のような活動を行った。理工学研究科の教員は研究科と合わせて理学部と工学部を兼担して教育・研究に当たっているが、学部とは異なり、研究科におけるFD活動では、

- (1) どのような学位を出すのか
- (2) どのような教育プログラム（カリキュラム）を組むのか
- (3) どのような人材を入学させるのか

を明確にすると共に点検を継続して実施することが重要になる。これは修了生の質の保証と学位水準について研究科として取り組む問題である。

また、中央教育審議会の答申「グローバル化社会の大学院教育～世界の多様な分野で大学院修了者が活躍するために～」(2011)では、明確な学位プログラムとしての大学院教育を確立し、学生の質を保証する体系の整備が重要なものとして指摘されている。学生の質を保証する組織的な教育・研究指導体制の確立としては、FD活動に関連する項目として次の項目がある。

FDの充実、ピアレビューの実施による教員の教育・研究指導能力の向上

教員の教育業績や能力の評価の充実、人事や処遇への反映などの推進、教員の教育研究活動の評価に関する指標の開発推進

また、「教員の教育・研究指導能力の向上」に関して、答申の中では、「体系的な大学院教育を充実させるためには、大学院教育に携わる教員の教育・研究指導能力の向上が不可欠である。FDや教育指導評価に関する取り組みは、学士課程段階が中心であるため、研究科や専攻の教員がお互いに教育について活発に議論するとともに、諸外国の大学院の教育・研究指導の経験を活用するなど大学院教育に関する組織的な研修体制を充実させる必要がある。」としている。これまで大学院でのFD活動は、重要な項目として見なされてきたとは言えない。しかし、FD活動が学生の質を保証する組織的な教育・研究指導体制の一環であるとする、現在理工学研究科で行っているFD活動を改めて考えてみる必要がある。

理工学研究科では、アドミッションポリシーの中で求める学生像を示しており、入学後は学生の能力の向上を図ると共に各専攻の掲げる目標達成を目指した教育・研究指導に取り組んでいる。理工学研究科のFD委員会では、平成23年度の活動計画として、昨年度に続いて(1)学生による授業評価とそれに基づいた授業改善、(2)FD講演会の実施(3)学生の研究活動と教育成果の点検を目標にした。最後にFD報告書の作成によるPDCAの現状分析と総括を主たる活動項目とした。

なお、本報告書は、学部委員を兼務している委員各位の協力により作成することが出来ました。また、事務支援室の皆様のアンケート調査や整理に関するご協力に感謝します。

平成23年度鹿児島大学理工学研究科ファカルティ・ディベロップメント委員会
委員長 仲谷英夫(全学FD委員会委員)

理工学研究科 FD 講演会と FD 活動

理工学研究科 FD 講演会（内山博之，二宮公紀）

平成 23 年度の理工学研究科 FD 講演会は，工学部および理学部の FD 委員会と理工学研究科 FD 委員会との共同主催として企画され，平成 23 年 10 月 21 日（金）16 時 00 分から 17 時 30 分まで，稲盛会館で開催された。金沢工業大学人間情報システム研究所・長尾隆司教授に講師を依頼し，「高等教育機関の自立を目指して」という演題で講演が行われた。講演会への参加者は 46 名であった。

海外実習報告（半田利弘，筒井俊雄）

鹿児島大学理工学研究科（工学系）では，学生の海外研修を支援するために，「岩崎国際学術交流基金」が設けられている。また，理工学研究科（理学系）を主たる実施母体として実施されている，独立行政法人日本学術振興会（JSPS）によるインター・ナショナル・トレーニングプログラム（ITP）大学院生の海外研修も継続して実施されている。これらの基金等の助成によって実施された。

①「インド・カルナタカ国立工科大学での研修」

海洋土木工学専攻 北村 良介 教授

②日台 3 大学合同セミナー「Japan Taiwan Bilateral Symposium on Nano-Technology」（国立成功大学，台南市）

化学生命・化学工学専攻 隅田泰生 教授 等

③「インターナショナル・トレーニング・プログラム」

地球環境科学専攻 鈴木 英治 教授等

④科学研究費および環境省地球環境研究総合推進費による現地調査

地球環境科学専攻 鈴木 英治 教授

学生による授業評価

博士前期課程の授業評価アンケートの分析結果

博士前期課程の授業評価アンケートの分析結果

理工学研究科では，平成 23 年度も前年度と同様に授業評価アンケートを実施した。大学院の授業に対する学生の意見を適切に抽出するために授業アンケートの設問項目と内容は前年度と同じとした。

工学系専攻の授業評価アンケートの結果報告（大畠賢一）

理工学研究科で実施されたアンケートの結果を表 1 に示す。この結果を見ると，ほぼ全ての項目において，4 程度ないしはそれ以上の評価が得られており，大学院講義に対して学生は所定の満足を得ているものと判断できる。ただし，アンケート項目「②予習と復習は毎週どれくらいしましたか。（レポート作成時間も含まれます）」の評価のみが 3.00 以下となっており，他の設問の評価に比べて低い結果が得られている。なお，アンケート項目「②予習と復習」の評価のみが低くなる傾向は，昨年度も同様に確認されている（参考のために，同一の設問と見なせる項目に対して，平成 21 から 23 年度のアンケート結果を比較した結果を図 1 に示す）。

理工学研究科の授業評価アンケートの設問は，大きく (A) 授業態度，(B) 授業内容，(C) 授業法方に分類されるが，(A) に分類されるアンケート項目は，その他の項目と違い，定量的な数値を示して回答させるものになっている。アンケート項目「②予習と復習」において，特に低い評価が得られるということは，目標とすべき数値が，学生に十分理解されていない可能性がある。評価を向上させるためには，学生の努力が不足している実態を学生自身に理解させて，学習時間を確保するように指導していくことが必要であると考えられる。

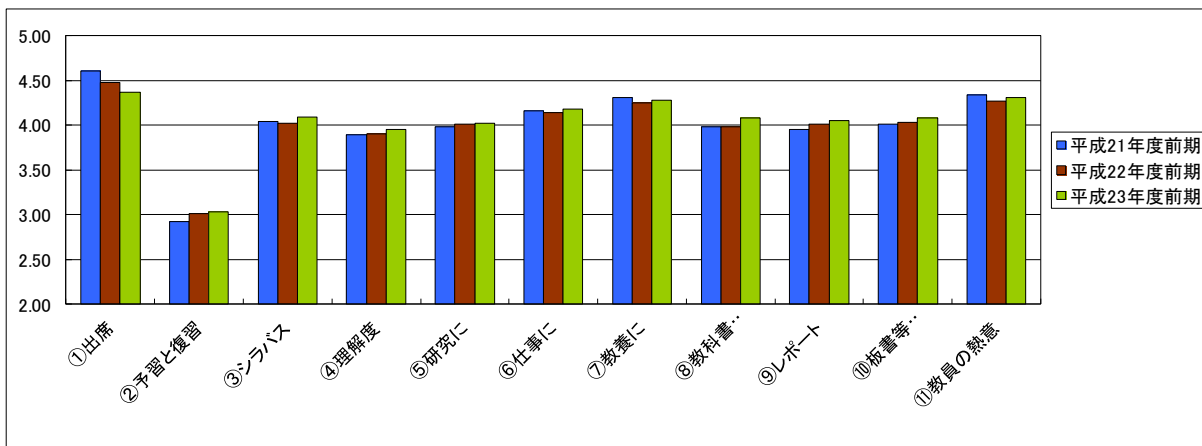


図1(1) アンケート結果の昨年度との比較(工学系)

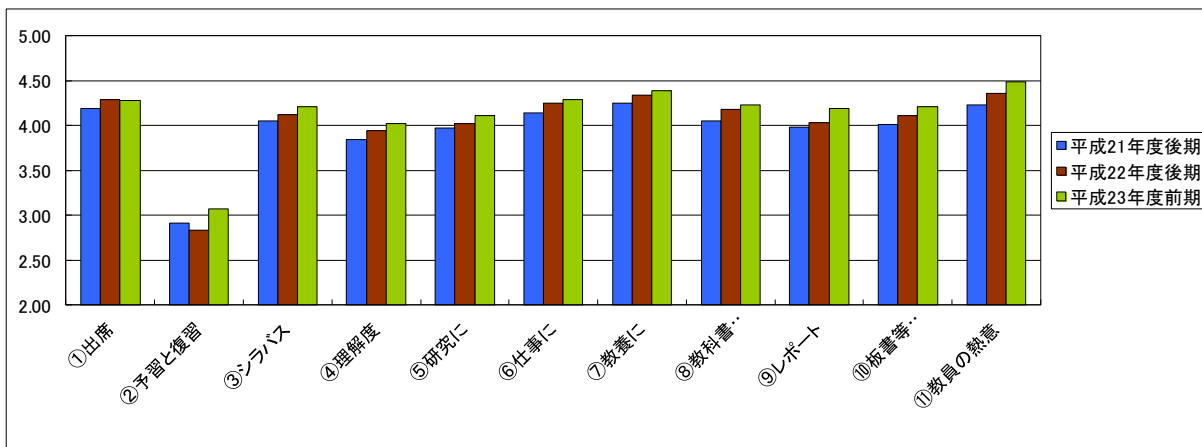


図1(2) アンケート結果の昨年度との比較(工学系)

表1 理工学研究科授業評価アンケートの結果(平成23年度)

平成23年度前期											
項目	①出席	②予習と復習	③シラバス	④理解度	⑤研究に	⑥仕事に	⑦教養に	⑧教科書・教材	⑨レポート	⑩板書等の明瞭さ	⑪教員の熱意
機械工学専攻	4.61	3.41	4.27	4.22	4.22	4.44	4.54	4.24	4.20	4.19	4.46
電気電子工学専攻	4.51	3.13	3.89	3.64	3.72	3.98	4.02	3.95	3.94	3.88	4.08
建築学専攻	4.31	4.00	3.92	3.84	3.84	4.04	4.24	4.01	4.08	3.84	4.14
化学生命化学工学専攻	4.50	2.42	4.10	4.06	4.24	4.18	4.34	4.12	4.09	4.25	4.40
海洋土木工学専攻	3.87	2.69	4.40	4.31	4.38	4.44	4.44	4.31	4.09	4.33	4.60
情報生体システム工学専攻	4.38	2.53	3.95	3.66	3.70	3.97	4.07	3.86	3.92	3.98	4.18
数理情報科学専攻	3.85	3.21	4.28	4.23	4.26	4.41	4.62	4.44	4.44	4.64	4.59
物理・宇宙専攻	4.33	2.69	3.83	3.56	3.81	3.72	4.00	4.11	3.97	3.72	3.97
生命化学専攻	4.15	2.59	4.10	3.92	4.11	4.08	4.34	4.25	4.33	4.02	4.25
地球環境科学専攻	3.64	2.56	3.64	3.88	3.84	3.84	4.44	3.84	3.88	4.08	4.00
理工学研究科(工学系)平均値	4.36	3.03	4.09	3.96	4.02	4.18	4.28	4.08	4.05	4.08	4.31
理工学研究科(理学系)平均値	3.99	2.76	3.96	3.90	4.01	4.01	4.35	4.16	4.16	4.12	4.20
理工学研究科平均値	4.22	2.92	4.04	3.93	4.01	4.11	4.31	4.11	4.09	4.09	4.27

平成23年度後期											
項目	①出席	②予習と復習	③シラバス	④理解度	⑤研究に	⑥仕事に	⑦教養に	⑧教科書・教材	⑨レポート	⑩板書等の明瞭さ	⑪教員の熱意
機械工学専攻	4.52	3.68	4.38	4.26	4.43	4.58	4.61	4.38	4.38	4.50	4.58
電気電子工学専攻	4.52	3.19	4.18	3.86	4.12	4.29	4.35	3.94	4.08	4.19	4.44
建築学専攻	4.26	3.40	3.99	3.89	4.01	4.44	4.40	4.31	4.15	3.86	4.42
化学生命化学工学専攻	4.35	2.81	4.42	4.16	4.19	4.38	4.50	4.40	4.33	4.41	4.61
海洋土木工学専攻	3.89	2.62	4.30	4.14	4.14	4.19	4.35	4.32	4.30	4.32	4.68
情報生体システム工学専攻	4.17	2.74	4.00	3.81	3.79	3.88	4.12	4.06	3.89	3.97	4.17
数理情報科学専攻	2.82	2.73	4.00	4.00	4.18	4.18	4.18	4.14	4.09	4.32	4.18
物理・宇宙専攻	3.68	2.26	4.11	3.68	4.11	4.05	4.58	4.26	3.95	4.26	4.74
生命化学専攻	3.27	2.34	4.05	4.00	4.23	4.21	4.43	3.88	4.02	4.07	4.32
地球環境科学専攻	4.29	2.86	4.43	4.57	4.57	4.43	4.57	4.71	4.71	4.71	4.71
理工学研究科(工学系)平均値	4.29	3.07	4.21	4.02	4.11	4.29	4.39	4.24	4.19	4.21	4.48
理工学研究科(理学系)平均値	3.52	2.55	4.15	4.06	4.27	4.22	4.44	4.25	4.19	4.34	4.49
理工学研究科平均値	3.98	2.86	4.19	4.04	4.18	4.26	4.41	4.24	4.19	4.26	4.49

機械工学専攻（井手英夫）

機械工学専攻の講義科目に対して実施された授業評価アンケートの結果を図2に示す。この結果は、主なアンケート項目の評価点について1年間に開講された科目で平均した点の過去8年間における推移を示している。

平成19年度後期から理工学研究科FD委員会として新規にアンケートの実施を始めたことによるアンケート項目の変更があった。また、平成21年度にはアンケート項目の簡素化と精査が行われた。よって、過去のアンケート項目のうち変更のあった項目については、内容が同じと見なせる最新の項目に対応させて図に載せている。平成21年度から平成23年度にかけては、アンケート項目の変更は無かった。授業改善への取り組みの効果を過去の評点の推移から検討するためにはアンケート項目は変更されていないことが望ましい。以下では、アンケート項目の変更による影響はないものとして考察する。

図より、全体的に評点は右方上がりの傾向にある。教員による継続的な授業改善の効果が表れているようである。また、学部で行っている授業評価アンケートの評点と比べて全体的に高得点である。これは、学部で開講されている授業と比べて、専攻で開講されている授業は専門性が高く、学生が興味をもって授業を受けていることが影響しているものと考えられる。

項目「②予習と復習」について見ると、年々増加していることが分かる。教員がレポートを積極的に課すことで、学生に授業に関する勉強時間を確保するようになった結果であろう。しかし、授業のレポートに多くの時間がとられて研究に割く時間が削られないように配慮する必要がある。今後は、研究に関する時間との関係について検討していきたい。

項目「③シラバス」についても見ると、平成20年度及び平成21年度は低くなっているが、平成22年度から増加している。全般に、評価点が4.0以上であり、別のアンケート項目にある「受講申請に役立ちましたか」に対する回答が、4.0＝「そう思う」であるので妥当な評価であると考えられる。今後とも評点が下がらないようにシラバスの周知を徹底する必要がある。

項目「④理解度」について、平成19年度～平成20年度でやや下降しているが、平成21年度、平成22年度、平成23年度では順調に上昇している。授業評価アンケートの結果がフィードバックされて、教員による授業改善が行われた結果であると考えられる。年々、学生の学力が下がってきていることから今後は頭打ちの傾向が見られると予想されるので、継続的な授業評価アンケートの実施と分析が必要である。

項目「⑤研究に（役立つ）」については、平成19年度～平成20年度でやや下降しているが、平成21年度と平成22年度で回復し、平成23年度は更に高くなっている。専攻の授業は専門性が高い分だけ少しでも分野が異なれば個々の学生の研究とは直接結びつかないことがあるが、全体的に高い評価が維持されている。

項目「⑥仕事に（役立つ）」と項目「⑦教養に（役立つ）」については、役立つと考えている学生が多く、今後ともこの評価が高い傾向を維持していきたい。項目「⑩教員の熱意」についても高い点を維持していることが分かる。今後とも、教員だけでなく学生自身も熱意をもって授業を受けることができるように授業評価アンケートを役立てていくことが重要である。

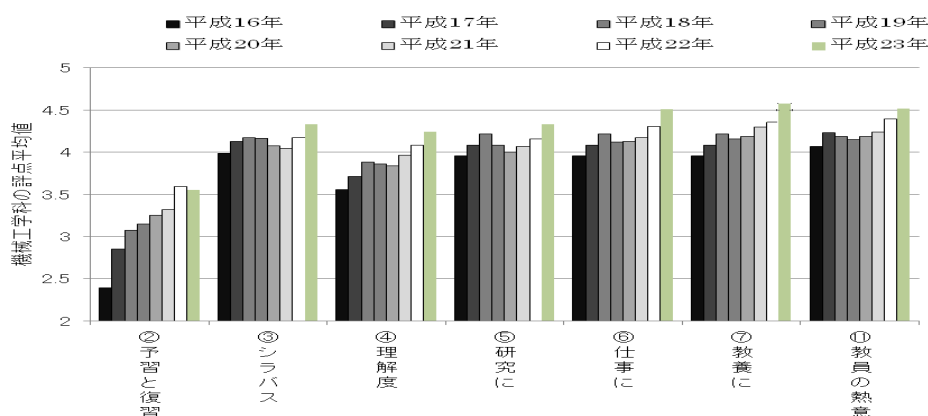


図2 機械工学専攻の授業評価アンケート結果の推移

電気電子工学専攻 (大畠賢一)

図3に、電気電子工学専攻の過去5年分(平成18年度から23年度)の授業評価アンケート結果の推移を示す。ほぼ同じ講義科目で比較できるように、項目毎専攻平均点の推移を前期については図3(1)に、後期については図3(2)に示している。なお、両図において、平成19年度前期以前の旧授業評価アンケートについては、現行の授業評価アンケート項目に該当するもののみ記載している。平成22年度に一時的に低下していた予習、復習時間が今年は回復傾向を示している。これらの結果は、前後期ともに担当教員の演習問題やレポート、発表方法等の改善に向けた継続的な熱意と努力によると考えられる。その他の項目は例年通り高い水準を維持しており、本年度の授業評価アンケート結果を総体的に見る限り、授業改善は順調に進んでいると考えられるが、さらに講義形式の工夫、演習課題・レポートの質と量の改善などを継続していく必要がある。

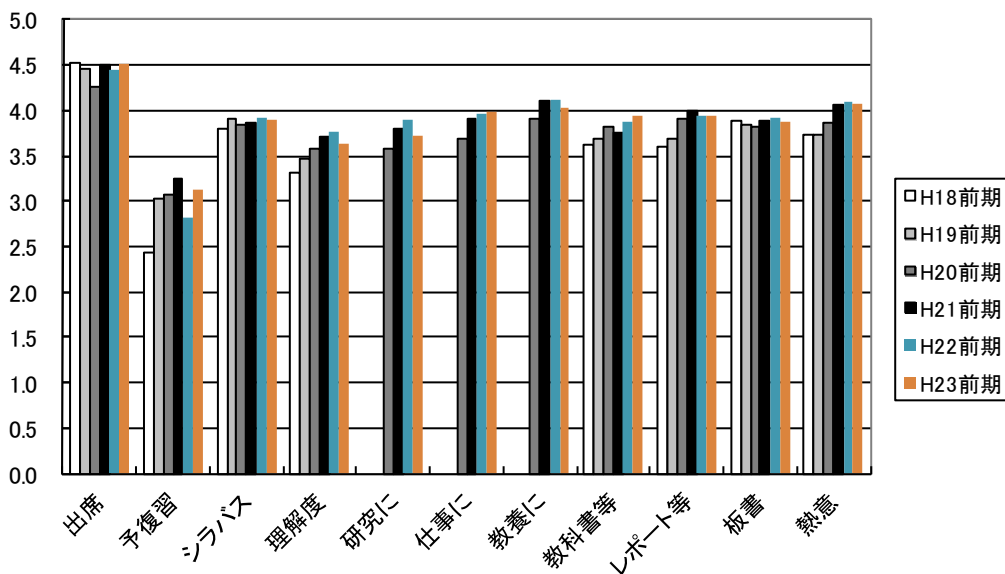


図3(1) 電気電子工学専攻の授業評価アンケート結果の推移(平成18年度~23年度(前期))

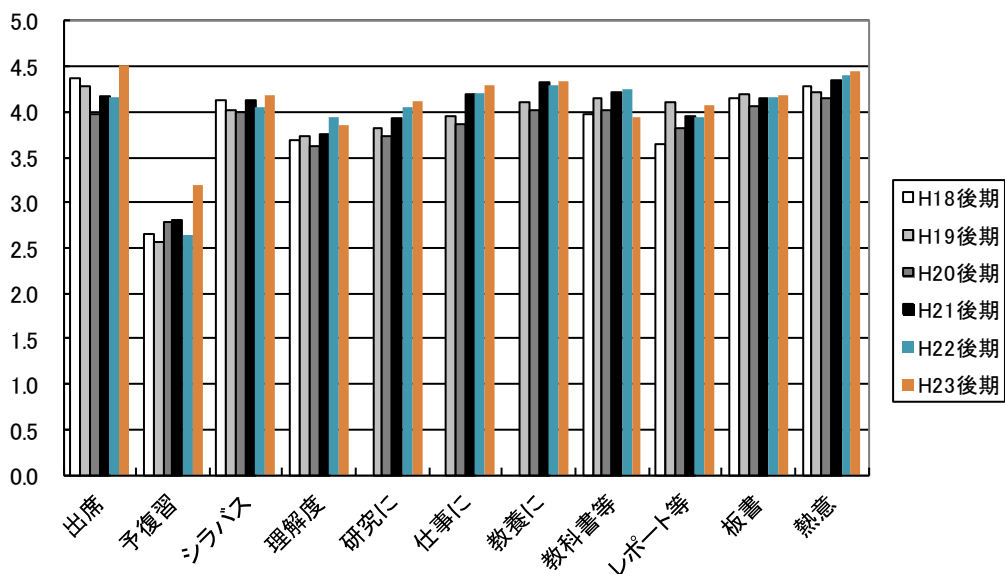


図3(2) 電気電子工学専攻の授業評価アンケート結果の推移(平成18年度~23年度(後期))

建築学専攻（曾我和弘）

建築学専攻の平成 23 年度の授業アンケートについて、設問項目の平均を図 4 に示す。評点が高いのは、項目 6 の「仕事に」と項目 7 の「教養に」である。これは、コースワーク制度の充実による効果と考えられる。これらに比べると項目 5 の「研究に」は低くなっているが、大学院では授業内容も学生の研究テーマも細分化されているのが普通であり、授業内容が研究と直接結びつかないケースが増えるのも当然である。したがってこの項目は、授業の評価というよりむしろ受講者の属性を示すものである。奇しくも項目 4 「理解度」が項目 5 と同程度であることが、その傍証である。項目 2 の「予習と復習」は、前年に比べて改善されており、次年度以降も改善を継続することが望まれる。

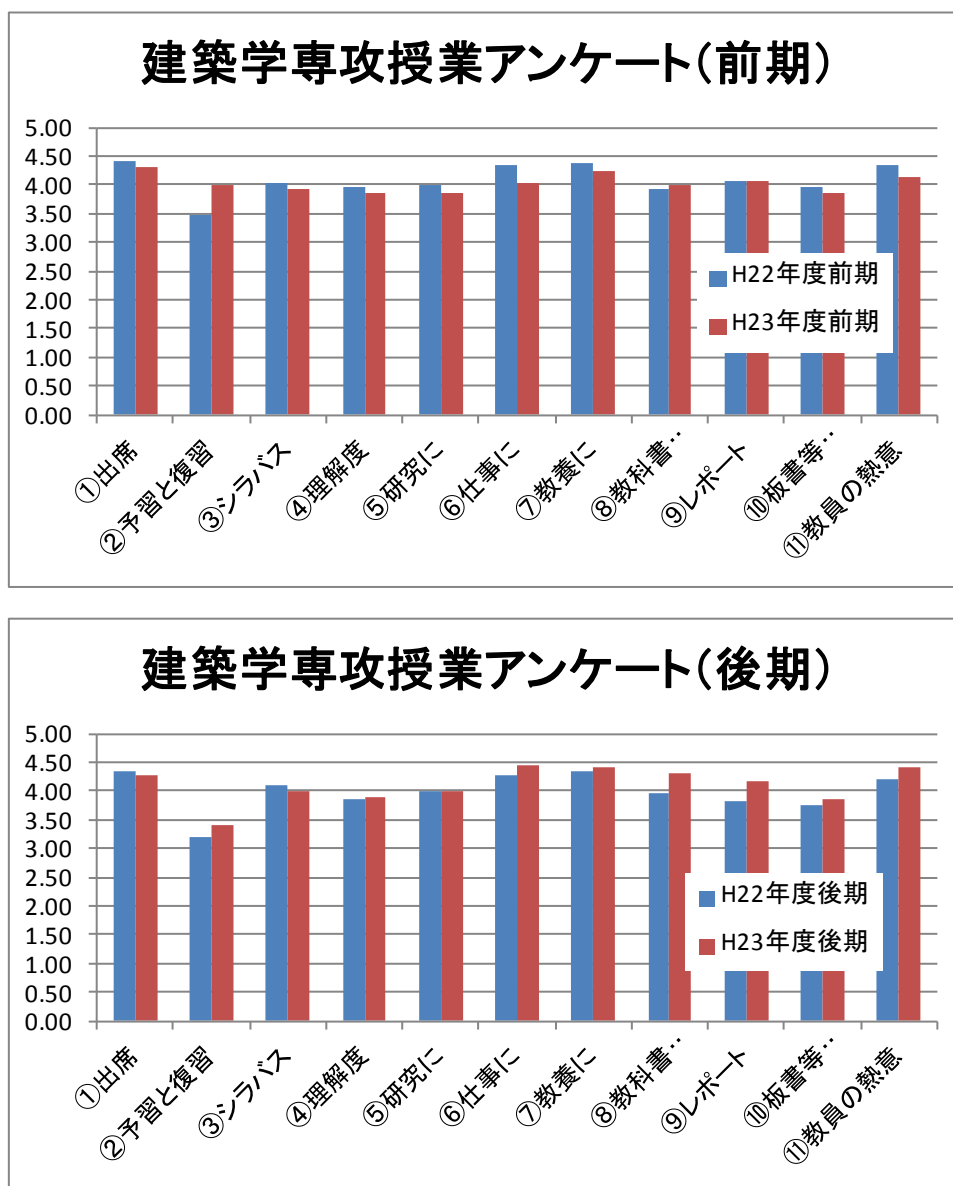


図 4 建築学専攻の 21 年度の講義科目の授業アンケートの結果

化学生命・化学工学専攻（筒井俊雄）

化学生命・化学工学専攻の平成 21～23 年度の授業評価結果の推移を図 5 に示す。ほとんどの項目で 4.0～4.5 の高い評価結果となっている。とくに、項目 ⑤「研究に（授業の内容は自身の研究を進める上で役立つ）」、項目 ⑥「仕事に（授業の内容は目指す（職業上の）高度専門知識として役立つ）」、⑦「教養に（授業の内容は自身の教養や学力を高める上で役立つ）」などの評価が高く、項目 ⑪「熱意（教員の熱意が感じられた）」も高いことから、研究に対する各教員の高いアクティビティが授業にも反映されていると考えられる。それに比べて、項目 ④「理解度（授業はほぼ理解でき、学習目標は達成）」はやや低く、高度な内容を十分理解させる余地が残されていると思われる。学生の理解を向上させるため

には、項目⑧「教科書・教材」、項目⑨「レポート（レポートなどは授業の理解に役立った）」、項目⑩「板書（板書などは明瞭だった）」など、講義に対する教員の努力による要素が重要であるが、これらの項目も年々評価が向上している。しかし、項目②「予復習」にかかる時間はまだ不十分である。レポートの作成など、さらに工夫が必要と考えられる。

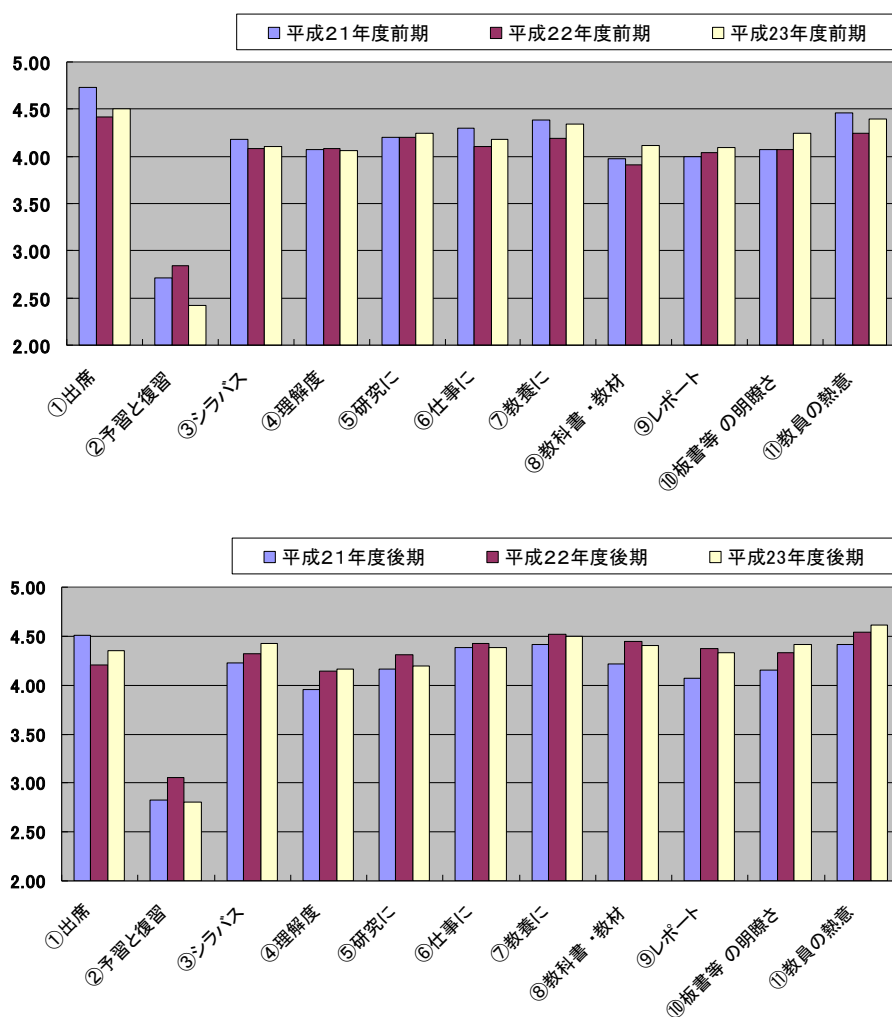


図5 化学生命・化学工学専攻の授業評価アンケート結果の推移（平成21～23年度）

次に、化学生命・化学工学専攻の研究科内での位置付けを分析するため、平成23年度の理工学研究科全体、理工学研究科工系、および化生・化工専攻の集計結果（前期、後期の平均値）を比較した。図6にその結果を示す。化生・化工専攻は②「予復習」を除く全ての項目で理工学研究科工系および全体を上回っていることがわかる。

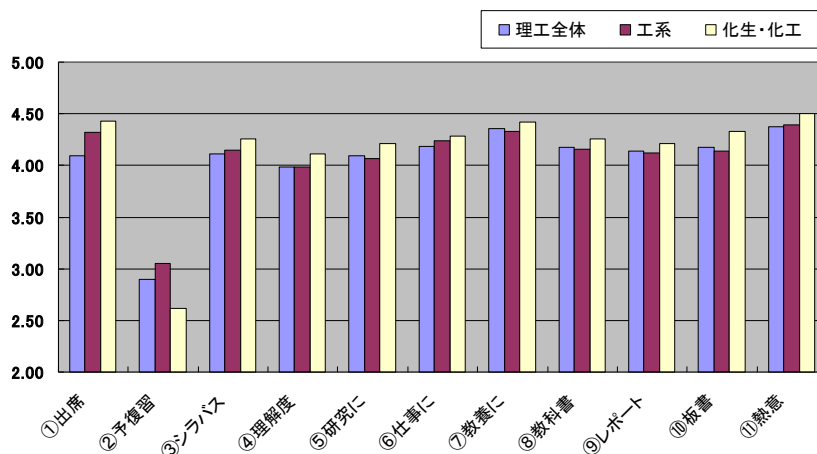


図6 化学生命・化学工学専攻，理工学研究科工系，理工学研究科全体の集計結果（平成22年度）

海洋土木工学専攻（安達貴浩）

海洋土木工学専攻における過去3年間の授業アンケートの結果を表2に示す。この結果を見ると、ほぼ全ての項目において、4程度ないしはそれ以上の評価が得られており、大学院の講義に対して学生は所定の満足を得ているものと判断される。ただし、設問②「予習と復習は毎週どれくらいしましたか。（レポート作成時間も含まれます）」の評価のみが2.6～3.00となっており、他の設問の評価に比べて極端に低い評価点となっており、評点が減少傾向にある。

表2 海洋土木工学専攻のアンケート結果

	①出席	②予習と復習	③シラバス	④理解度	⑤研究に	⑥仕事に
H21年前期	4.61	3.00	3.99	3.78	4.02	4.33
H21年後期	4.13	3.00	3.98	3.90	4.13	4.17
H22年前期	4.51	2.86	4.05	3.97	4.11	4.29
H22年後期	4.35	2.69	4.08	3.94	4.01	4.24
H23年前期	3.87	2.69	4.40	4.31	4.38	4.44
H23年後期	3.89	2.62	4.30	4.14	4.14	4.19
	⑦教養に	⑧教科書・教材	⑨レポート	⑩板書等の明瞭さ	⑪教員の熱意	
H21年前期	4.40	4.13	4.05	4.14	4.44	
H21年後期	4.19	4.06	4.13	4.06	4.40	
H22年前期	4.38	4.10	4.03	4.20	4.43	
H22年後期	4.25	4.31	4.20	4.18	4.39	
H23年前期	4.44	4.31	4.09	4.33	4.60	
H23年後期	4.35	4.32	4.30	4.32	4.68	

情報生体システム工学専攻（二宮公紀）

平成21年度に改組が行われ、情報工学専攻と生体工学専攻の一部が合流して情報生体システム工学専攻が立ち上がり、3年目となっている。情報生体システム工学専攻のFD授業評価アンケートは平成21年度から23年度分の3年間のデータが収集されていることになる。ここではその3年間の経年変化を見ることにする。昨年度のFD報告書では情報工学専攻と生体工学専攻の一部とのデータと比較していたが、今年度のFD活動報告書では情報生体システム工学専攻単独のデータで比較することによって、評価と論評を加えたい。平成21年度から質問内容に若干の修正が施されているため、比較対象となった項目は以下の11項目である。

- ①出席
- ②予習と復習
- ③シラバス
- ④理解度
- ⑤研究に役に立つか
- ⑥仕事に役に立つか
- ⑦教養になるか
- ⑧教科書・教材は適切か
- ⑨レポート
- ⑩板書等の明瞭さ
- ⑪教員の熱意

情報生体システム工学専攻の集計結果を前期および後期に分け、図7(1)および図7(2)に示す。集計にあたっては、前期の集計を表す図7(1)は204枚、後期の集計を表す図7(2)は160枚の平均となっている。前期、後期の開講科目はどちらも10科目ずつであった。

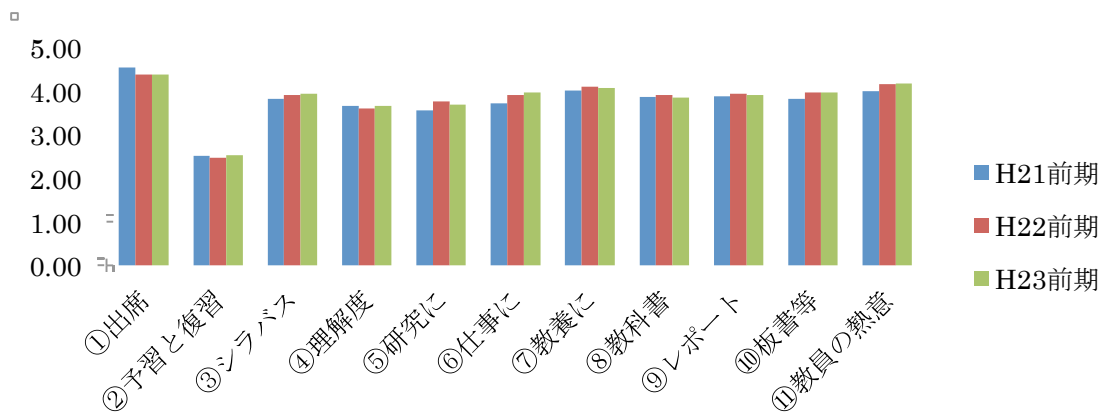


図 7 (1) 情報生体システム工学専攻の授業評価アンケート結果の推移 (平成 21~23 年度 前期)

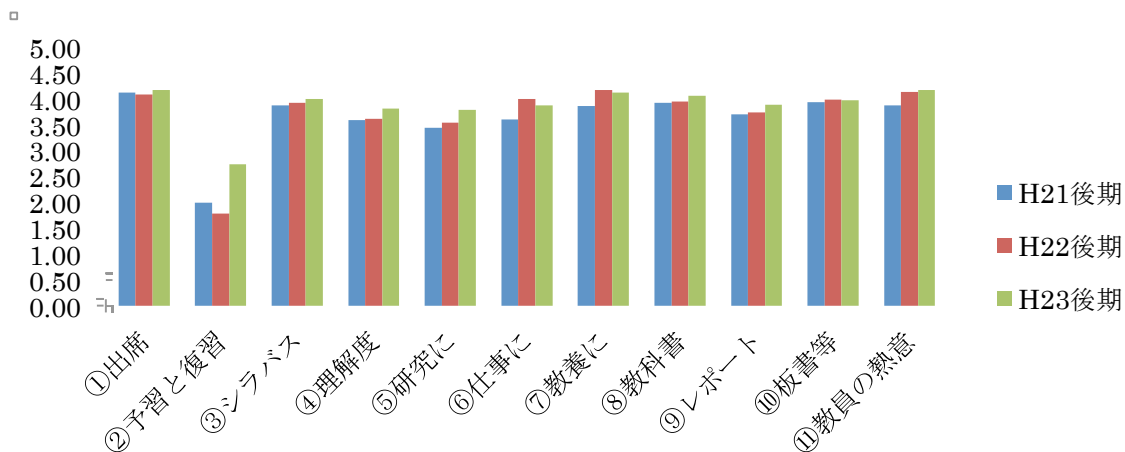


図 7 (2) 情報生体システム工学専攻の授業評価アンケート結果の推移 (平成 21~23 年度 後期)

各項目の最高点は 5 点であるが、3 年間の経緯を見ると両図ともほとんどの項目が右肩上がりであり、前期・後期とも 3.5 以上かまたは近傍である。項目の意味をみると、「①出席」と「②予習と復習」は院生の授業に対する姿勢を評価しているし、「④理解度」～「⑦教養に」は教員の表現や教示等の工夫と院生の授業への取り組む姿勢等が関連しているような項目となっており、その評価が示されていることになる。「⑪教員の熱意」は教員の授業に対する意気込み等を示す評価と判断してよいものと思われる。以上を念頭に両図を見ると、この 3 年間に於いて院生の授業に対する評価が高くなってきていることになるとと思われる。特に「⑪教員の熱意」は徐々にではあるが評価が前期、後期とも向上しており、良好な傾向にあると思われる。前期の「①出席」のように若干評価が下がっている項目もあるが、これは表価値が 4 以上であり、非常に憂慮すべき状態とは思われない。一方、前期の「④理解度」のように下がり気味に見える評価もあるが、これは平成 21 年度が 3.67、平成 22 年度が 3.61、今年度が 3.66 と実際の数値としてはほとんど変わらないと判断してよいものと思われる。

情報生体システム工学専攻としての評価だけでなく、研究科工学系との比較を行う必要もある。工学系全体の枚数は前期が 1209 枚、後期が 834 となっている。例えば、「④理解度」では本専攻は 3.66 であるのに対して、工学系は 3.96 となっているし、「⑪教員の熱意」についても 4.18 と 4.31 という結果がでてくる。すべての項目の平均の平均差は前期が 0.2、後期が 0.5 低い値であった。分散を求めて平均仮説の検定を行うと、有意水準 0.05 で研究科工学系と情報生体システム工学専攻の平均値に有意差がある結果となった。平成 22 年度後期の平均値が 1 点ほど低かったことから比べれば、その差は縮まっているが、次年度に対する課題として平均値の向上が残っているのではないかとと思われる。最後にもう 1 点記述しなければならないのは、次年度以降も「②予習と復習」の評点の向上に留意が必要ということになる。

理学系専攻の授業評価アンケートの結果報告 (山本啓司)

図8の授業アンケート評価点平均値(理学系)をみると、前期開講の授業については「予習と復習は毎週どれくらいしましたか。(レポート作成時間も含まます)」の項目を除き、4.0前後の高い評価となっている。この種のアンケートでは回答者である受講生にとって最高または最低の評価点はつけにくいと思われることを考慮すると、平均値が4を大幅に超えるようになる(大多数の学生が5と回答し、3以下の回答がほとんどないような状況)ことはなさそうである。4.0以上の項目については十分に高い評価に到達しているものとみなすことができる。過年度の値と比較すると、多くの項目で評価点が上昇傾向にある。過年度比で上昇していない項目も十分に高い水準を維持している。

授業アンケート評価点平均値(理学系)

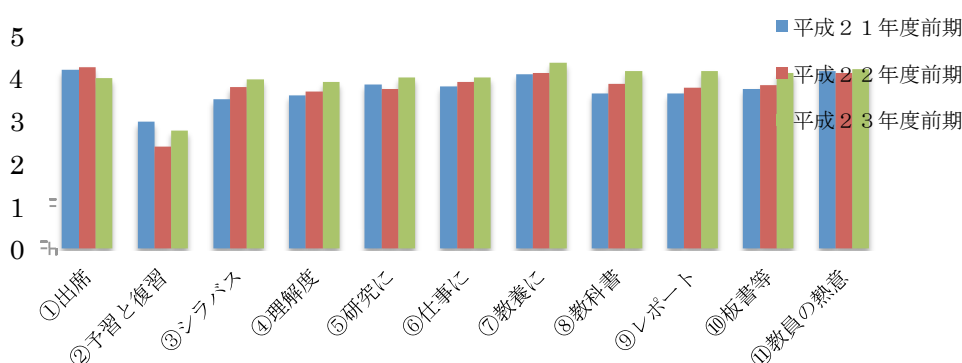


図8(1) アンケート評価点平均値の比較(理学系・前期)

後期については、「出席」と「予習と復習」の項目を除き、4.0を超える評価点になっている。それらの高評価の項目は、過年度の値と比較するといずれも評価点が上昇傾向にあり、授業改善の努力が受講生による評価に反映されているようである。前期と比べて「出席」の評価点が低いのは、後期(2期)になると研究活動が活発になるので学生本人が決定できない条件による拘束(学会、調査、観測など)が多くなり、欠席せざるを得ない場面が増えるためではないかと思われる。

「予習・復習」の評価点は年度ごとの変化が大きい。前期、後期ともに他の項目と比べて一段階低い。これは、日本の理系大学院教育が授業を通しての学習よりも研究の成果を重要視する傾向にあることと関連していると思われる。多くの教員は大学院生が研究活動に使える時間をなるべく多くとれるように配慮して、予習復習をあまり必要としない形式の授業を行っているのではないだろうか。研究成果重視の傾向は今後も短期的には変化しそうにない。この状況下で多数の教員が自習時間を多く要するような授業形態に転換すると受講生の負担が急増する恐れがある。自習時間の少なさは改善すべきであるが、改善策は性急なものであってはならない。授業アンケートを継続的に実施して傾向を把握する必要がある。

授業アンケート評価点平均値(理学系)

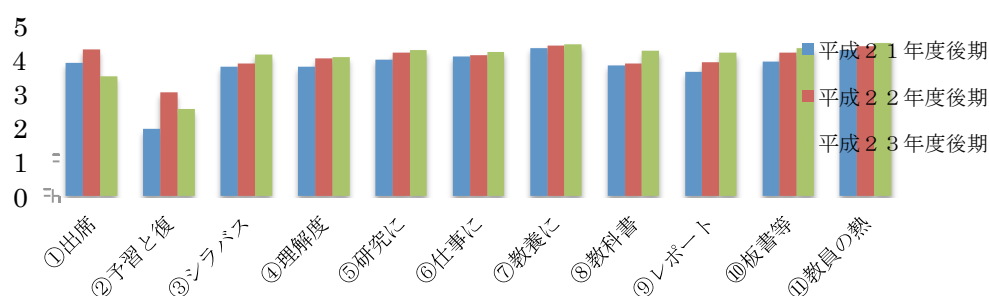


図8(2) アンケート評価点平均値の比較(理学系・後期)

表3 理工学研究科授業評価アンケートの結果（平成23年度）

平成23年度前期

項目	①出席	②予習 と復習	③シラ バス	④理解 度	⑤研究 に	⑥仕事 に	⑦教養 に	⑧教科 書・教材	⑨レポ ート	⑩板書 等明瞭	⑪教員 の熱意
機械工学専攻	4.61	3.41	4.27	4.22	4.22	4.44	4.54	4.24	4.20	4.19	4.46
電気電子工学専攻	4.51	3.13	3.89	3.64	3.72	3.98	4.02	3.95	3.94	3.88	4.08
建築学専攻	4.31	4.00	3.92	3.84	3.84	4.04	4.24	4.01	4.08	3.84	4.14
化学生命化学工学専攻	4.50	2.42	4.10	4.06	4.24	4.18	4.34	4.12	4.09	4.25	4.40
海洋土木工学専攻	3.87	2.69	4.40	4.31	4.38	4.44	4.44	4.31	4.09	4.33	4.60
情報生体システム工学専攻	4.38	2.53	3.95	3.66	3.70	3.97	4.07	3.86	3.92	3.98	4.18
数理情報科学専攻	3.85	3.21	4.28	4.23	4.26	4.41	4.62	4.44	4.44	4.64	4.59
物理・宇宙専攻	4.33	2.69	3.83	3.56	3.81	3.72	4.00	4.11	3.97	3.72	3.97
生命化学専攻	4.15	2.59	4.10	3.92	4.11	4.08	4.34	4.25	4.33	4.02	4.25
地球環境科学専攻	3.64	2.56	3.64	3.88	3.84	3.84	4.44	3.84	3.88	4.08	4.00
理工学研究科(工学系)平均値	4.36	3.03	4.09	3.96	4.02	4.18	4.28	4.08	4.05	4.08	4.31
理工学研究科(理学系)平均値	3.99	2.76	3.96	3.90	4.01	4.01	4.35	4.16	4.16	4.12	4.20
理工学研究科平均値	4.22	2.92	4.04	3.93	4.01	4.11	4.31	4.11	4.09	4.09	4.27

平成23年度後期

項目	①出席	②予習 と復習	③シラ バス	④理解 度	⑤研究 に	⑥仕事 に	⑦教養 に	⑧教科 書・教材	⑨レポ ート	⑩板書 等明瞭	⑪教員 の熱意
機械工学専攻	4.52	3.68	4.38	4.26	4.43	4.58	4.61	4.38	4.38	4.50	4.58
電気電子工学専攻	4.52	3.19	4.18	3.86	4.12	4.29	4.35	3.94	4.08	4.19	4.44
建築学専攻	4.26	3.40	3.99	3.89	4.01	4.44	4.40	4.31	4.15	3.86	4.42
化学生命化学工学専攻	4.35	2.81	4.42	4.16	4.19	4.38	4.50	4.40	4.33	4.41	4.61
海洋土木工学専攻	3.89	2.62	4.30	4.14	4.14	4.19	4.35	4.32	4.30	4.32	4.68
情報生体システム工学専攻	4.17	2.74	4.00	3.81	3.79	3.88	4.12	4.06	3.89	3.97	4.17
数理情報科学専攻	2.82	2.73	4.00	4.00	4.18	4.18	4.18	4.14	4.09	4.32	4.18
物理・宇宙専攻	3.68	2.26	4.11	3.68	4.11	4.05	4.58	4.26	3.95	4.26	4.74
生命化学専攻	3.27	2.34	4.05	4.00	4.23	4.21	4.43	3.88	4.02	4.07	4.32
地球環境科学専攻	4.29	2.86	4.43	4.57	4.57	4.43	4.57	4.71	4.71	4.71	4.71
理工学研究科(工学系)平均値	4.29	3.07	4.21	4.02	4.11	4.29	4.39	4.24	4.19	4.21	4.48
理工学研究科(理学系)平均値	3.52	2.55	4.15	4.06	4.27	4.22	4.44	4.25	4.19	4.34	4.49
理工学研究科平均値	3.98	2.86	4.19	4.04	4.18	4.26	4.41	4.24	4.19	4.26	4.49

数理情報科学専攻（小櫃邦夫）

数理情報科学専攻では、受講者がきわめて少数の講義を除き、授業評価アンケートを実施した。専攻の授業評価アンケートの結果については各項目の平均値を表4にまとめた。

表4 授業アンケート結果

項目	平成23年度前期の平均値			平成23年度後期の平均値		
	数理情報	理系全体	研究科全体	数理情報	理系全体	研究科全体
①出席	3.85	3.99	4.22	2.82	3.52	3.98
②予習と復習	3.21	2.76	2.92	2.73	2.55	2.86
③シラバス	4.28	3.96	3.93	4.00	4.15	4.19
④理解度	4.23	3.90	3.81	4.00	4.06	4.04
⑤研究に	4.26	4.01	4.11	4.18	4.27	4.18

⑥仕事に	4.41	4.01	4.04	4.18	4.22	4.26
⑦教養に	4.62	4.35	4.31	4.18	4.44	4.41
⑧教科書・教材	4.44	4.16	4.11	4.14	4.25	4.24
⑨レポート	4.44	4.16	4.09	4.09	4.19	4.19
⑩板書等の明瞭さ	4.64	4.12	4.09	4.32	4.34	4.26
⑪教員の熱意	4.59	4.20	4.27	4.18	4.49	4.49

また、授業の担当者は、各授業の授業評価アンケートに基づいて、授業計画改善書を作成し提出している。授業計画改善書に記載されている今年度の授業の評価（自己分析）と、来年度の授業計画（改善の方策）のコメントを抜粋する：

- ④理解度や⑤研究に、⑥仕事に、⑦学力・教養に、で割と良い評価を得ているのは、好ましいことである。
- 教科書は特に使用していないが、時に参考資料を配布しているので、それは役立っているようである。
- レポート問題が少し難しかったりしたため、評点が若干低いのであろう。熱意は感じてくれているようである。板書はいつも指摘されることであり、出来るだけゆっくりと綺麗な文字で書くように努力したい。
- 今年度、内容を見直すことにより理解度を上げることが最大の目標であったが、かなり改善が見られた。
- 来年度は、講義の区切りやレポート課題の内容などをより工夫したい。
- 毎回の授業中に出席を取ったが、すべて出席が5名、1回欠席4名、2回欠席4名、3回欠席1名であり、出席率は良かったと思う。次年度も出席は毎回取る予定である。予習と復習の時間は専攻平均を下回っていたので、復習に時間をかけるような部分を増やしたい。
- 教材は独自に作成した資料(50ページ程度)を利用して講義を行ったが、専攻平均を上回った評点である。
- 理解度を高めるためにも、適宜、レポート等の課題を与え復習の機会を与えるようにしたい。
- 様々な専門の院生を対象にしているため、講義内容の選択をなるべく共通な領域にしぼって計画を立てたい。また、それぞれの専門領域で役に立つような内容にできるよう工夫したい。
- 教科書は使わず自分の講義ノートで行った。適宜プリント等を準備して院生の学習支援にしたい。
- 講義の実践については、講義内容をわかり易く、できるだけ丁寧な説明を行うよう心がけたい。
- 各教員によって、教材などの準備がまちまちだったと思われる。「最低でもXXは配布する」などある程度の方針を決めるべきかもしれない。
- 以前から自習用プリントを配布していますが、これはよかったと思います。また頻繁に文献の紹介をしました。気軽に読める読み物風の本も含めて紹介しました(実際に読んでいた学生は多くはないと思いますが)。
- 今年度から、毎回出席を取ることにした。来年度も毎回出席を取ることにしたい。
- レポートを時々課して、復習の機会を増やしたい。
- 具体例を増やして、少し易しい内容にしたい。
- 式が複雑なところは、プリントを準備したい。
- 専門が異なる(予備知識が不足している)学生に考えさせる授業をするのは難しい。出来るだけ丁寧な説明を行いたい。
- レポートを途中で出すことを考える。
- 式が難しいところはプリントがよいかもしれない。
- 毎回出席をとっているため、出席状況は良い。
- 予習と復習の時間が少ない。特にその日の復習をしてもらいたいので、演習問題を与えて復習するような状況を作りたい。
- 液晶プロジェクターを利用して、学生がより理解できるよう授業を行っているが、さらなる工夫をしたい。

物理・宇宙専攻 (半田利弘)

物理・宇宙専攻では、前期後期合計7科目でアンケートを実施し、のべ50人からの回答が得られた。回答数が少ないのは受講生数が限られているためである。

表5は本専攻における授業アンケート各項目の平均点である。アンケートの設問形式が類似となった平成21年度からの推移を示す。ただし、入手した資料の関係から、平成21年度は後期(10~3月)開講科目のみの平均である。

表 5 物理・宇宙専攻における授業アンケート各項目の平均値(平成21年後期～平成23年)

	23年	22年	21年後期
1. (出席)	4.15	4.41	4.57
2. (予習と復習)	2.57	2.41	2.07
3. (シラバス)	3.91	3.77	3.71
4. (理解度)	3.59	3.67	3.64
5. (研究に)	3.89	3.93	3.93
6. (仕事に)	3.81	3.92	4.00
7. (学力に)	4.16	4.05	4.36
8. (教科書・教材)	4.15	3.77	3.86
9. (レポート等)	3.96	3.67	3.86
10. (板書等の明瞭さ)	3.87	3.76	3.57
11. (教員の熱意)	4.19	4.08	4.00

まず、上表の数値は順序数でしかなく、項目ごとに数値の意味が異なるため、その値だけを相互比較するのは無意味である。そこで、各項目の経年変化を見ると、前年比較で0.4未満の違いしかない。回答総数も考慮すると、統計的に有意な変化は見られないと判断するのが妥当である。その上で、昨年度との比較を強いて行くと「(8)教科書・教材」が+0.38, 「(9)レポート等」が+0.30と評価が上がっている。この2年間では集計対象となった科目も担当教員も異なるため、一概に比較できないが、授業の質が向上していると評価することもできる。逆に、「(1)出席」は-0.26だけ低下しているが、平均値に該当するのは「1回欠席」より多いので著しい問題とは考えられない。仮に出席数の低下が継続的な傾向で問題であるとするならば、就職活動に異常に時間を使う学生が増えていることの現れとも考えられる。そうならば、不況を口実とした企業の一方的な論理に屈することがないよう大学全体が努力する必要も出てくるだろう。冒頭で項目間の数値自体の比較は無意味だと述べた。それを敢えて無視すると「(2)予習と復習」の低さが目に付く。しかし、この平均値でも1時間程度は使っていることになり、著しい問題とは思えない。予習・復習時間は長ければよいというものではないし、(8), (9)のほか、無視できる差とはいえ(10), (11)も評価が向上していることを総合して判断すれば、よい授業が増えてきたと解釈することもできよう。強いて言えば、(4), (5), (6)に顕著な低下が生じないよう注意する必要があるかも知れない。

生命化学専攻 (九町健一)

生命化学専攻では今年度も授業アンケートを前期と後期について実施した。表6は平成21年度から平成23年度の結果を示している。

表 6 生命化学専攻の授業評価アンケート結果の推移

前期						
年度	21	22	23	21	22	23
項目	生命化学専攻			理学系平均値		
①出席	4.7	4.4	4.2	4.2	4.2	4.0
②予習・復習	3.0	2.5	2.6	3.0	2.4	2.8
③シラバス	3.7	4.0	4.1	3.5	3.8	4.0
④理解度	4.0	3.8	3.9	3.6	3.7	3.9
⑤研究に	4.0	3.7	4.1	3.8	3.7	4.0
⑥仕事に	4.0	4.0	4.1	3.8	3.9	4.0
⑦教養に	4.2	4.3	4.3	4.1	4.1	4.4
⑧教科書	3.8	3.9	4.3	3.6	3.9	4.2
⑨レポート	3.8	3.8	4.3	3.6	3.8	4.2
⑩板書等	3.6	3.8	4.0	3.7	3.8	4.1
⑪熱意	4.3	4.4	4.3	4.2	4.1	4.2

後期						
年度	21	22	23	21	22	23
項目	生命化学専攻			理学系平均値		
①出席	4.7	4.6	3.3	3.9	4.3	3.5
②予習・復習	3.0	3.0	2.3	2.0	3.0	2.5
③シラバス	3.7	4.0	4.1	3.8	3.9	4.1
④理解度	4.0	4.3	4.0	3.8	4.0	4.1
⑤研究に	4.0	4.0	4.2	4.0	4.2	4.3
⑥仕事に	4.0	4.1	4.2	4.1	4.1	4.2
⑦教養に	4.2	4.5	4.4	4.3	4.4	4.4
⑧教科書	3.8	3.7	3.9	3.8	3.9	4.2
⑨レポート	3.8	4.1	4.0	3.6	3.9	4.2
⑩板書等	3.6	4.6	4.1	3.9	4.2	4.3
⑪熱意	4.3	4.3	4.3	4.3	4.4	4.5

次の項目についての評価値は、過年度に比べて目立った低下がみられた — ①出席（前期・後期）、②予習・復習（後期）、④理解度（後期）、⑩板書等。項目①と②については、同様の傾向が理学系全体でみられた。項目④（後期）の理解度の低下は生命化学専攻に特有の現象だった。この主要な原因は、項目①出席や項目②予習・復習の低下だと考えられるが、項目⑩の板書等の明瞭さの低下が影響を与えている可能性もあり、次年度以降各教員が襟を正して改善に務めるべき点だと思われる。後期で多くの評価値が低下した理由として、就職活動解禁時期が今年から2ヶ月遅れたため、短期間で集中的に就職活動を行う必要が出てきた点が考えられる。この影響を明らかにするためには次年度以降も継続的にデータを収集していく必要がある。一方前期においては、項目⑧教科書や項目⑨レポートが理解の手助けになったという評価が高かった。項目④の理解度や、項目⑤の研究の遂行に対する有用性、項目⑥仕事に対する有用性の評価が上昇したのはこのことが原因だと考えられる。教員側の授業改善に対する努力が学生の理解度に反映することを示す結果であり、今後ともよりよい講義を行なう工夫を続けていく重要性を感じた。

地球環境科学専攻（山本啓司）

地球環境科学専攻では、前期、後期について授業評価アンケートを実施した。ただし、論文講読、特別研究、および受講生が極めて少人数の授業科目については、「回答者が特定されてしまう」、「評価点（平均点）の解釈が困難」などの不都合が指摘されているためアンケートの実施については、各担当教員の判断にゆだねた。

表7 授業アンケート結果

設問	平成23年度前期の平均値			平成23年度後期の平均値		
	地球環境	理学系	研究科全体	地球環境	理学系	研究科全体
①出席	3.64	3.99	4.22	4.29	3.52	3.98
②予習と復習	2.56	2.76	2.92	2.86	2.55	2.86
③シラバス	3.64	3.96	4.04	4.43	4.15	4.19
④理解度	3.88	3.90	3.93	4.57	4.06	4.04
⑤研究に	3.84	4.01	4.01	4.57	4.27	4.18
⑥仕事に	3.84	4.01	4.11	4.43	4.22	4.26
⑦教養に	4.44	4.35	4.31	4.57	4.44	4.41
⑧教科書・教材	3.84	4.16	4.11	4.71	4.25	4.24
⑨レポート	3.88	4.16	4.09	4.71	4.19	4.19
⑩板書等の明瞭さ	4.08	4.12	4.09	4.71	4.34	4.26
⑪教員の熱意	4.00	4.20	4.27	4.71	4.49	4.49

アンケート結果に基づいて、各項目の平均値を表3.2.4にまとめた。ただし後期開講授業でのアンケート実施は一件だけであり、それを専攻の平均値として論じることは無意味なので後期については言及しない。以下の検討は全て前期開講科目についてのものである。

地球環境科学専攻の評価点平均値は昨年度よりもやや低下している項目が多いが、「出席」、「予習と復習」と「シラバス」を除くと概ね4前後である。アンケートの回収枚数が少ない（総数25）ため、平均値のわずかな変動にはあまり意味がない。評価点が4前後の設問については十分に高い水準を維持していると言える。理学系での平均値と比較すると、やはり「出席」、「予習と復習」と「シラバス」についての評価が相対的に低くなっている。地球環境科学専攻では、研究を遂行する上で野外調査、観測、および種々の実験装置の操作が必要になることが多い。調査に適切な季節や時間帯、あるいは観測・実験施設の運用スケジュールなどは学生個人の予定とは無関係に決まってしまう。そのため欠席せざるを得ないことが他の専攻と比べて多いのではないかとと思われる。教員側はそのような状況を承知しているので、「予習と復習」をあまり必要としないように配慮して授業を行っているようである。これらは「授業の改善」によって解決すべき問題とは性質が異なる。シラバスの評価点が低いことについては、個々の授業のシラバスの内容は改善されているはずであるが、学生側にシラバスを読んで活用してもらうための周知の努力が不十分であったと考えられる。

学生の研究活動と教育成果 (九町健一, 安達貴浩)

大学院生の研究発表の支援は FD 活動の目的の一つであることから、その実績を把握するために調査を実施した。

表 8 大学院生の研究成果の発表数

年度	分類		機械工学	電気電子工学	建築学	化学生命・化学工学	海洋土木工学	情報生体システム工学	数理情報科学	物理・宇宙	生命化学	地球環境科学	計
平成21年度	口頭発表(ポスターを含む)	国際会議	9	5	1	34	6	1	1	2	16	7	82
		国際会議以外	31	67	46	125	42	32	8	28	35	15	429
	論文	査読あり	29	20	7	54	32	9	4	11	26	3	195
		査読なし	3	16	32	17	21	9	3	8	0	3	112
	在籍者数(博士前期)			115	98	46	116	36	80	23	32	37	38
平成22年度	口頭発表(ポスターを含む)	国際会議	3	7	2	53	4	2	1	6	27	11	116
		国際会議以外	44	65	38	126	29	46	4	9	41	19	421
	論文	査読あり	19	12	3	39	17	19	1	4	29	2	145
		査読なし	7	30	26	20	2	36	0	6	7	2	136
	在籍者数(博士前期)			109	106	46	132	39	85	25	30	36	36
平成23年度	口頭発表(ポスターを含む)	国際会議	1	5	1	49	2	6	0	3	8	11	86
		国際会議以外	15	60	38	135	34	35	1	14	26	26	384
	論文	査読あり	4	13	0	25	27	9	1	3	9	8	99
		査読なし	3	18	6	7	9	7	1	6	3	0	60
	在籍者数(博士前期)			116	105	52	88	32	89	24	28	32	30

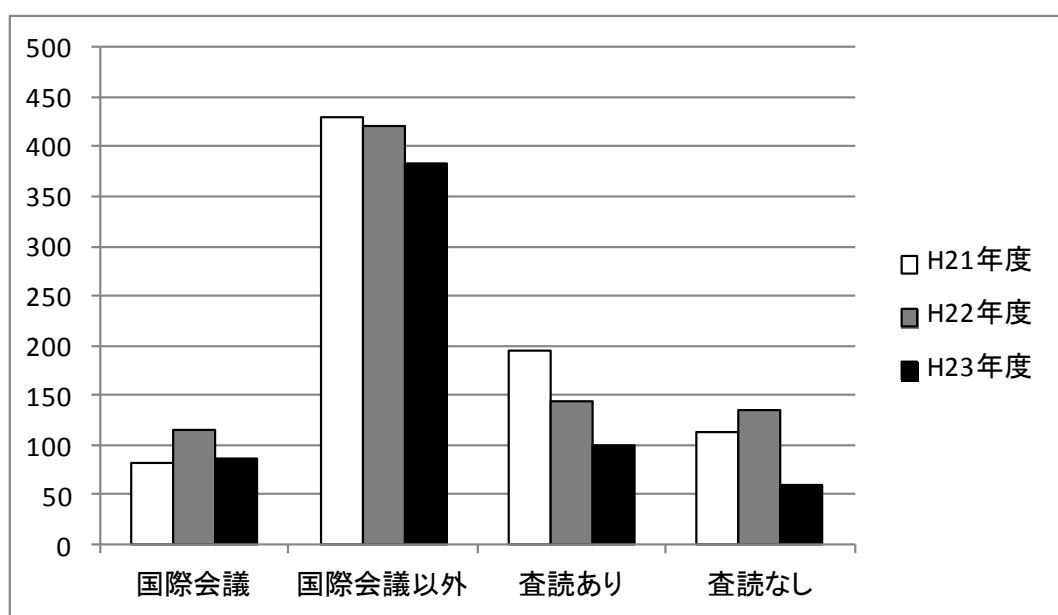


図 9 大学院生の研究成果の発表数(論文及び口頭発表)

表 8 および、図 9、図 10.1~10.5 に平成 21 年度~23 年度の大学院生の研究発表数をまとめた。教員との共著を含めてカウントし、複数の学生が関わっているものはまとめて一つと数えている。ただし口頭

発表と論文がセットになっているものは、重複して口頭発表1・論文1と数えている。また博士後期課程の学生については指導教員の属する専攻に組み入れてカウントしている。また、論文・学会発表以外の特筆すべき成果についてデータを集めた（表9）。

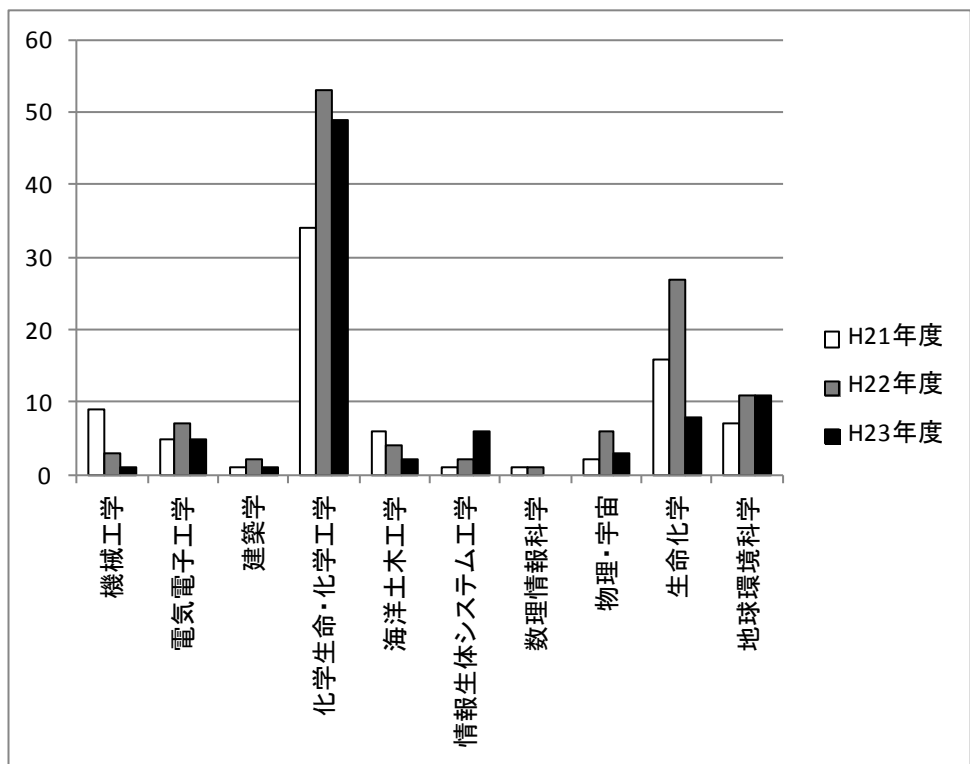


図 10.1 各専攻の大学院生の口頭発表数（含ポスター発表）（国際会議）

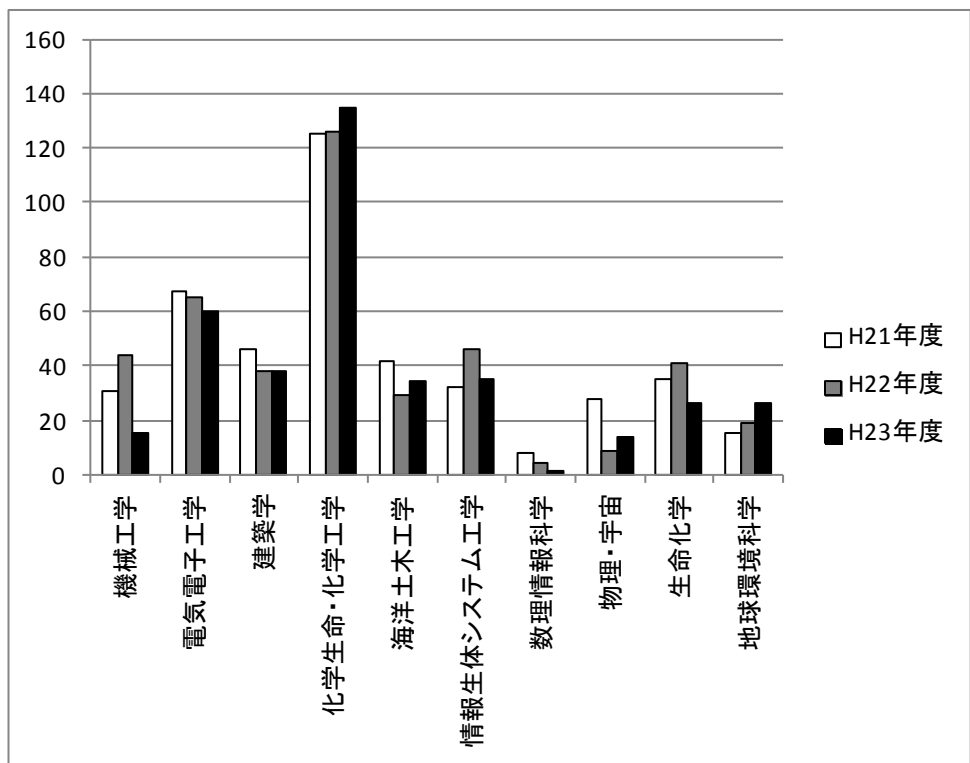


図 10.2 各専攻の大学院生の口頭発表数（含ポスター発表）（国際会議以外）

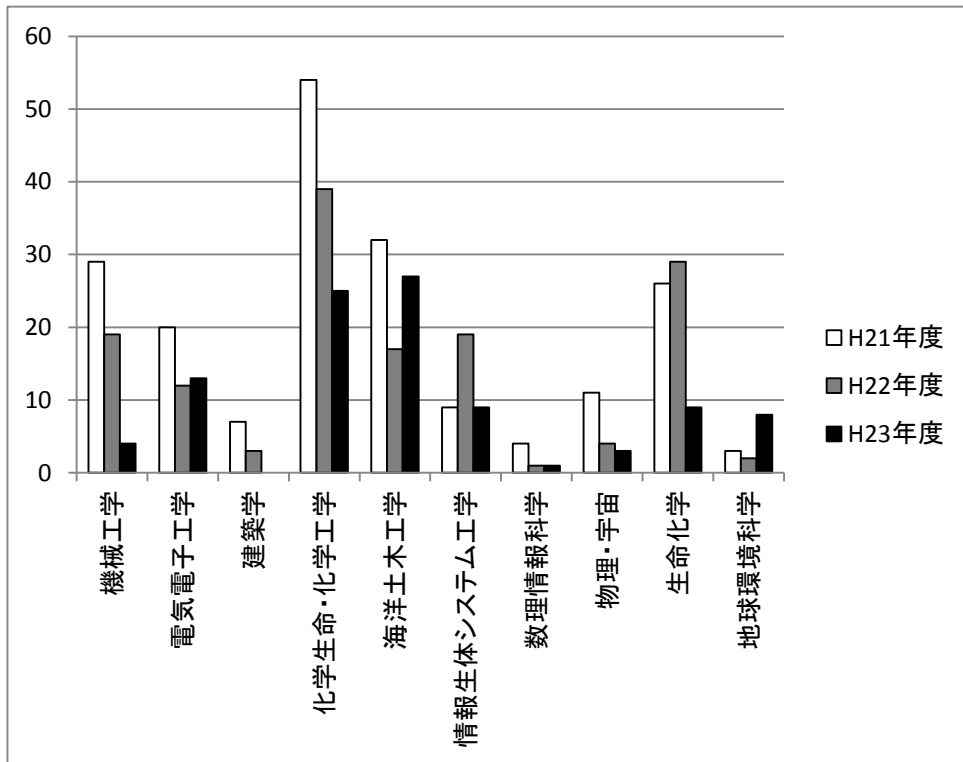


図 10.3 各専攻の大学院生の論文数(査読あり)

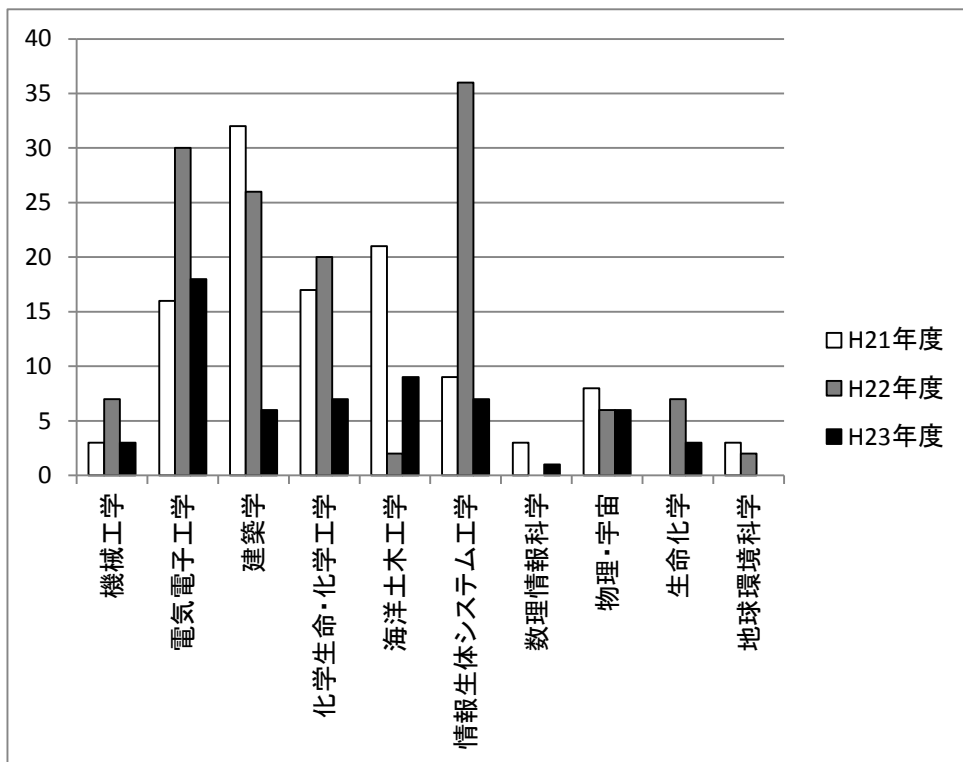


図 10.4 各専攻の大学院生の論文数(査読なし)

表9 受賞など

専攻	受賞者名	受賞賞名等
機械工学	矢野 高寛	日本機械学会九州学生会優秀講演賞
電気電子工学	清水崇行	電子情報通信学会 学術奨励賞
	清水崇行	電子情報通信学会 九州支部長賞
	木元武尊	低温工学・超電導学会優良発表賞
	紫尾豪氏	情報処理学会 九州支部 奨励賞
	荒木健太郎	電子情報通信学会 九州支部 学生会講演奨励賞
	藤崎将嵩	電子情報通信学会 九州支部 学生会講演奨励賞
	高木義昭	日本知能情報ファジィ学会 九州支部 学生優秀講演賞
建築学	永田洸大	優秀講演賞(構造形態の解析と創生2011)
	清水郁子	優秀発表賞(空間構造の夏季セミナー)
化学生命・化学工学	飯隈洋一	ポスター賞(化学工学分野)(第48回化学関連支部合同九州大会)
	飯隈洋一	優秀ポスター賞(第22回九州地区若手ケミカルエンジニア討論会)
	梅尾清志郎	優秀発表賞(化学工学会第43回秋季大会反応工学会部会ポスターセッション)
	飯隈洋一	Best Speaker Award(第24回化学工学に関する国際シンポジウム)
	田代祐也	動画賞(化学工学会粒子・流体プロセス部会)
	高橋良尚	若手ケミカルエンジニア討論会ポスター賞
	小藤菜緒	第22回九州地区若手ケミカルエンジニア討論会ポスター賞
	植田靖宏	24th International Symposium on Chemical Engineering, Best Speaker Award
	上山由貴	日本エネルギー学会 第48回石炭科学会議 優秀賞
	豊留寿也	第48回化学関連支部合同九州大会 高分子部門 ポスター賞受賞
海洋土木工学	江口康平	日本コンクリート工学協会九州支部長賞
	坂元貴之	日本コンクリート工学協会九州支部長賞
	久徳真大	土木学会西部支部優秀講演賞
	山下 啓	土木学会西部支部優秀講演賞
情報生体システム工学	ケティ・ティ・オウン	Young Author Award on AROB 17th (International Symposium on Artificial Life and Robotics 2012)
	田尻昌之	優秀発表賞, 生命ソフトウェアシンポジウム, 2011
	清田祥太	MIRU長尾賞
生命化学	石田拓也	第28回九州コロイドコロキウム 優秀ポスター賞
地球環境科学	佐藤峰南	日本地質学会第118年学術大会優秀ポスター賞
	半田直人	笹川科学研究助成(2012年度)
	半田直人	藤原ナチュラルヒストリー研究助成(2012年度)

今後の理工学研究科 FD 活動への期待

理工学研究科は平成 21 年度からの部局化により新しい組織としてスタートした。大学院教育における FD 活動は、「教員が授業及び研究指導等の内容・方法を改善し向上させるための組織的な取り組みの総称」とされている。大学院教育の共通の認識として、「はじめに」で述べたように、

- (1) どのような学位を出すのか
- (2) どのような教育プログラム（カリキュラム）を組むのか
- (3) どのような人材を入学させるのか

を明確にすると共に点検を継続して実施することが重要になる。

一方、中央教育審議会（平成 23 年 1 月 31 日）の答申「グローバル化社会の大学院教育～世界の多様な分野で大学院修了者が活躍するために～」では、大学院教育の改善の方向性が示されている。この中では、明確な学位プログラムとしての大学院教育を確立し、学生の質を保証する体系の整備が重要なものとして指摘されている。学生の質を保証する組織的な教育・研究指導体制の確立に関して、FD 活動に関連する項目としては次の項目がある。

- (1) FD の充実、ピアレビューの実施による教員の教育・研究指導能力の向上
- (2) 教員の教育業績や能力の評価の充実、人事や処遇への反映などの推進、教員の教育研究活動の評価に関する指標の開発推進

また、「教員の教育研究活動の適切な評価」に関しては、「教員の教育・研究指導能力を向上させるためには、組織的な研修体制の充実、学生に対する厳格な成績評価とともに、教員の教育研究活動を適切に評価する仕組みが一体となって機能することが必要である。その際、教員の教育研究活動評価においては、論文数のみではなく研究業績を適切に評価するとともに、授業の研究指導の実施状況、修了者の活躍状況など教育面の取り組みを可能な限り客観的に把握、可視化し、教育業績や能力の多面的な評価を充実させ、人事や処遇への反映せる工夫が必要である。」としている。

このように大学院のおかれた環境は、益々厳しい状況になっている。理工学研究科の教育プログラムでは、コースワークあるいはコア科目によるカリキュラム編成によって「大学院と学生の量的増大」の中で「学位プログラム等を通じた大学院教育の実質化」が図られている。すなわち、理工学研究科においても、各専攻の独自の教育・研究指導の実績に加えて、コースワーク科目により広範囲の学習を可能にした教育プログラムが実施されている。大学院の学生数が増大しことにより多様な能力を有する学生の教育・研究指導に対応したような大学院教育の展開も必要になってきている。これまでは各教員の能力に大きく依存してきた大学院の教育・研究を研究科として点検して改善していくことが必要になる。FD活動に関しても、大学院教育の共通認識として前述した3項目の再確認を行ない教育・研究指導の点検を行うことで、理工学研究科の目標の実現を図ることができると考える。

このような観点からFD活動の一つとして、学生による授業評価アンケートの実施がある。学生の意見、考えの一端を汲み取ることで、高度の学習・研究能力の育成といった学習目標の到達度に対する評価を行うことができると考えられる。また、今年度も昨年度に引き続き、学生の質の保証の一つとして研究発表の状況の調査を試みた。「どのような学位を出すのか」と言った要望に対して、本研究科の修了生の有する能力の評価の一つの指標なると思われる。単なる研究発表数だけでは、その質の評価になるのかと言った見方もあると思われるが、学外での評価を受けた指標の一つである研究発表数は、専攻による特性なども考慮することで本研究科の修了生の質の保証と学位水準の評価の指標の一つになるものと思われる。

FD委員会では、研究科として「どのような学位を出すのか」、「どのような教育プログラムを組むのか」、「どのような人材を入学させるのか」の課題に継続的に取り組むことで、中央教育審議会から示された大学院教育の改善の方向性にも対応できると考えており、今後も修了生の質の保証と学位水準の明確化に貢献できるようにFD活動を実施することが望まれる。

参考資料

理工学研究科博士前期課程 学生による授業評価アンケート（平成23年度・後期）

鹿児島大学大学院理工学研究科では、授業の改善と理解度の向上を目指して、授業を受けた諸君の評価や意見を参考にしたいと思っております。以下の各設問に対して、選択肢の中から一つだけ選び回答用紙の該当する番号欄に○印を記入し、また、記述欄に意見を記入ください。なお、このアンケートは統計的に処理され、個人名が出たりすることはありませんし、成績評価にも関係ありませんので、適切な評価や率直な意見を記入してください。

A（受講態度等について）

設問1 授業にどれだけ出席しましたか。

5. 全て出席 4. 1回欠席 3. 2回欠席 2. 3回欠席 1. 4回以上欠席

設問2 予習と復習は毎週どれくらいしましたか。（レポート作成時間も含みます）

5. 3時間より多く 4. 2～3時間 3. 1～2時間 2. 30分～1時間 1. 30分未満

【自由記述A】その他、受講態度等を含めて感想や授業改善に役立つと思われる意見を回答用紙の自由記述欄に簡潔に書いてください。

B（授業内容等について）

設問3 この授業のシラバス記載内容は受講申請に役立ちましたか。

5. 大いにそう思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全くそう思わない

設問4 授業はほぼ理解でき、学習目標は達成できそうだ。

5. 大いにそう思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全くそう思わない

設問5 授業の内容は自身の研究を進める上で役立つと思う。

5. 大いにそう思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全くそう思わない

設問6 授業の内容は目指す(職業上の)高度専門知識として役立つと思う。

5. 大いにそう思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全くそう思わない

設問7 授業の内容は自身の教養や学力を高める上で役立つと思う。

5. 大いにそう思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全くそう思わない

【自由記述B】授業内容全般について感想や授業改善に役立つと思われる意見を回答用紙の自由記述欄に簡潔に書いてください。特に、理解できない場合にはどこに原因があると考えますか。

C（授業方法等について）

設問8 使用した教科書や教材は授業の理解に役立った。（教材等を使用しなかった場合には記入しなくて良い。）

5. 大いにそう思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全くそう思わない

設問9 レポートなどは授業の理解に役立った。（無かった場合には記入しなくて良い。）

5. 大いにそう思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全くそう思わない

設問10 板書などは明瞭だった。

5. 大いにそう思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全くそう思わない

設問11 教員の熱意が感じられた。

5. 大いにそう思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全くそう思わない

【自由記述C】授業方法全般について感想や授業改善に役立つと思われる意見を回答用紙の自由記述欄に簡潔に書いてください。

医歯学総合 研究科

医歯学総合研究科 FD 活動報告

1. はじめに

医歯学総合研究科 FD 委員会では、昨年度に引き続き、授業評価アンケート、授業公開を実施した。例年行っていた講演会は桜ヶ丘キャンパス部局合同の企画として実施することとし、事務を担当した。

2. 学生による授業評価アンケート

実施方法の概要

現在、授業科目の評価アンケート、演習・実験科目の研究環境と研究指導に関するアンケートを日本語と同じ内容の留学生用の英語のアンケート用紙により実施している。大学院係がアンケート用紙を作成、対象学生に配布、回収して集計業務を行った。集計結果は科目責任者にフィードバックするとともに、本年度は各講義科目評価の一覧も作成し教授会に報告した。

講義科目アンケート

講義を主体とする科目アンケートは授業評価7項目、自己評価2項目、全体評価とし、無記名により各項目について7段階の評定尺度で回答し、さらに自由な意見を記載してもらった。

アンケート結果 (表1)

前期に3科目 24名、後期に8科目 46枚の回答が得られた。

● 授業評価

前期後期ともに1科目あたりの学生数も少ないことも影響し、科目による評価の差が大きい。科目および全体の傾向を結論することは難しいが、ニーズ、有用性、理解、配布資料、質問、発展的学習の全ての項目について概ね良好と判断された。昨年に引き続き教員は資料をよく準備し授業に臨んでいる傾向が示された。しかし、学生の質問に答え支援する項目には1-2の評価が前期4%あり、個々の学生の指導については改善が求められている。

● 自己評価

学習の自己評価は例年回答に学生の差が大きいことが認められていたが、本年は積極的な学習態度については2から7まで回答が分散していた。学生個人に応じた学習を支援し、積極的に取り組めるよう学生に対応することが今後の課題と考えられる。

● 全体評価

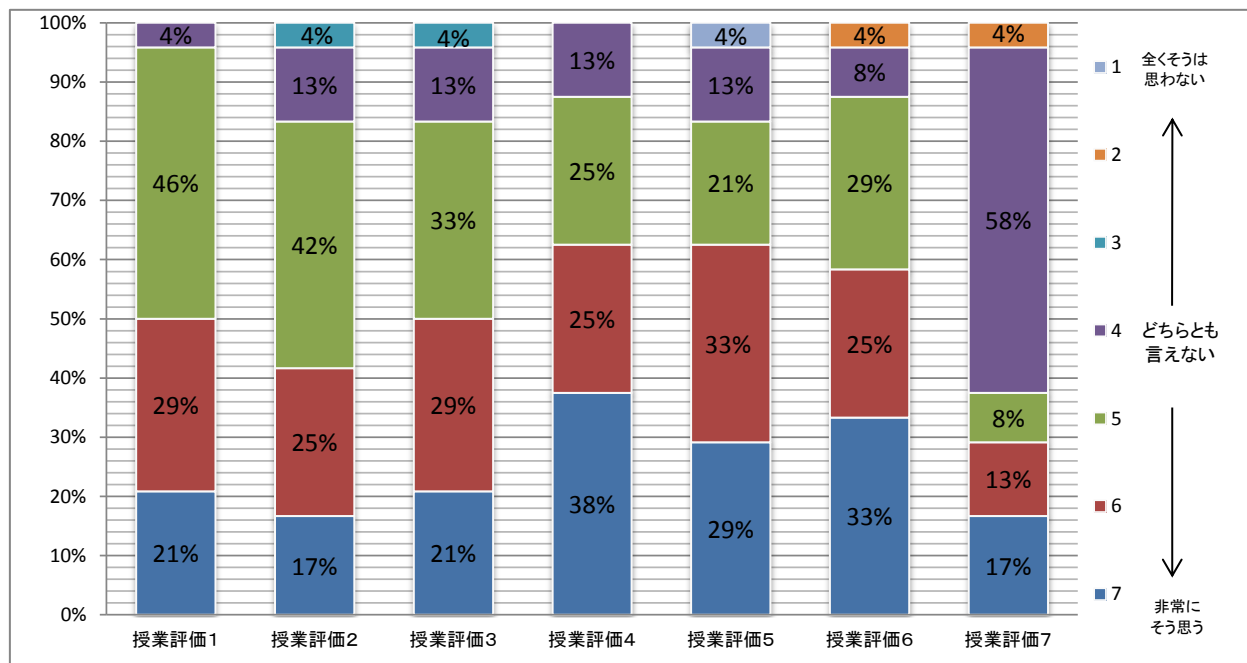
4から7に評価されており、学生の評価は良好であった。「どちらとも言えない」前期17%、後期21%はより良い評価となるよう、科目ごとに改善を検討していただきたい。

医歯学総合研究科 授業に関するアンケート全体集計(2011 前期)

集計3科目 アンケート回収枚数 24枚

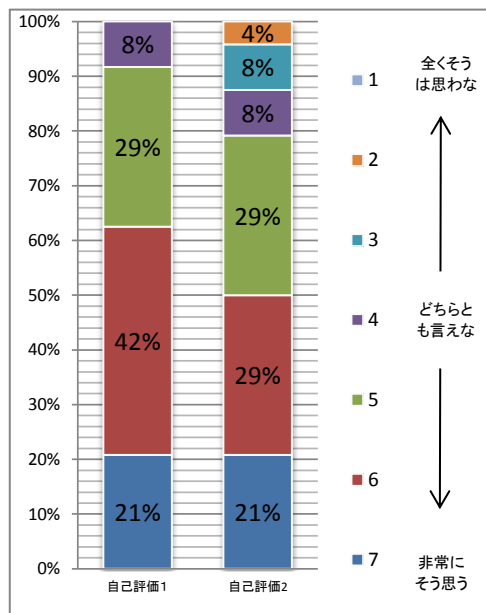
【授業評価】

- 1 この授業はあなたのニーズに合っていましたか
- 2 この授業はあなたの現在、将来の研究に有用な内容でしたか
- 3 講義の内容はよく理解できましたか
- 4 講義内容や配付資料の掲示など、発展的な学習、研究を支援しましたか
- 5 教員はあなたの質問を促し、適切に対応しましたか
- 6 教員は参考資料の掲示など、発展的な学習、研究を支援しましたか
- 7 講義時間は適切でしたか



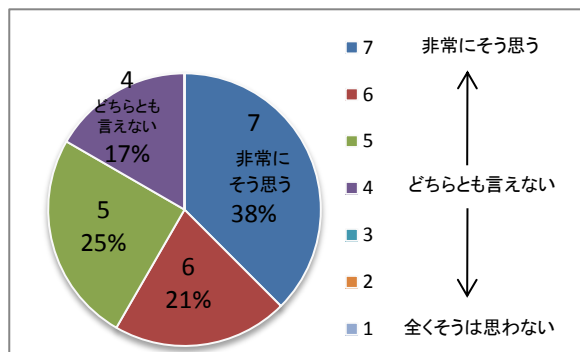
【自己評価】

- 1 この授業で新しい知識や考え方を習得しましたか
- 2 授業日は積極的に参加しましたか(質問、自習など)



【全体評価】

- 1 この授業に満足し、他の学生にも受講を薦めますか

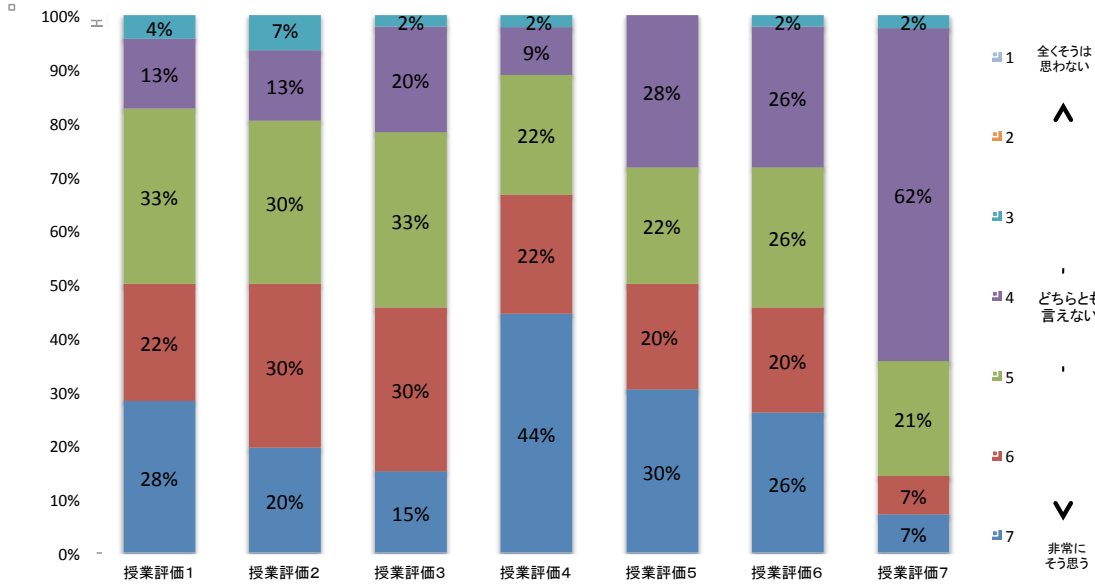


医歯学総合研究科 授業に関するアンケート全体集計(2011 後期)

集計 8科目 アンケート回収枚数 46枚

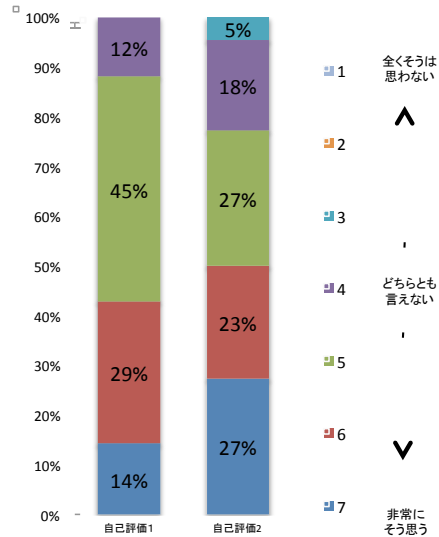
【授業評価】

- 1 この授業はあなたのニーズに合っていましたか
- 2 この授業はあなたの現在、将来の研究に有用な内容でしたか
- 3 講義の内容はよく理解できましたか
- 4 講義内容や配付資料の掲示など、発展的な学習、研究を支援しましたか
- 5 教員はあなたの質問を促し、適切に対応しましたか
- 6 教員は参考資料の掲示など、発展的な学習、研究を支援しましたか
- 7 講義時間は適切でしたか



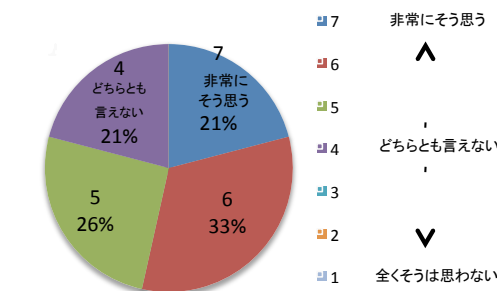
【自己評価】

- 1 この授業で新しい知識や考え方を習得しましたか
- 2 授業日は積極的に参加しましたか(質問、自習など)



【全体評価】

- 1 この授業に満足し、他の学生にも受講を薦めますか



演習、実験科目のアンケート

演習、実験科目についてのアンケートは後期に実施し、無記名で医系歯系の別、入学年度、演習科目の授業形態、内容と指導3項目、実験科目（研究指導）6項目、研究中断の有無について回答を求めた。選択項目以外は、5段階の評定尺度で回答した。

アンケート結果

医系 68 枚、歯系 29 枚の回答が得られた。

医系（表 2A）

入学年度は平成 15 年から平成 23 年にわたり、卒業までの期間が長い傾向が続いている。演習科目の授業形態は講義、ミーティング、消毒会、実験・実習など多岐にわたっている。科目の有用性、教員の対応・支援は 7～8 割が高い評価をしているものの一部で低い評価が認められる。この傾向は実験科目（研究指導）の評価にも見られる。また、7%の学生が個人的な理由以外で研究の中断を経験しており、これらが卒業までの期間が延長しているひとつの原因になっていることが示唆された。自由記載では研究環境には概ね満足が得られているが指導者不足の指摘、研究室間の交流、研究室を超えた指導の希望、また、外国人学生に対する英語による資料の必要性が指摘された。論文へのアクセスが十分とはいえないことは歯系でも指摘されている。

歯系（表 2B）

入学年度は平成 17 年から平成 23 年にわたり、昨年より長期になっている。演習科目の有用性、教員の対応・支援は 7～8 割が良い評価をしており、実験科目（研究指導）もほぼ高い評価となっている。医系と同様に一部の学生が十分は指導や研究環境が不十分と受け止めている事実を改善につなげる必要がある。また、研究の中断は昨年と同様に 7%であった。

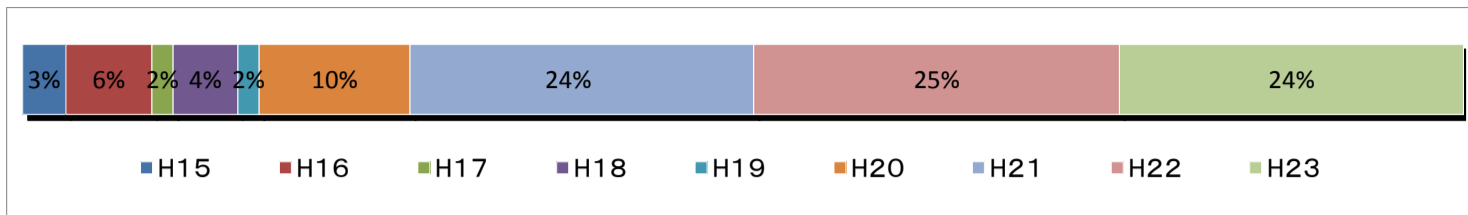
昨年度に引き続き実施したアンケートから、一部ではあるが演習科目では指導・支援が不十分と感じている学生への速やかな対等と、留学生、社会人学生に対する研究環境の整備、電子ジャーナルの整備などが求められている。

医系

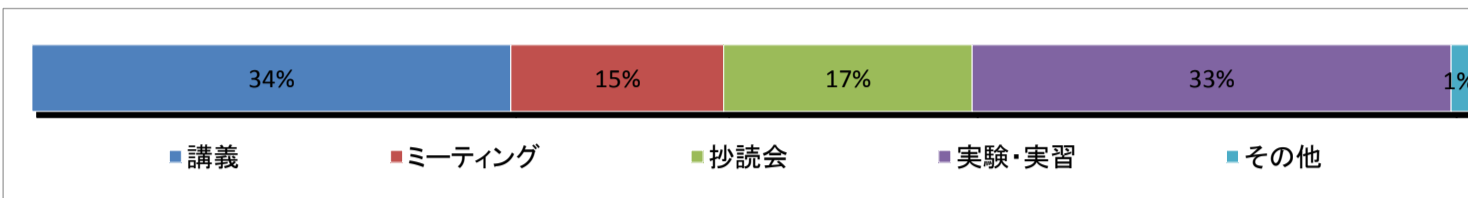
学生による授業評価アンケート(2012年 1月実施)

アンケート回収枚数(医系) 68枚

2 入学年度はいつですか



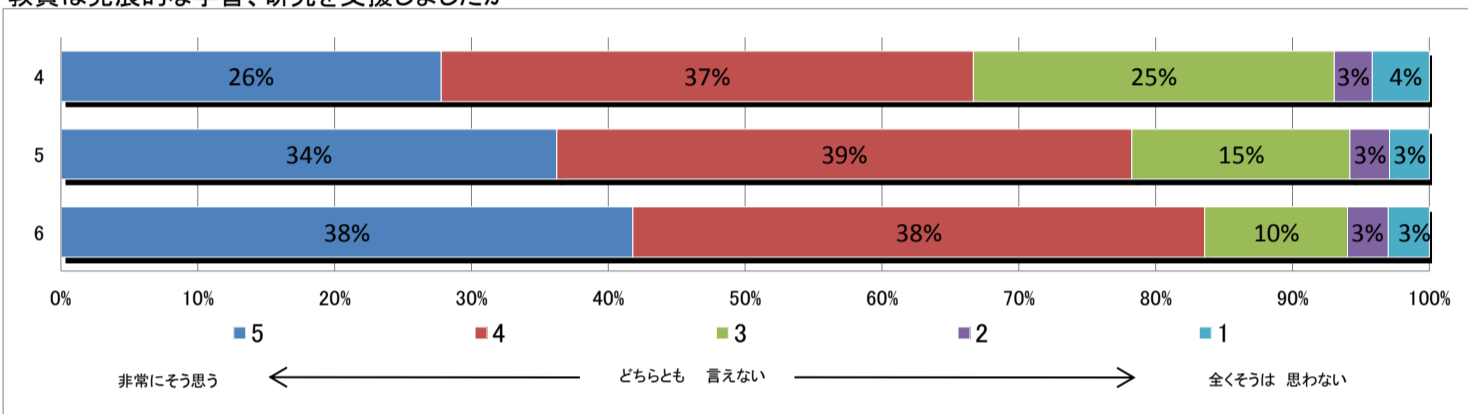
3 あなたが受講している授業科目の授業形態は、次のうちのどれですか(複数回答可)



4 あなたが受講している授業科目はあなたの研究に有用な内容でしたか

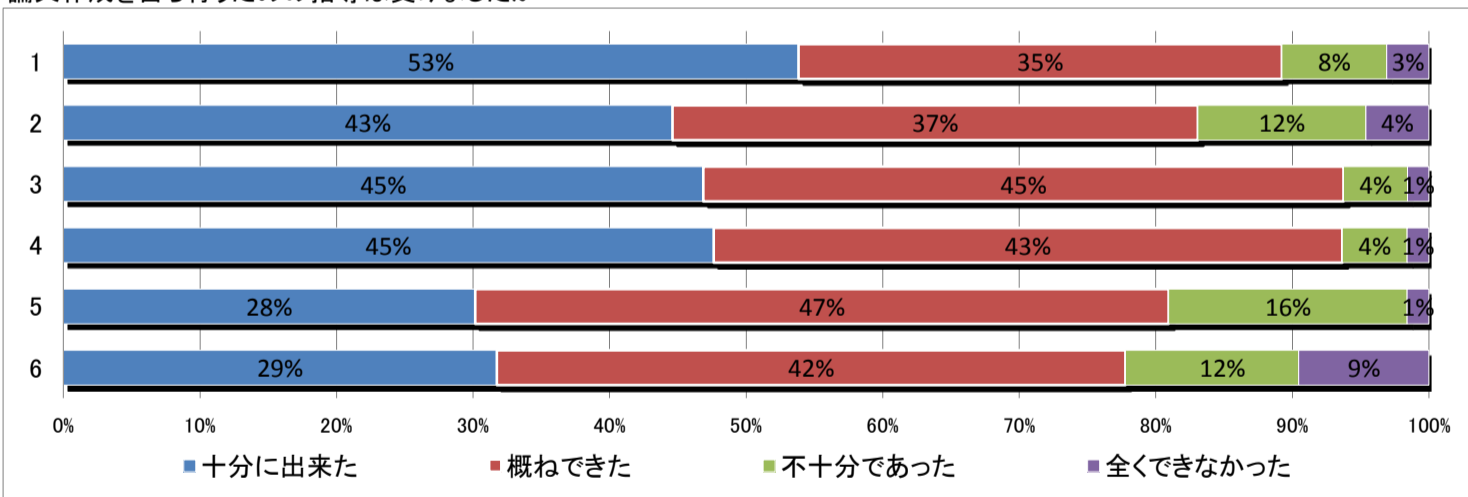
5 教員はあなたの質問を促し、適切に対応しましたか

6 教員は発展的な学習、研究を支援しましたか

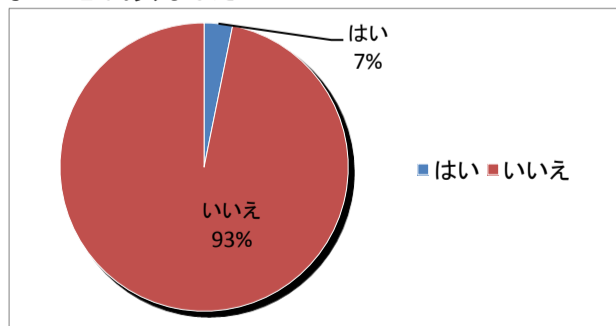


実験科目(研究指導)

- 1 直面している問題を解決するために常に教員と討議し、指導を受けることはできましたか
- 2 研究の遂行と発表に関する倫理的対応の指導を受けましたか
- 3 論文や参考資料を用いる環境は整備されていましたか
- 4 効率的、効果的な研究を用いる環境は整備されていましたか
- 5 研究開発に必要な考え方を修得できましたか
- 6 論文作成を自ら行うための指導を受けましたか



7 個人的な理由以外で研究を長期にわたって中断せざるを得ないことはありましたか



自由記載

特に良かった点をお聞かせください

- 実習ありの授業
- 多くの大学院生(同教室内)おり、助け合うことができた。
- 日常業務が忙しいのでメール講義は大変有難かった。
- 研究・学会発表へ進んで行えた点
- 学会発表から英語論文作成を速やかにする点
- 教員の指導がいきわたっており、充実した研究が行えました。
- 十分に研究に打ち込み、勉強できる環境であるのがよい。(講義が夕方からというのも時間帯がよい)
- わからないところを詳しく教えていただけて良かったです。
- 豊富なチョイスが可能な点
- 実験に使用する備品をすぐに取り寄せてもらえる。
- 講義がわかりやすく、研究を理解するのに非常に役に立った。
- やりたいと主張した実験、研究は前向きに尊重し、計画して施行して下さる。
- 指導教官に多くの面で指導して頂き、入学前とは考え方が変わることができた。
- 実験の流れ、援助がスムーズである
- 私は実験についての私自身のアイデアを出すことができました、そして、私は異なる実験的な技術をためすことができました。
- その病気(例えば脳腫瘍)を引き起こす環境要因としての疫学の影響に関する研究は、それを防ぎ、分配することによりよい方法です。
- 自由に研究できる場所があり、同じ研究の仲間もすぐに助けてくれてよい経験ができています。
- 十分な材料、設備がほぼ整っており、教授と研究所のメンバーはよく協力していただけ実験を支援していただいております。

改善すべき点をお聞かせください

- 講義案内メールの配信があれば助かります
- 論文を得るための資金があったらいいと思います。実費ではお金がかかりすぎます。
- 学会発表から英語論文作成を速やかにする点
- 実習講義で担当教官へ受講の旨のメールを送ってもレスポンスがない科目がある
- 通年の受講申込ではなく、後期は後期講義の受講希望を改めて出せるようにした方がよい。
- 必要な論文で入手が難しいものがあったので、所蔵する論文の種類を増やして欲しい。(電子ジャーナル)
- 研究室同士の交流が少ない、共同研究は鹿大には不可欠です。
- 実際の地域で実施することが必要
- 研究室で経験の長い方がいなくなり、実験の大部分の技術を独学しなければなりません。他の研究室から提案を得られるようにしてほしい。
- より多くの研究所経験
- より多く教授とディスカッションする場を設けて欲しい
- より多くの論文を読みたい
- とくどき言語の問題で理解が難しくなることがあります。英語でのマニュアル等があれば有難いです。
- 英語の講義科目をもっと増やして欲しい。研究分野をすべてカバーできない。

その他、自由に感想をお書きください

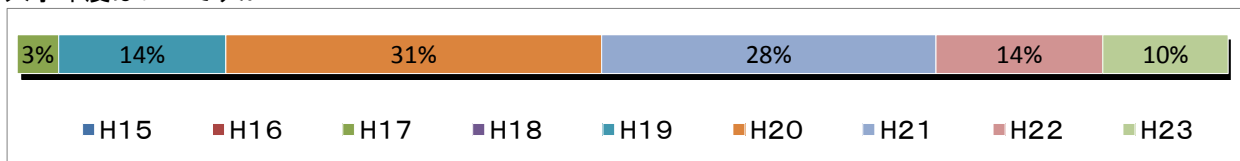
- 時間の自由がききにくい社会人大学院生に対する補習や、集中講義等の充実を願います
- 指導教官に恵まれず残念であった
- 年度の終わりには、取得済みの単位を公表して欲しい(成績は必要だが、単位が取れているのかいないのかを知っておきたい)
- 単位のしほりをゆるくしてほしいです。修士の授業でも自分に必要と思うものがありました。
- 英語で説明がある留学生が共同で使用する機械を設置して欲しい
- 実験技術を実施するに当たってもっと明確組み立てられたトレーニングを構築してください。
- すばらしい研究の場を提供していただけてとてもよかったです。

歯 系

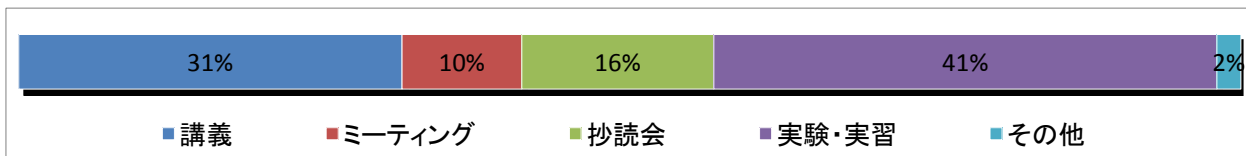
学生による授業評価アンケート(2012年 1月実施)

アンケート回収枚数(歯系) 29枚

2 入学年度はいつですか



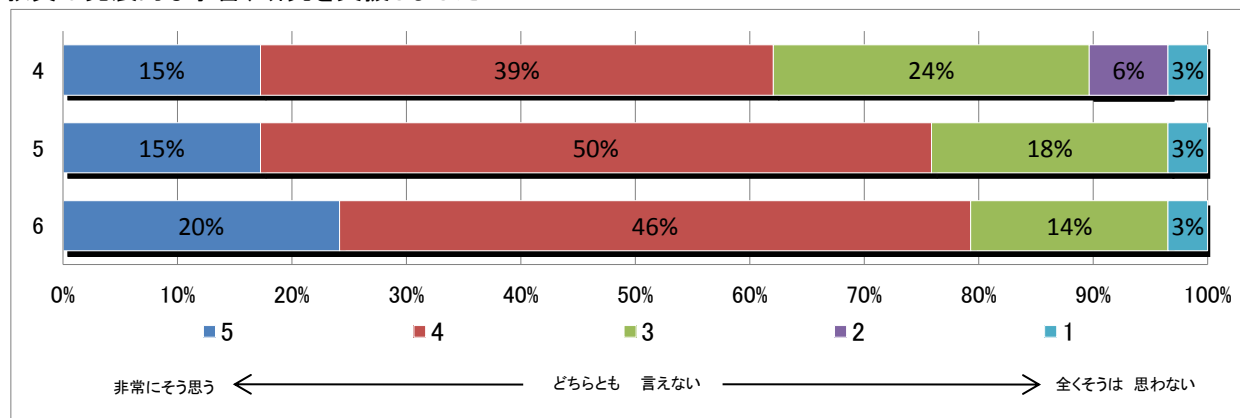
3 あなたが受講している授業科目の授業形態は、次のうちのどれですか(複数回答可)



4 あなたが受講している授業科目はあなたの研究に有用な内容でしたか

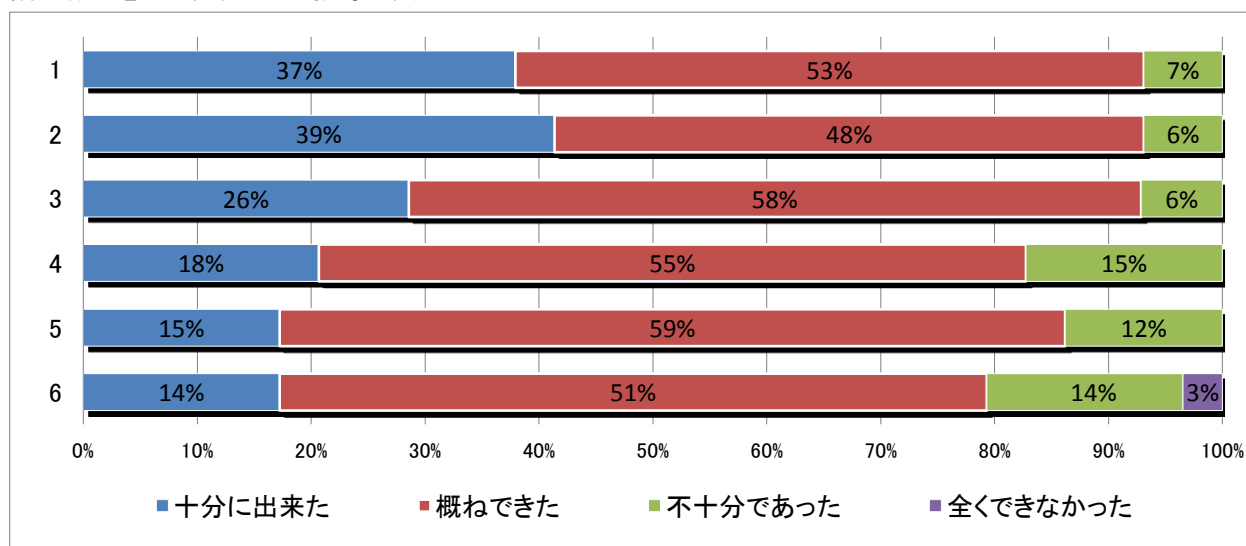
5 教員はあなたの質問を促し、適切に対応しましたか

6 教員は発展的な学習、研究を支援しましたか

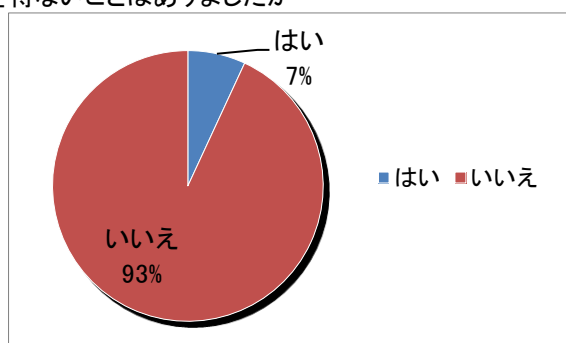


実験科目(研究指導)

- 1 直面している問題を解決するために常に教員と討議し、指導を受けることができましたか
- 2 研究の遂行と発表に関する倫理的対応の指導を受けましたか
- 3 論文や参考資料を用いる環境は整備されていましたか
- 4 効率的、効果的な研究を用いる環境は整備されていましたか
- 5 研究開発に必要な考え方を修得できましたか
- 6 論文作成を自ら行うための指導は受けましたか



7 個人的な理由以外で研究を長期にわたって中断せざるを得ないことはありましたか



自由記載

特に良かった点をお聞かせください

教員の研究・教育に対する熱意を強く感じた

自分の研究における必要な機器、道具などの環境を整えて頂いた。

医学研究講義は様々な分野の講義が聞けるのでとても良いと思う。

環境・資料が充実しているところ

改善すべき点をお聞かせください

pubmed で本文の PDF に直接（ネットで）アクセスできないジャーナルがあった。

実際に講義が全く行われない科目がある。

nature immunology や Reviews を学内で読めるようになればと思います。主要誌がすぐに手に入らないのはかなりつらいです。

大学内 LAN 環境

その他、自由に感想をお書きください

まだまだ1年目なので色々とわからないことだらけです。

3. 授業公開

本研究科の授業公開の主旨を「優れた授業を公開し、参観をした教員が授業方法を学ぶ機会を提供する」とし、昨年度の学生による授業評価結果を参考に対象科目を選考した。後期開講科目のうち、各講師から承諾を得ることのできた博士課程医系1科目2回、修士課程1科目、計3回の授業を公開授業として実施した。

臨床薬剤学概論（修士科目） 武田 泰生（薬物動態制御学分野 准教授）

平成24年1月17日（火） 5限目 テーマ：薬物血中動態の概説 参観者1名

医歯学教育学入門（博士科目） 田川 まさみ（医歯学教育開発センター、医歯学教育学講座 教授）

平成24年1月17日（火） 6限目 テーマ：講義法（1）参観者3名

平成24年1月31日（火） 6限目 テーマ：試験の開発と評価（1）参観者3名

いずれの科目の授業参加者からも今回の授業内容が勉強になったとの感想が報告された。また、授業を公開した教員からは、授業公開が自分の講義の改善に役立つということ、また、医歯学総合研究科教員の状況からは多くの参加が望めない状況も理解でき、少数の参加者であっても実施することが有用であろうとの意見であった。

4. おわりに

平成23年度は授業評価アンケートの集計方法とフィードバックを検討した。授業公開では参加者から授業公開の有用性が指摘された。今回は桜ヶ丘キャンパス合同FDも実施し、少しずつではあるがFD活動の改善を図ることができた。医歯学総合研究科が直面する問題である学生の確保と研究者育成を、教育能力向上と教育評価の観点からFD委員会が支援していくことが重要であると考えている。

桜ヶ丘地区合同 FD 活動報告

1. はじめに

平成 23 年度は初めての試みとして桜ヶ丘地区の医歯学総合研究科 FD 委員会、医学部 FD 委員会、歯学部 FD 委員会が合同で行う FD 活動を計画し、医歯学総合研究科、医学部、歯学部、保健学研究科、附属病院の教職員を対象とした講習会、講演会を実施した。医療者教育、研修に共通する教育技能を習得し、医療者に求められるチーム医療教育、地域医療教育について討議をすることができた。医歯学総合研究科 FD 委員会を担当している学務課大学院係が事務を担当した。

2. 講習会

(1) 医療者のコミュニケーション教育に関する講習会「なぜ学生・研修医と話が通じないのか？」

実施日時：平成 23 年 10 月 17 日 17:00～19:00

場所： 鶴陵会館中ホール

講師： 杉本 なおみ

慶応義塾大学看護医療学部 教授

参加者： 29名 医学部一看護師8名、
歯学部一歯科医師6名、
医歯学総合研究科一医師5名、歯科医師2名、その他3名
附属病院一医師1名、歯科医師3名

概要： 従来の「接遇講習」などとは異なり、社会科学のエビデンスに基づいて医療コミュニケーションを考える参加型講習を通じ、学習者（学生・研修医）が指導者（教員・指導医）の指示をうまく理解できなかったり、不適切な返答をしたりするには、様々なノイズが発生するためであり、コミュニケーションの創出型、紋切り型、直情径行型の3つのタイプに応じた指示の仕方によって回避することを学んだ。

実施後アンケート：回答28名 回収率96.6%

1. ニーズに合っていたか 6.4/7段階評価
2. 講師の指導 6.8/7段階評価
3. 時間は 3.8/7段階評価 (1=非常に短い 4=適当な時間 7=非常に長い)
4. 難易度 4.0/7段階評価 (1=非常に難しい 4=適当な時間 7=非常に易しい)
5. 積極的な参加 5.8/7段階評価
6. 新たな知識・技能の修得 6.0/7段階評価

自由記載では楽しく参加でき、より多くの教員、学生もこのようなワークショップを経験すべきとの意見がよせられた。

(2) 指導医・指導者講習会 プログラム1 「桜ヶ丘キャンパス学習支援システムの活用」

実施日時：平成 24 年 3 月 4 日 14:30～17:00

場所： 共通教育棟 インテリジェント講義室

講師： 村永 文学 (附属病院医療情報部)

高村 昭輝 (金沢城北病院 小児科、地域医学教育センター)

藤野 敏則 (保健学科看護学専攻 母性・小児看護学)

参加者： 17名 医学部一3名、歯学部一2名、医歯学総合研究科一5名、附属病院一5名、他2名

概要： 桜ヶ丘キャンパスでは、e-Learningシステムとして、VideoOnDemandで研修が受けられるMediaDEPOシステム、教員と学生が教材を共有し小テスト等を実施可能なMoodleシステム、学生の学習履歴書ともいえるe-portfolioシステム、遠隔医療相談を実現するITKarteシステムという4つの教育システムを運用しており、今回は、特にMoodleシステムに焦点をあて、教員がオンラインにて教材の提供・レポートの収集・小テストの実施等、集合型対面教育の支援に役立つ機能を中心に、コース運営の実習を行った。

大学教育推進プログラム「地域医療を担うプロフェッショナル教育」事業との共催として実施した。

実施後アンケート：回答17名 回収率100%

1. ニーズに合っていたか 6.0/7段階評価
2. 有用性

桜ヶ丘Moodle	6.3/7段階評価
医学部ポートフォリオ	5.9/7段階評価
ITKarte	5.1/7段階評価
2. 講師の指導 6.5/7段階評価
3. 時間は 4.5/7段階評価 (1=非常に短い 4=適当な時間 7=非常に長い)
4. 難易度 4.3/7段階評価 (1=非常に難しい 4=適当な時間 7=非常に易しい)
5. 積極的な参加 4.8/7段階評価
6. 新たな知識・技能の修得 6.1/7段階評価

自由記載ではMoodleが実際に使えるようになったとの意見が多数有り、定期的な講習会の開催が希望された。

3. 講演会

テーマ： 筑波大学医学類における専門職連携教育・地域医療教育プログラム

実施日時 平成23年12月9日 17:00~19:00

場所： 鶴陵会館中ホール

講師： 前野 貴美

筑波大学医学群医学教育企画評価室 (PCME) 筑波大学大学院地域医療教育学分野 講師

参加者： 33名

所属部局	職名	専門職(資格)	参加者数
医学部	教員	医師	4
		看護師	5
		助産師	1
	大学院・学部生	なし	2
	その他		1
歯学部	教員	歯科医師	1
	医療専門職員	なし	1
医歯学総合研究科	教員	医師	4
		なし	1
	医療系職員	その他	3
附属病院	教員	歯科医師	3

概要： 筑波大学医学群医学類では平成16年度より新カリキュラムを導入し、専門職連携教育・地域医療教育に力を注いでいる。「医療概論」では、チーム医療や地域医療など、臓器別の枠組みでは十分に対応できない、医療人

として必要な領域について体系的に学ぶことを目的とし、1年次から5年次まで継続的に繰り返し学ぶプログラムとなっている。専門職連携教育は、医学群を構成する医学類・看護学類・医療科学類の合同プログラムである「ケア・コロキウム（チームワーク演習）」を中心に構成され、平成19年度の特徴ある大学教育プログラム（文科省）にも採択され、実績をあげてきた。本講演では、これらの専門職連携教育プログラム、地域医療教育プログラムについて、筑波大学での取り組みを紹介していただき、その後参加者とカリキュラム導入のための準備、運営などについて活発な討議が行われた。

実施後アンケート：回答26名 回収率78.8%

1. ニーズに合っていたか 5.6/7段階評価
2. 時間は 4.3/7段階評価（4＝適当な時間）
3. 新たな知識・技能の修得 5.8/7段階評価

自由記載では魅力的な教育プログラムを知ることができたとの意見が多数あったが、本学で導入する場合の困難さを指摘する意見も見られた。

4. おわりに

3つの活動はいずれも参加者の評価は高かった。桜ヶ丘キャンパスの教職員が郡元キャンパスでの全学のFD活動に参加することは容易ではなく、また医療者教育という特殊性もあり、桜ヶ丘キャンパスで教員、医療者のニーズに応えるFDを実施する意義は大きい。いかに多忙で時間を拘束される教職員が興味をもって参加することのできる事業を計画することができるか、検討していく必要がある。

保健学研究科

平成 23 年度 保健学研究科 FD 活動報告

1. はじめに

平成 23 年度の保健学研究科 FD 委員会の活動として、①学生による授業評価、②教員による修士論文発表の評価、③TA アンケート調査を実施した。それぞれの活動について以下に概略を述べる。

2. 学生による授業評価

平成 23 年度は、12 科目について学生による授業評価を実施した。評価方法は、アンケート調査であり、調査票には以下に示す質問項目と授業についての意見を述べる自由記載欄を設定した。質問項目 5 は、「0 回」「1・2 回」「3・4 回」「5 回以上」の選択肢から回答してもらい、その他の質問項目に対しては、「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」「どちらかと言えばそう思わない」「そうは思わない」「判らない」の選択肢から選び、回答してもらった。

あなた自身について

- 1 この授業のシラバスを前もって読みましたか
- 2 この授業の予習又は復習をしましたか
- 3 この授業科目に関連する本（参考書や文献等）を読みましたか
- 4 授業中にノートをとりましたか
- 5 この授業を何回位欠席しましたか

授業に対する評価

- 6 授業はシラバスに沿った内容でしたか
- 7 配布資料は適切であり、授業に役立ちましたか
- 8 授業内容に興味を持ってましたか
- 9 授業の進め方は適切でしたか
- 10 教員は授業に対する熱意がありましたか
- 11 授業中の話し方、声の大きさ、明瞭さは良かったですか
- 12 学生の質問に対して適切な対応がなされましたか
- 13 授業を受講して、知力・学力の向上に役立ちましたか
- 14 この授業は、全体的に満足できるものでしたか

アンケート調査の結果を以下の表に示す。この表では回答を、1:「そう思う」、2:「どちらかと言えばそう思う」、3:「どちらかと言えばそう思わない」、4:「そうは思わない」、5:「判らない」（質問項目 5 のみ、1:「0 回」、2:「1・2 回」、3:「3・4 回」、3:「5 回以上」）として表している。また、オムニバス方式で開講されている科目は、担当教官ごとに評価を行ったため分析対象とした調査票の数は、241 枚となっている（質問項目によっては、未記入の場合もあり、合計がこの数に満たないものもある）。

「授業に対する評価」では、「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」と回答している者が多く、概ね良好な評価が得られたが、「あなた自身について」の回答結果からは、シラバスの利用、予習・復習、さらに関連する文献等での学習の不足がうかがわれた。

これらの学生による授業評価の結果は、当該科目の調査票と共に担当教員にフィードバックした。

平成23年度 学生による授業評価の結果

回答では、1:「そう思う」、2:「どちらかと言えばそう思う」、3:「どちらかと言えばそう思わない」、4:「そうは思わない」、5:「判らない」(質問項目5のみ、1:「0回」、2:「1・2回」、3:「3・4回」、3:「5回以上」)を表している。

質問項目	1 この授業のシラバスを前もって読みましたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	148	51	9	24	9
%	61.4	21.2	3.7	10.0	3.7
質問項目	2 この授業の予習又は復習をしましたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	51	103	57	21	9
%	21.2	42.7	23.7	8.7	3.7
質問項目	3 この授業科目に関連する本(参考書や文献等)を読みましたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	81	97	27	27	9
%	33.6	40.2	11.2	11.2	3.7
質問項目	4 授業中にノートをとりましたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	169	57	9	0	6
%	70.1	23.7	3.7	0	2.5
質問項目	5 この授業を何回位欠席しましたか				
回 答	1	2	3	4	-
人 数	193	42	3	3	-
%	80	17.4	1.3	1.3	-
質問項目	6 授業はシラバスに沿った内容でしたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	163	60	0	0	18
%	67.6	24.9	0	0	7.5

質問項目	7 配布資料は適切であり、授業に役立ちましたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	166	60	6	3	6
%	68.9	24.9	2.5	1.3	2.5
質問項目	8 授業内容に興味が持てましたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	160	69	9	3	0
%	66.4	28.6	3.7	1.3	0
質問項目	9 授業の進め方は適切でしたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	163	69	3	0	6
%	67.6	28.6	1.3	0	2.5
質問項目	10 教員は授業に対する熱意がありましたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	178	54	3	0	6
%	73.9	22.4	1.3	0	2.5
質問項目	11 授業中の話し方、声の大きさ、明瞭さは良かったですか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	178	54	6	0	3
%	73.9	22.4	2.5	0	1.3
質問項目	12 学生の質問に対して適切な対応がなされましたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	181	46	6	0	9
%	75.1	19.1	2.5	0	3.7
質問項目	13 授業を受講して、知力・学力の向上に役立ちましたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	160	72	3	0	6
%	66.4	29.9	1.3	0	2.5
質問項目	14 この授業は、全体的に満足できるものでしたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	157	72	3	0	9
%	65.1	29.9	1.3	0	3.7

3. TA アンケートの評価

保健学研究科ではTAの実施については、これまで狭義の範囲でしか活用されていなかった。実際に特定の教員の卒業研究のみが主であり、これでは一部の教員のみでしか活用する方法がなく、TAの教育面からも狭義な目的となっていることが問題であった。そこで、授業における教育支援者としての在り方を検討する資料とするために、アンケート調査を実施した（アンケート用紙下記参照）。

平成23年度は、TAに採用された学生のうち回答の得られた、前期6名、後期6名を対象として分析した。調査票には以下に示す質問項目と授業についての意見を述べる自由記載欄を設定した。質問項目1～7は、選択肢から回答してもらい、「大いにした」「かなりした」「時々した」「あまりしなかった」「全くしなかった」の選択肢から選び、回答してもらった。

平成23年度 鹿児島大学医学部保健学研究科 TA アンケート用紙

このアンケートは、授業における教育支援者としてのTAのあり方を検討するための資料とすることを目的としています。大学院生のTA経験を今後へ活かすために率直な感想や意見を書いてください。

*記入方法：設問1～8は該当する数字をマルで囲んでください（該当事項があれば記述）。

1. 授業に際して、どの程度の事前準備等を行いましたか。
①大いにした ②かなりした ③時々した ④あまりしなかった ⑤全くしなかった
2. TA 期間中、担当科目について教員との打ち合わせや指導の機会がありましたか。
①常時あった ②かなりあった ③時々あった ④あまりなかった ⑤全くなかった
3. 教員からTAの役割は明確に伝えられていましたか。
①明確に伝えられていた ②簡単にあった ③幾らかあった ④あまりなかった ⑤全くなかった
4. 対象となる学生との関係は良かったですか。
①大変よかった ②よかった ③普通 ④あまりよくなかった ⑤全くよくなかった
5. TA をやるとどの程度自分のメリットになりましたか。（ある場合は、具体的にどんな点かを記述）
①大いにあった ②かなりあった ③幾らかあった ④あまりなかった ⑤全くなかった
6. TA をやって、困ったことはありましたか。（ある場合は、具体的にどんな点かを記述）
①大いにあった ②かなりあった ③幾らかあった ④あまりなかった ⑤全くなかった
7. TA になって負担を感じたことはありますか。（ある場合は具体的にどんな点かを記述）
①大いにあった ②かなりあった ③時々あった ④あまりなかった ⑤全くなかった
8. 今回担当した以外の科目（演習・実習）で、担当してみたい科目（演習・実習）がありますか。
①はい ②いいえ 担当してみたい科目；
その科目（演習・実習）を、担当する教員からTAの依頼があれば引き受けられますか。
①はい ②いいえ 理由；
9. 科目（演習・実習）の担当を引き受けるにあたり何か希望がありますか。例えば、引き受けられる科目の希望（時間・時期・科目）等、事前に調査して欲しいことがあったらお聞かせください。
10. TA の経験を有意義なものとするために、何か意見・提言があればお願いします。

アンケート調査の結果を以下の表に示す。担当科目は、全学生が「卒業研究」であり、「TAに対する評価」では、概ね良好な評価が得られた。しかし、「卒業研究」しか活用されていないため、授業における教育支援者としてのTAの教育の側面から改善の必要がある。

平成23年度前・後期 TA アンケートの結果

質問項目	1 授業に際して、どの程度の事前準備等をしましたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	0	4	7	1	0
%	0	34	58	8	0
質問項目	2 TA 期間中、担当科目について教員との打ち合わせや指導の機会がありましたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	2	7	3	0	0
%	16	58	26	0	0
質問項目	3 教員からTAの役割は明確に伝えられていましたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	5	5	2	0	0
%	42	42	16	0	0
質問項目	4 対象となる学生との関係は良かったですか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	1	11	0	0	0
%	8	92	0	0	0
質問項目	5 TA をやってどの程度自分のメリットになりましたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	2	7	3	0	0
%	16	58	26	0	0
質問項目	6 TA をやって、困ったことはありましたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	0	0	8	3	1
%	0	0	66	26	8
質問項目	7 TA になって負担を感じたことはありますか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	0	0	2	8	2
%	0	0	16	68	16

質問項目	8-1 今回担当した以外の科目（演習・実習）で、担当してみたい科目がありますか				
回 答	1	2	-	-	-
人 数	2	10	-	-	-
%	16	84	-	-	-
質問項目	8-2 その科目（演習・実習）を、担当する教員からTAの依頼があれば引き受けますか				
回 答	1	2	-	-	-
度 数	8	4	-	-	-
%	66	34	-	-	-

3. 教員による修士論文内容の評価

修士論文発表会において発表内容について教員が評価を行った。対象となった学生は、15名であった。評価項目は、「発表の態度・仕方はよかったか」「発表の内容は良かったか」「スライド等はよく整理され分かりやすかったか」「質問に対して的確に答えていたか」「独自の発想で研究したことが感じられたか」であり、秀（5点）・優（4点）・良（3点）・可（2点）の4段階で評価した。結果は、各指導教員にフィードバックした。

4. TA アンケートの結果

アンケート結果により本保健学科として、教育上緊急に改善が必要な点は見られなかった。毎年同じ内容で継続して調査を行うことにより複数年間の各項目の動向を把握できるため、今後も調査を継続し分析結果を教育改善に活かしていきたい。次年度は、特に本来のTA教育の視点から、授業における教育支援者としての在り方を検討してTA改善につなげたい。

5. おわりに

データ上も自由記述コメント上も、総合的に極めて高い満足度を得ていた。しかし、学生はそれぞれの授業について肯定的・否定的両面から様々なコメントを寄せているので、各教員は各コメントを真摯に読み、授業改善に活かしていくことが重要であると思う。今年度不適切と思われたアンケート調査項目や調査方法については、今後、検討していきたい。

(文責 緒方重光)

司法政策 研究科

大学院司法政策研究科 平成 23 年度 F D 活動報告 (概要)

本年度の F D 活動は、前年度と同様に、「授業と学修の協働改善」というスローガンを掲げて取り組んだ。F D 活動を通して、授業内容の改善とともに学生の学修の改善をも促して教員・学生ともにレベルアップを図ることを狙いとした。本年度の具体的な取組は以下の通りである。

1) 『平成 23 年度前期 F D 報告書』の電子版 (34 頁) 発行

本年度は、P D C A サイクル、四半期ごとの教育活動の点検を意識して、前期終了時点で、『F D 報告書』を作成した。平成 23 年 9 月 30 日、研究科 H P 上に公開した。

2) 授業参観

授業内容の改善のために、他の教員が担当する授業を参観する活動に取り組んだ。各教員は毎学期 1 回以上の授業参観をすることが義務づけられている。公開授業として実施することもあるが、参観者の任意の時間帯に授業を参観してもよいことになっている。授業を参観した際は、授業参観報告書を提出することとなっており、毎学期、授業参観報告書は 1 本にまとめた上で全教員に配布される。平成 23 年度前期は 22 通、後期は 11 通の授業参観報告書が提出されている。報告書の一部は、『平成 23 年度前期 F D 報告書』に掲載し、外部に公表している。

公開授業と授業参観は、公法系、民事系、刑事系、実務系、基礎法・隣接科目系から、各 1 科目程度を公開授業対象科目として指定し、専任教員全員が授業参観を行った。公開授業はビデオに収録され、欠席教員にも DVD に収録されたものが配布され、それを視聴の上で、後日、定例の F D 懇談会のさいに、当該公開授業についての授業研究が実施され、担当教員の所感、他の教員からのコメントを素材に、授業改善のための検討が行われた。

平成 23 年度は、教育連携制度を活用して九州大学へ 4 名の教員が授業参観に出かけた
授業ビデオ視聴によるものを含めて、すべての教員が授業参観に参加した。

3) 授業アンケート

各学期とも、『学生による授業評価アンケート』（中間、最終）2 回、試験問題・出題趣旨等に対する『学生による評価アンケート』1 回、年間 6 回のアンケートを実施した。アンケート結果は、学生に対し電子シラバス上で開示した。前期に関しては、匿名化した上で、ニューズレター 21 号、23 号及び『平成 23 年度前期 F D 報告書』に掲載した。いずれも研究科の H P 上に掲載しているから、外部から閲覧できるようにした。

F D 活動全般の強化一環として、授業アンケートの実施方法やその利用方法について再検討を行い、インターネットを利用した方法ではなく、あらためて個別授業で配布することとした。それにより、回答率の改善がなされ、よりよい授業をするための学生との双方向のやり取りの一部として有効に機能するようになった。

平成 23 年度の授業アンケート項目は、平成 21 年度後期から、授業内容の改善をより一層進めるため、法律基本科目や新司法試験の選択科目になっている授業科目のアンケート内容を抜本的に変更したものを継続して使用した。新たな内容のアンケートでは、法科大学院教育の基本に立ち戻り、法曹が具備すべき能力の涵養をふまえた教育をしているかどうか、という点に焦点を絞ることとした。特に法律基本科目の授業では、司法試験で問われる法曹に必要な能力を涵養するために、アンケート

では、あらためてその点を意識することとした。

成績評価の客観性・厳格性を確保するため、「成績評価総括」（試験問題・出題趣旨・採点のポイント（解答例を含む）、成績分布表）を学生に開示し、かつ試験答案の複本を学生に返還した。なお、法律基本科目に関しては、厳格な成績評価を担保するため、「定期試験点数分布表」・「成績評価の根拠資料」を作成した。

「学期末試験、出題の趣旨／採点のポイント」のアンケートを実施した。ただし、このアンケートの回収率は低く、平成 23 年度前期の回収率は 15.24%であった

「授業アンケート」の結果をうけて、各教員は「所感と対応」を提出した。

4) 授業映像配信システム

各学期 1 回の授業について映像収録を実施し、ビデオ映像の配信サーバーにビデオをアップロードして、視聴できるようにして、FD 活動に活用した。

アップロードされている映像は、教室の背後からの教員のパフォーマンスの映像だけではなく、前方から学生のパフォーマンスを収録し、その二つを編集したものである。この二つの映像によって、授業全体の緊張感、授業そのものの進行の工夫の効果を把握することができる。これを用いて、より多くの授業の事情を教員組織全体として把握し、授業改善に役立てた。

5) ニュース・レター

鹿児島大学法科大学院ニュース・レター「KULS ニュース」は、A3 サイズの用紙に両面刷りで印刷され、第 1 号発行以降、毎月 1 号のペースで発行されており、平成 23 年度は、第 19 号（平成 23 年 4 月 11 日発行）から第 32 号（平成 24 年 3 月 1 日発行）まで発行された。

ニュース・レターの内容は、多岐に渡るものであるが、基本的には在学院生に向けた情報発信が主要目的であるが故、主に新司法試験論文式試験・各分野の解説（新司法試験関連）、新カリキュラムや各種制度のアナウンス、講演会等の行事報告、FD 活動報告、各種コラム等となっている。

院生各自のデスクへ一部ずつ直接配布される他、法科大学院教員、法文学部法政策学科教員へも配布されている。また、法文学部事務局各係にも回覧という形で配布を行っている。それ以外にも、希望者は総合教育研究棟 7 階、司法政策研究センターにて配布を受けることができる。

6) FD 委員会、FD 懇談会の実施

定例教授会の直後に開催される FD 懇談会の議事録作成は、事務補佐（非常勤）によって作成した。当研究科では、原則として FD 委員会を毎月第 1 火曜日 16 時 30 分時から、また FD 懇談会を毎月第 2 水曜日の教授会終了後に実施した。

FD 懇談会は、定例教授会の直後に開催されることとなっており、4 年目に入った今年度は PDCA のサイクルを意識し、一層充実した活動となるよう工夫した。FD 委員会や FD 懇談会の成果は、教務委員会のカリキュラム運営に反映させることで、授業全体に体系的な改善を促した。

FD 委員会の活動を中心として、教学上の運営を担う教務委員会、研究科の意思決定機関である教授会といったそれぞれの活動が、FD 懇談会をフォーラムとする教員間の緊密なコミュニケーションを基盤とする有機的な活動を通じて、自己改革への積極的な姿勢が保つことが図られた。

臨床心理学 研究科

臨床心理学研究科 FD 活動報告

1. はじめに

臨床心理学研究科 FD 委員会では、平成 23 年度 FD 活動として学生による授業評価アンケート、GPA による厳格な成績評価、ならびに教員による授業公開・授業参観などを実施したので、その概要を以下に報告する。

2. 学生による授業評価の実施

(1) 実施時期

23 年度前期第 1 回目が 6 月 13 日（月）～17 日（金）、第 2 回目が 7 月 25 日（月）～29 日（金）、後期第 1 回目が 11 月 21 日（月）～25 日（金）、第 2 回目が 1 月 23 日（月）～27 日（金）であった。

「臨床心理地域援助実習」（いわゆる学外実習科目）は、その科目の特殊性を考慮し、各 Semester 終了後の 1 回のみの実施とした。

(2) 各科目の評価項目

専門職大学院である本研究科では、幅広い領域で活躍する高度専門職業人養成に特化した授業科目を網羅しているため、科目の特殊性に鑑み、それぞれ独自の質問項目を設定している。また、それらの質問項目は普遍的なものではなく、必要に応じて、よりふさわしい評価項目への修正・改定が柔軟に行われることが望ましい。そのことは、学生の声を満遍なく拾い上げ、それらを最大限、授業改善に役立てるためのツールのメンテナンスと言える。

現時点での評価項目を以下に挙げる。

<講義科目>

1. 授業を総合的に 5 段階で評価してください。
2. 授業のテキスト・資料等は適切でしたか（テキスト・資料等を使用した場合のみ回答してください）。
3. 授業の内容は理解できましたか。
4. 授業の内容に満足していますか。
5. 授業を通して臨床心理学の理論に興味が増しましたか。
6. あなたは授業を熱心に受講しましたか。
7. この授業に対するご意見を自由に書いてください。

<演習科目>

1. 授業を総合的に 5 段階で評価してください。
2. 授業の内容は理解できましたか。
3. 授業の内容に満足していますか。
4. 授業を通して臨床心理学に興味が増しましたか。
5. 授業を通して講義（理論）の理解や実習体験の理解につながりましたか。
6. あなたは授業を熱心に受講しましたか。
7. この授業に対するご意見を自由に書いてください。

<実習科目>

1. 実習を総合的に5段階で評価してください。
2. 実習での体験に満足していますか。
3. 実習体験を通して臨床心理学や臨床業務にイメージが増しましたか。
4. 実習体験の中で講義や演習で学んだことが役に立ちましたか。
5. あなたは実習を熱心に取り組みましたか。

また、「エスノグラフィック心理臨床論」と「臨床心理関連行政論」における評価項目は以下の通りである。

「エスノグラフィック心理臨床論」

1. 授業を総合的に5段階で評価してください。
2. 心理臨床を行う上で、状況や文脈の大切さを理解することができましたか。
3. 事象を観察し、意味を考える姿勢が身につきましたか。
4. 臨床心理学の一つの研究方法として、フィールドワーク技法の基礎を身につけることができましたか。
5. 授業に意欲的に取り組むことができましたか。
6. レポートなどの課題に意欲的に取り組むことができましたか。

「臨床心理関連行政論」

1. 授業を総合的に5段階で評価してください。
2. 授業の内容は理解できましたか。
3. 授業の内容に満足していますか。
4. 授業を通して臨床心理実践と社会システムとの関係に関心が高まりましたか。
5. あなたは授業を熱心に受講しましたか。

(3) 結果

結果は以下の通りであった。

表 1. 前期第1～2回目の講義科目における授業評価(4科目平均評価点)

	第1回目			第2回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. 授業を総合的に5段階で評価してください	5.0	3.8	4.6	5.0	4.3	4.8
2. 授業のテキスト・資料等は適切でしたか	5.0	3.7	4.2	5.0	3.7	4.5
3. 授業の内容は理解できましたか	5.0	3.3	4.1	5.0	3.3	4.4
4. 授業の内容に満足していますか	5.0	3.8	4.6	5.0	4.3	4.9
5. 授業を通して臨床心理学の理論に興味が増しましたか	5.0	3.8	4.7	5.0	4.0	4.9
6. あなたは授業を熱心に受講しましたか	5.0	3.5	4.5	5.0	4.3	4.7

表2. 前期第1～2回目の演習科目における授業評価(8科目平均評価点)

	第1回目			第2回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. 授業を総合的に5段階で評価してください	5.0	3.4	4.4	5.0	3.5	4.6
2. 授業の内容は理解できましたか	5.0	3.1	4.1	5.0	3.3	4.3
3. 授業の内容に満足していますか	5.0	3.1	4.2	5.0	3.3	4.5
4. 授業を通して臨床心理学に興味が増しましたか	5.0	3.4	4.6	5.0	3.6	4.7
5. 授業を通して講義(理論)の理解や実習体験の理解につながりましたか	5.0	3.2	4.4	5.0	3.6	4.5
6. あなたは授業を熱心に受講しましたか	5.0	3.6	4.4	5.0	3.5	4.6

表3. 前期第1～2回目の学内実習科目における授業評価(2科目平均評価点)

	第1回目			第2回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. 実習を総合的に5段階で評価してください	5.0	3.5	4.5	5.0	2.5	4.3
2. 実習での体験に満足していますか	5.0	4.0	4.7	5.0	3.0	4.3
3. 実習体験を通して臨床心理学や臨床業務にイメージが増しましたか	5.0	4.0	4.7	5.0	3.0	4.4
4. 実習体験の中で講義や実習で学んだことが役に立ちましたか	5.0	3.5	4.5	5.0	3.0	4.5
5. あなたは実習を熱心に取り組みましたか	5.0	4.0	4.7	5.0	3.0	4.6

表4. 前期第1～2回目の学外実習科目における授業評価(2科目平均評価点)

	第1回目			第2回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. 実習を総合的に5段階で評価してください				5.0	3.5	4.5
2. 実習での体験に満足していますか				5.0	3.5	4.3
3. 実習体験を通して臨床心理学や臨床業務にイメージが増しましたか	(実施なし)			5.0	3.0	4.3
4. 実習体験の中で講義や実習で学んだことが役に立ちましたか				5.0	3.5	4.3
5. あなたは実習を熱心に取り組みましたか				5.0	3.5	4.4

表5. 後期第1～2回目の講義科目における授業評価(1科目評価点)

(科目名) 臨床心理面接学原論	第1回目			第2回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. 授業を総合的に5段階で評価してください	5.0	4.0	4.7	5.0	4.0	4.7
2. 授業のテキスト・資料等は適切でしたか	5.0	4.0	4.7	5.0	4.0	4.9
3. 授業の内容は理解できましたか	5.0	4.0	4.5	5.0	3.0	4.3
4. 授業の内容に満足していますか	5.0	4.0	4.8	5.0	3.0	4.8
5. 授業を通して臨床心理学の理論に興味が増しましたか	5.0	4.0	4.9	5.0	4.0	4.9
6. あなたは授業を熱心に受講しましたか	5.0	4.0	4.5	5.0	4.0	4.7

表6. 後期第1～2回目の講義科目における授業評価(1科目評価点)

(科目名) 臨床心理関連行政論	第1回目			第2回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. 授業を総合的に5段階で評価してください	5.0	3.0	4.4	5.0	4.0	4.4
2. 授業の内容は理解できましたか	5.0	3.0	4.1	5.0	3.0	4.1
3. 授業の内容に満足していますか	5.0	3.0	4.4	5.0	3.0	4.1
4. 授業を通して臨床心理実践と社会システムとの関係に関心が高まりましたか	5.0	4.0	4.7	5.0	4.0	4.6
5. あなたは授業を熱心に受講しましたか	5.0	2.0	4.2	5.0	3.0	4.3

表7. 後期第1～2回目の講義科目における授業評価(1科目評価点)

(科目名) エスノグラフィック心理臨床論	第1回目			第2回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. 授業を総合的に5段階で評価してください	5.0	2.0	3.6	5.0	1.0	3.8
2. 心理臨床を行う上で、状況や文脈の大切さを理解することができましたか	5.0	3.0	4.0	5.0	3.0	4.2
3. 事象を観察し、意味を考える姿勢が身につきましたか	5.0	2.0	3.9	5.0	3.0	4.1
4. 臨床心理学の一つの研究方法として、フィールドワーク技法の基礎を身につけることができましたか	4.0	1.0	3.1	5.0	2.0	3.8
5. 授業に意欲的に取り組むことができましたか	5.0	2.0	3.9	5.0	3.0	4.1
6. レポートなどの課題に意欲的に取り組むことができましたか	5.0	2.0	4.0	5.0	3.0	4.1

表8. 後期第1～2回目の演習科目における授業評価(6科目平均評価点)

	第1回目			第2回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. 授業を総合的に5段階で評価してください	5.0	3.3	4.5	5.0	3.3	4.4
2. 授業の内容は理解できましたか	5.0	3.2	4.2	5.0	3.2	4.2
3. 授業の内容に満足していますか	5.0	3.5	4.4	5.0	3.0	4.3
4. 授業を通して臨床心理学に興味が増しましたか	5.0	3.7	4.6	5.0	3.7	4.5
5. 授業を通して講義(理論)の理解や実習体験の理解につながりましたか	5.0	3.2	4.5	5.0	3.5	4.5
6. あなたは授業を熱心に受講しましたか	5.0	3.5	4.5	5.0	3.5	4.5

表9. 後期第1～2回目の学内実習科目における授業評価(2科目平均評価点)

	第1回目			第2回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. 実習を総合的に5段階で評価してください	5.0	3.5	4.4	5.0	3.5	4.5
2. 実習での体験に満足していますか	5.0	3.5	4.4	5.0	3.0	4.4
3. 実習体験を通して臨床心理学や臨床業務にイメージが増しましたか	5.0	3.5	4.4	5.0	3.0	4.3
4. 実習体験の中で講義や実習で学んだことが役に立ちましたか	5.0	3.0	4.3	5.0	3.0	4.5
5. あなたは実習を熱心に取り組みましたか	5.0	4.0	4.5	5.0	3.5	4.6

表10. 後期第1～2回目の学外実習科目における授業評価(2科目平均評価点)

	第1回目			第2回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. 実習を総合的に5段階で評価してください				5.0	3.5	4.6
2. 実習での体験に満足していますか				5.0	3.5	4.6
3. 実習体験を通して臨床心理学や臨床業務にイメージが増しましたか	(実施なし)			5.0	4.0	4.7
4. 実習体験の中で講義や実習で学んだことが役に立ちましたか				5.0	3.0	4.4
5. あなたは実習を熱心に取り組みましたか				5.0	4.0	4.8

3. 厳格な成績評価制度について

(1) 成績評価方法 (表 11)

成績評価方法は、表 11 の通りである。なお、この厳格な成績評価制度は、講義科目と演習科目に限られる。

表 11. 講義、演習科目の評価基準

	評価	評価得点	
合格	A+	90 点以上	特に優れた成績を示した者
	A	80～89 点	優れた成績を示した者
	B	70～79 点	合格と十分認められる者
	C	60～69 点	合格と認められる最低限度の成績を示した者
不合格	F	60 点未満	

(2) GPA (Grade Point Average) の計算方法 (表 12)

①GPA は、各科目の GP (Grade Point) に各授業科目単位数を乗じ、その総和を GPA 適合の履修登録科目総単位数で割って算出する。

②GPA 評価対象科目は受講生 10 名以上の講義、演習科目であり、受講生が 10 名に満たない授業ならびに実習科目は含まれない。

$$\text{例) GPA} = \{ (\text{臨床心理学原論 GP} \times 2 \text{ 単位}) + (\text{臨床心理面接学原論 GP} \times 2 \text{ 単位}) + (\quad) + (\quad) \dots \} \div \text{GPA 適合の履修登録科目総単位数}$$

表 12. GPA 適合科目 (講義・演習) の GP 配点表

	評価	評価得点	GP 得点	
合格	A+	90 点以上	4.0	特に優れた成績を示した者
	(受講者の上位 20% までの人数につけることができる)			
	A	80～89 点	3.0	優れた成績を示した者
	(A+ と A の学生が、合計で 40% 以内の人数になるようにつける)			
	B	70～79 点	2.0	合格と十分認められる者
	C	60～69 点	1.0	合格と認められる最低限度の成績を示した者
不合格	F	60 点未満	0.0	合格と認めるに足る成績を示さなかった者

※GPA の最高点は 4.0 であり、通常の 5 段階評価とは異なる。

4. 授業公開・授業参観

平成 23 年度の授業公開・授業参観は以下の通りであった。例年のことだが、個人情報保護や守秘義務の観点から、授業公開の対象が研究科内に限定される。臨床心理学や心理臨床においては、なまの事例を検討対象にすることが多いため、やむを得ないことである。

以下の表 13、14 にて、平成 23 年度に実施された授業公開一覧を示す。

表 13. 平成 23 年度前期 臨床心理学研究科授業公開（研究科内のみ公開）

科目名	担当教員	公開日時	講義室等名
福祉心理臨床論	落合美貴子	6月30日（月）4限	総研棟4階カンファレンスルーム
臨床精神医学特論	土岐篤史	7月1日（金）3限	総研棟4階カンファレンスルーム

表 14. 平成 23 年度後期 臨床心理学研究科授業公開（研究科内のみ公開）

科目名	担当教員	公開日時	講義室等名
臨床心理関連行政論	土岐篤史	12月15日（木）3限	総研棟4階カンファレンスルーム
臨床心理面接学原論	中原睦美	12月16日（金）3限	総研棟4階カンファレンスルーム

5. FD研修会

平成 23 年度は下記の通り FD 研修会を開催した。学内実習科目の充実・強化を目的として、また、ピアサポートの文脈でも学部学生への心理的支援を模索するため、先行する関西大学の事例を報告し、本学でのあり方について、その方法論を検討した。

平成 23 年度 FD 研修会

日時：2012 年 2 月 29 日（水）13:30～15:00

場所：総合教育研究棟 4 階カンファレンスルーム

テーマ：「関西大学視察報告」（FD 委員長：金坂弥起）

- ① 関西大学における学内実習の実際
- ② 関西大学における心理臨床カウンセリングルームと学生相談室
- ③ 本学における実現可能性の模索
- ④ その他

文責：臨床心理学研究科 FD 委員長・金坂弥起

連合農学 研究科

F D活動報告書

(平成 23 年度)

大学院連合農学研究科

平成 2 4 年 3 月

大学院連合農学研究科 F D 活動報告

1. はじめに

大学院連合農学研究は、農学系の博士養成を目的に、佐賀大学、鹿児島大学、琉球大学の3大学4研究科が連合した博士課程のみからなる大学院で、23年5月1日現在日本人学生64名外国人留学生69名計133名が在籍している。平成19年度宮崎大学の離脱に伴い、21年度に大幅な組織改組を行い、3専攻9連合講座として再出発し、また単位制の導入を行った。学位申請に12単位必須で、新カリキュラムとして職業人教育や国際感覚を養うことを意図した人材養成セミナーや国際農業概論などを創設することで大学院教育の実質化を目指している。地理的に離れた構成大学間の教育をスムーズにするために、年に一度連大生が一堂に会して行う農学特別講義Ⅰ（一般セミナー）の実施や、多地点制御遠隔講義システムを用いた授業を行うことで教育方法等の工夫を行っている。

F D活動に関しては、平成19年度に代議委員会のサブ委員会としてF D委員会が設けられ、農学特別講義Ⅰ（一般セミナー）を中心とした授業アンケートの集計・解析評価、改善に向けて取り組んでいる。

22年度は、3年に1度実施してきた自己評価・自己点検を行った。そして、さらにその自己評価書に基づき、平成12年度以来途絶えていた外部評価も受けて、21年改組後の連合農学研究科の教育システムや改善状況を把握することにした。

平成23年度のF D活動としては、F D委員会を3回、学内委員によるワーキング会議及びメールによるワーキング会議等を開催し、大学院博士課程の教育に必要な教員の能力とは何かといった観点から、「教員の研究指導能力の評価法など」を検討テーマに掲げ、アンケートのデータ分析、それに伴う改善に向けた検討を継続して行った。

また、本研究科における学位の質の保証を確立するために、アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー及びディプロマポリシーの整備に着手し、素案を作成して、平成24年度の3つのポリシー策定に向けて、さらに検討することとしている。

以下に、その他の活動内容の概略について記す。



多地点制御遠隔講義システムを用いた授業

2. 「農学特別講義 I（一般セミナー）」の開講と改善に向けたアンケート調査の結果と分析

本研究科では、各構成大学の学生が一堂に会し、3日間の集中講義形式で「農学特別講義 I（一般セミナー）」を実施しており、その後受講生を対象にアンケート調査を行い、「農学特別講義 I（一般セミナー）」の改善を図ることが、FD活動の第一の取り組みになると考えている。

「農学特別講義 I（一般セミナー）」は、全学生を対象として、個人の専門に偏らない幅広い農林水産学分野の知識の習得を目的としており、開設した当初から、出席者を対象に実施したアンケート結果を参考に、授業内容等の改善に取り組んできた。

平成23年度は、11月7日～9日の3日間の日程で、6名の外部講師による講義、1年生全員による研究発表を行う専攻セミナー、2年生全員（未発表の3年生を含む。）による研究成果報告を行うポスターセッション（情報交換セミナー）、外部講師を交えて連大教員・学生による交流会を実施した。



「農学特別講義 I（一般セミナー）」の講義



ポスターセッション（情報交換セミナー）

「農学特別講義Ⅰ（一般セミナー）」参加学生から徴した平成23年度のアンケートの集計結果は次表のとおりである。〔参加学生：80名 アンケート提出者：62名 アンケート回収率：77.5%〕

セミナーの理解度について						
〔回答項目〕	セミナー A	セミナー B	セミナー C	セミナー D	セミナー E	セミナー F
ほぼ理解できた	39名 (63%)	19名 (31%)	41名 (66%)	22名 (35%)	28名 (45%)	27名 (44%)
半分程度理解できた	21名 (34%)	35名 (56%)	17名 (27%)	31名 (50%)	28名 (45%)	29名 (47%)
理解できなかった	2名 (3%)	8名 (13%)	4名 (6%)	9名 (15%)	6名 (10%)	6名 (10%)
セミナーの運営・企画等について				専攻セミナーについて		
〔回答項目〕	日程 (時期)	日程 (日数)	会場	〔回答項目〕	グループの分け方	
良い	58名 (94%)	58名 (94%)	56名 (90%)	良い	56名 (90%)	
悪い	3名 (5%)	2名 (3%)	3名 (5%)	改善すべき	6名 (10%)	
その他	1名 (2%)	2名 (3%)	3名 (5%)	無回答	0名	
専攻・情報交換セミナーについて						
〔回答項目〕	プレゼンテーション	ポスターセッション	交流会について			
意義がある	47名 (76%)	49名 (79%)	44名 (71%)			
少しは意義がある	13名 (21%)	9名 (15%)	12名 (19%)			
その他	2名 (3%)	4名 (6%)	6名 (10%)			
無回答	0名	0名	0名			

平成23年度農学特別講義Ⅰ（一般セミナー）アンケート調査結果

①セミナーの理解度について

本研究科の特徴の一つに、外国人留学生が多いことが上げられる。過去に実施したアンケートで、外国人留学生から「英語による講義の実施」を希望する声が多かったことを受け、平成20年度にあつては6セミナー全てを英語で実施し、平成21年度及び平成22年度は、5セミナーが英語による講義であったが、アンケートの自由意見で「英語での講義が難しかった」との意見が見られた。

平成23年度は、4セミナーが日本語と英語を交えた講義だったので、「わかりやすかった」「理解できた」という意見が多かった。

また、講義によっては、「随所に内容に工夫がされており、興味深く拝聴できた」「とても楽しく学べた」等の意見が見られ、学生にとって、非常に有意義であったと思われる。

今後は、外国人留学生と日本人学生全員に伝達するための対策として、日本語と英語の併用や講義資料作成を見直していくとともに、普段の授業や講義においても、学生が興味を示し、理解しやすい内容となるよう、表現の方法、話し方、内容の組み立て等を考える上での参考としたいと思う。

②セミナーの運営・企画等について

「時期」「日数」「会場」については90%以上の学生から「良い」との評価を得られているため、今後も従来通りのスタイルを踏襲したいと考える。

③専攻・情報交換セミナーについて

専攻別セミナー・ポスターセッション（情報交換セミナー）は、前回の反省を踏まえて、なるべく人数の偏りをなくすために3専攻を4グループに分けて実施したので、グループ分けについては90%の学生から「良い」との回答が寄せられている。

また、「改善すべきである」の回答には、「他の専攻にも聞きたい話があるので、グループ分けしなくてもいい」との意見もあった。

「プレゼンテーション」「ポスターセッション」「交流会」とも、『意義がある』『少しは意義がある』を合計すると90%以上の学生が意義を感じていると思われる。

また、改善を求める声として

- ・進行がもう少しスムーズにいくように打合せが必要ではないか。
- ・教員からの助言もあった方がよい。
- ・せっかく構成大学の学生が一堂に会する機会なので、座学だけではなく、施設見学等現場の実態に触れる機会も設けていただければさらに有意義だと思う。

などの意見があり、今後の本セミナー実施において検討したい。

3. 人材養成学生支援セミナーⅠ・Ⅱ

平成22年度から、本研究科では、博士課程修了者が社会から何を求められているかを理解し、今後の修学姿勢及び社会へ出る際の心構え等の修得に役立てることを目的に、各方面で活躍する研究者や人事担当者から講演をしていただく機会として、「人材養成学生支援セミナーⅠ」を開催している。

平成23年度は、7月28日、29日に8コマ7名の外部講師により、多地点制御遠隔講義システムを使用して各構成大学に配信して実施し、学生及び教職員70名以上の参加者があつた。

講師の方々の広い視野からの有意義な講話は、今後企業や研究機関の研究者を目指している学生にとって、大きな励みと貴重な教訓になったと思われる。学生のみならず、教員にとっても教育指導を考える上で、参考になるものが得られたのではないだろうか。

今後もより広い分野の講師を迎えて、多くの学生及び教職員の意識向上につながるよう実施していく

とともに、より一層の協力体制を築けるように、企業及び研究機関の開拓に努力していくことも必要になってくると思う。

また、10月には、水産学部の練習船「かごしま丸」に乗船して、我が国の国土とそれを取り巻く水圏に関する総合的理解を持った人材養成の一翼を担うことを目的とした「人材養成学生支援セミナーⅡ（洋上セミナー）」を実施している。

人材養成学生支援セミナーⅠ・Ⅱともに継続実施し、地域社会、国際社会で幅広く活躍できる能力と意識の養成に繋がるよう整備していかなければならない。

4. 英語論文作成指導セミナー（平成23年度より新規事項）

平成23年度から、学生の英語論文作成のための知識の習得・向上のために英語論文の作成法及び書き方などの指導として、2回に渡り、一部インターネットを使用して、多地点制御遠隔講義システムにより各構成大学へ配信して実施した。

本セミナーは、学生及び教員からも高評価を得ており、次年度の開催を希望する意見が多く、学位論文作成のみでなく、グローバル化に対応した、国際的に活躍できる人材を育成する上でも、実践的な教育として、今後も継続して開催していきたい。

5. 修了生を対象としたアンケートの実施

例年3月と9月に、修了生を対象としたアンケートを実施している。

これは、自己点検・評価の参考とするため、平成18年4月に、平成11～17年度修了者を対象に郵送により実施したのが始まりで、以後は修了時に学生から回答してもらう形を取っている。

平成22年度及び平成23年度の修了生アンケートの集計結果は以下のとおりである。

平成22，23年度修了生アンケート結果

質問項目	評価内容	分布(%)	
		H22年度	H23年度
共通セミナー(一般)の内容について	よい	77	68
	よくない	14	8
	どちらとも言えない	9	4
共通セミナー(特別)の内容・方法について	よい	86	80
	よくない	0	8
	どちらとも言えない	14	12
教員の指導に満足したか	満足した	91	84
	改善して欲しい	9	16
	どちらとも言えない	0	0
中間発表は効果があったか	効果があった	86	92
	効果がなかった	5	4
	どちらとも言えない	9	4
実験または調査を計画・遂行し、データを正確に解析・考察し、かつ説明する能力が身についたか	身についた	95	96
	身につかなかった	0	4
	どちらとも言えない	5	0

専門的な知識及び技術を駆使して、課題を探求し、解決する能力が身についたか	身についた 身につかなかった どちらとも言えない	86 0 14	88 4 8
社会の要求に対して様々な情報を収集・分析し、問題点と課題を理解し、適切に対応する能力が身についたか	身についた 身につかなかった どちらとも言えない	86 5 9	84 8 8
研究設備に満足したか	満足した 改善して欲しい どちらとも言えない	86 5 9	80 20 0
他構成大学との情報交換や交流があったか	よくあった たまにあった ほとんどなかった	23 41 36	24 44 32
学位申請条件のレフリー付き学会誌2編の要求はこのままでよいか	このままでよい 厳しくすべき 優しくすべき	77 5 18	100 0 0

回答学生 H22 年度（日本学生 13 名、留学生 9 名）、H23 年度（日本学生 12 名、留学生 13 名）

（出典：H22. 9、H23. 3、H23. 9、H24. 3 修了生アンケートまとめ）

上記の連大で実施される共通セミナーへの意見、教員の研究指導及び学生自身の能力向上、研究設備や学生生活に関する集計結果は、今後開催される FD 委員会へ提出し、意見交換を行うこととしているが、平成 22 年度、平成 23 年度とも各セミナーの内容、教員の指導、研究設備等への評価が高い中、他の構成大学間の情報交換や交流については、あまり交流が図れなかったとの意見が多かった。

学生からは、他の大学の学生とのコミュニケーションを深める機会を望む声が多く、今後は、構成大学間、日本人学生と留学生間の学生交流の機会を増やすことにも繋がる分野別セミナーの開催なども視野に入れて検討していくこととしたい。

本アンケートについては、今後も継続して実施し、データ分析を行い、本研究科の教育研究の将来に役立たせていきたいと考える。

6. その他の FD 活動

①学位論文未提出者の現況報告に基づく現状把握

標準修業年限内で学位論文を提出できなかった学生の主指導教員は、「学位論文未提出者の現況報告」を提出することになっている。

また、本件に併せて、留年者を出した場合の対策等についても、指導教員及び学生双方を対象とした取り組みを、今後 FD 委員会で検討していくべきと思われる。

②ティーチング・アシスタント制度による活動実態把握

ティーチング・アシスタント（TA）制度は、大学院学生の処遇の改善とともに、指導者としてのトレーニングの機会提供を目的としているが、平成 17 年度までは TA に採用された学生の意見を聞く機会を設けていなかったため、平成 18 年度から TA 業務に従事する連大生を対象に、アンケート形式の「TA 活動実施報告書」を提出させ、その内容を分析することにより、TA 活動の実態把握に努めている。

平成 23 年度にあっては、「指導者になるためのトレーニングとして有益であったか」との質問に対し

「とても参考になった」「まあまあ参考になった」と回答した学生は同実施報告書提出学生全体の96%であった。具体的には、1) 学生個々の個性及び理解度に応じた指導、2) コミュニケーション能力、3) 授業・実験の事前準備や安全管理の重要性、4) 時間・スケジュール管理等を学んだとの回答があり、人に教えることで自分自身の学習にも役立ったとの意見もあった。

さらに、平成19年度からはTAの指導を受けた学生を対象にした、アンケート形式の「TA活動評価調査」も実施している。

また、平成21年度から、TA採用学生及び当該学生の指導教員を対象に、「大学の教育理念とTAの心構え」「TA業務に関わる注意事項」「安全衛生」を指導することを目的とした「TA研修会」を構成大学毎に実施して、TA活動に携わる学生への事前指導を遂行している。

7. おわりに

本研究科のFD活動については、平成18年度末から平成19年度にかけて、FDに関する規則や委員会の整備を行い、教育研究のより一層の充実に向けた体制が整ったといえる。一方、これまでのFD活動を顧みたととき、各種アンケートを実施し、その集計結果に対してFD委員会で意見交換することで完結し、教育研究に反映出来ていなかったように思う。

今後は、本研究科でのFD委員会を含むさまざまなFD活動を、いかに今後の教育力、特に博士課程学生に対する研究指導能力の向上に反映させていくかが検討課題であると思われる。

現在、本研究科では標準修業年限内での学位取得率の向上が課題となっている。これまでも学位取得率向上対策の一環として、1年次に中間報告、2年次に研究の中間発表を義務化させ、主指導教員から1年次終了時点で「研究指導報告書」を、2年次終了時点で「研究経過の『中間報告会』終了報告書」を提出させ、研究の進捗状況を確認するシステムを導入していた。この制度をさらに実効化するために、平成23年度からは、2年生対象の「中間発表会」は、多地点制御遠隔講義システムを利用して、専攻ごとに合同で行い、お互いに相対的な進捗状況等を把握できるようにした。

また、今後は、関係講座にかかわらず、学生及び教員ともに他の講座の発表にも参加するように推進し、更なる学力向上にも繋がると思われる。

そして、「大学院博士課程におけるFD活動とは何か」という原点に立ち返り、教育研究力向上のための一層の努力をしていきたいと考える。